

う ない じゃく こ ぶん ぐん
卯内尺古墳群

卯内尺古墳群第2次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1142集

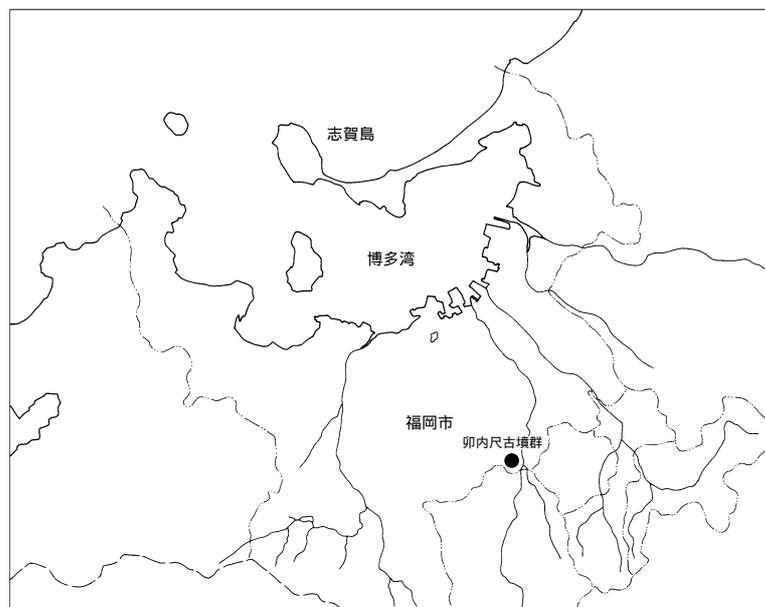
2012

福岡市教育委員会

う ない じやく こ ふん ぐん
卯内尺古墳群

卯内尺古墳群第2次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1142集



調査番号 1021
遺跡略号 UNK-2

2012

福岡市教育委員会



卯内尺古墳群全景（南から）



1) 4号墳全景 (北から)



2) 4号墳全景 (西から)



4号墳主体部人骨埋葬状況（南から）



1) 4号墳主体部全景(南から)



2) 4号墳人骨副葬漆塗櫛出土状況(南から)



1) 4号墳棺外副葬鉄鎌・鉄斧検出状況(南から)



2) 4号墳棺外副葬刀子検出状況(西から)



1) 4号墳供献土器出土状況(北から)



2) 4号墳供献土器(縮尺不同)



1) 3号墳主体部全景(東から)



2) 3号墳裾ベンガラ貯蔵甕(11号遺構)出土状況(北から)



1) 8号墳全景(南から)



2) 8号墳主体部全景(西から)

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、中国や朝鮮半島からさまざまな文物を受容して栄え、市内には数多くの遺跡が広がっています。

福岡市では、さまざまな開発によって失われる埋蔵文化財については、その保護に努め、やむを得ずに失われる文化財については記録を保存するための発掘調査を行っています。

本書は、南区老司三丁目で実施した卯内尺古墳群の発掘調査報告書です。

卯内尺古墳群の立地する那珂川中流域左岸の丘陵上には、老司古墳や卯内尺古墳など古墳時代前期の前方後円墳が数多く築かれています。今回の発掘調査では、5世紀初めに築かれた二段築成の円墳や低墳丘墳が発見されました。このうち2段築成の円墳は、墳丘が葺石で覆われ、箱式石棺には4人の被葬者が手厚く埋葬されていました。4人の合葬は、一族の強い絆を意味し、当時の家族関係や地域社会の営みとその消長を解明する上で貴重な発見となりました。加えて筑前地方における古墳時代人の形質人類学の研究上で貴重な資料となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になると共に、学術研究に活用していただければ幸いです。なお、発掘調査から整理報告までの間には、地元や辰巳開発株式会社をはじめとする多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

..... れ い げ ん

- 1 .本書は、福岡市教育委員会が分譲住宅の造成工事に先立って、平成22(2010)年度に、福岡市南区老司3丁目545 - 3外で緊急発掘調査した卯内尺古墳群第2次調査の発掘調査報告書である。
- 2 .本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
- 3 .遺構は、古墳をSO、土壌をSK、貯蔵穴をSU、石組遺構をSI、土器置遺構をSJ、中世墓をSXと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を通番して01から番号を付した。
- 4 .本書に掲載した遺構と遺物の実測は、小林義彦と谷直子が作成し、製図は小林、谷と今村ひろ子が浄書した。
- 5 .本書に掲載した遺構と遺物の写真は、小林と谷が撮影した。なお、4号墳の埋葬人骨の検出状態は岡紀久夫(文化財写真工房)が、4号墳出土の供献土器は力武卓二(元福岡市埋蔵文化財センター所長)が撮影した。
- 6 .本書の執筆は、2 - 3)4号墳を谷が、その他は小林が担当し、編集は、小林と谷が協議して行った。
- 7 .4号墳に被葬されていた人骨の所見については九州大学大学院比較社会文化研究院の中橋孝博教授と同大学院生高椋浩史氏・米元史織氏の玉稿を戴き報告内容の充実を図った。
- 8 .本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1021	遺跡略号：UNK - 2	分布地図番号；40 - 0153
調査地籍：福岡市南区老司3丁目545 - 3外		
工事面積：5,462m ²	調査対象面積：2,700m ²	調査実施面積：2,540m ²
調査期間：2010年8月27日～2011年1月28日		

本文目次

序

はじめに.....	1
1. 発掘調査にいたるまで.....	1
2. 発掘調査の組織.....	1
3. 立地と歴史的環境.....	3
調査の記録.....	7
1. 調査の概要.....	7
2. 古墳の調査.....	9
1) 2号墳.....	9
2) 3号墳.....	10
3) 4号墳.....	13
4) 5号墳.....	22
5) 8号墳.....	25
3. そのほかの遺構の調査.....	26
1) 土器置遺構.....	26
2) 土壌.....	26
3) 貯蔵穴.....	27
4) 石組遺構.....	28
5) 中世墓.....	28
4. おわりに.....	29

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)	2
Fig. 2 卯内尺古墳群周辺旧地形図 (1 / 25,000)	4
Fig. 3 卯内尺古墳群位置図 (1 / 4,000).....	5
Fig. 4 卯内尺古墳群現況図 (1 / 800)	6
Fig. 5 卯内尺古墳群地形測量図 (1 / 600)	8
Fig. 6 2号墳墳丘測量図 (1 / 150).....	9
Fig. 7 2号墳地山整形測量図 (1 / 150)	10
Fig. 8 2号墳墳丘土器出土状況実測図 (1 / 10)	10
Fig. 9 2号墳出土遺物実測図 (1 / 1・1 / 3・1 / 4).....	10
Fig.10 3号墳墳丘測量図 (1 / 150).....	11
Fig.11 3号墳地山整形測量図 (1 / 150).....	12
Fig.12 3号墳主体部実測図 (1 / 20)	12
Fig.13 4号墳墳丘測量図 (1 / 150)	13
Fig.14 4号墓石実測図 (1 / 100).....	14
Fig.15 4号墳墳丘土層断面実測図 (1 / 100)	15

Fig.16	4号墳主体部実測図 (1 / 20)	16・17
Fig.17	4号墳主体部埋葬人骨検出状況実測図 (1 / 20)	18
Fig.18	4号墳主体部棺内副葬遺物実測図1 (1 / 2)	18
Fig.19	4号墳主体部棺内副葬遺物実測図2 (1 / 3)	18
Fig.20	4号墳主体部棺外副葬遺物実測図 (1 / 3)	19
Fig.21	4号墳裾供献遺物出土状況実測図 (1 / 30)	19
Fig.22	4号墳裾出土供献遺物実測図 (1 / 4)	20
Fig.23	4号墳主体部墓壙出土遺物実測図 (1 / 4)	20
Fig.24	4号墳墳丘出土遺物実測図 (1 / 4)	20
Fig.25	5号墳墳丘測量図 (1 / 150)	21
Fig.26	5号墳地山整形測量図 (1 / 150)	22
Fig.27	8号墳丘測量図 (1 / 150)	23
Fig.28	8号墳地山整形測量図 (1 / 150)	23
Fig.29	8号墳主体部実測図 (1 / 20)	24
Fig.30	8号墳主体部出土遺物実測図 (1 / 1)	25
Fig.31	11号土器置遺構実測図 (1 / 20)	25
Fig.32	11号土器置遺構出土遺物実測図 (1 / 4)	25
Fig.33	12号土壙実測図 (1 / 30)	26
Fig.34	14号土壙実測図 (1 / 30)	27
Fig.35	14号土壙出土遺物実測図 (1 / 4)	27
Fig.36	20号土壙実測図 (1 / 30)	28
Fig.37	17号貯蔵穴実測図 (1 / 40)	28
Fig.38	18号貯蔵穴・19号土壙実測図 (1 / 40)	29
Fig.39	13号石組遺構実測図 (1 / 30)	30
Fig.40	15号石組遺構出土遺物実測図 (1 / 1)	30
Fig.41	16号墓実測図 (1 / 30)	30
Fig.42	卯内尺古墳群地山整形測量図 (1 / 500)	31

図版目次

巻頭PL 1	卯内尺古墳群全景（南から）	PL.13	1）4号墳南側埋葬人骨検出状況（北から）
巻頭PL 2	1）4号墳全景（北から）		2）4号墳副葬漆塗櫛検出状況（南から）
	2）4号墳全景（西から）	PL.14	1）4号墳棺外副葬鉄鎌・鉄斧検出状況（南から）
巻頭PL 3	4号墳主体部人骨埋葬状況（南から）		2）4号墳棺外副葬刀子検出状況（西から）
巻頭PL 4	1）4号墳主体部全景（南から）	PL.15	1）4号墳西面葺石構築状況（西から）
	2）4号墳人骨副葬漆塗櫛出土状況（南から）		2）4号墳北西面葺石構築状況（西から）
巻頭PL 5	1）4号墳棺外副葬鉄鎌・鉄斧検出状況（南から）	PL.16	1）4号墳南西面葺石構築状況（西から）
	2）4号墳棺外副葬刀子検出状況（西から）		2）4号墳南面葺石基石構築状況（南から）
巻頭PL 6	1）4号墳供献土器出土状況（北から）	PL.17	1）4号墳南西面葺石構築状況（南から）
	2）4号墳供献土器（縮尺不同）		2）4号墳南東面葺石構築状況（南から）
巻頭PL 7	1）3号墳主体部全景（東から）	PL.18	1）4号墳北東面葺石構築状況（北東から）
	2）3号墳裾ベンガラ貯蔵甕（11号遺構）出土状況（北から）		2）4号墳東面葺石構築状況（東から）
巻頭PL 8	1）8号墳全景（南から）	PL.19	1）4号墳西側墳裾供献土器検出状況（東から）
	2）8号墳主体部全景（西から）		2）4号墳西側墳裾供献土器検出状況（南から）
PL. 1	卯内尺古墳群調査前遠景（北東から）	PL.20	1）4号墳西側墳裾供献土器検出状況（東から）
PL. 2	卯内尺古墳群調査前近景（北東から）		2）4号墳西側墳裾供献土器検出状況（南から）
PL. 3	卯内尺古墳群地山整形全景（東から）	PL.21	1）4号墳西側墳裾供献土器検出状況（西から）
PL. 4	卯内尺古墳群地山整形近景（北から）		2）4号墳西側墳裾供献土器検出状況（西から）
PL. 5	1）2・5号墳調査前全景（北から）	PL.22	1）4号墳主体部完掘状況（北から）
	2）2号墳調査前墳丘全景（南から）		2）4号墳主体部完掘状況（東から）
PL. 6	1）2号墳地山整形全景（西から）	PL.23	1）4号墳主体部北側小口壁（南から）
	2）2号墳土器出土状況（北から）		2）4号墳主体部南側小口壁（北から）
PL. 7	1）3号墳調査前墳丘全景（東から）	PL.24	1）4号墳墓壙半裁状況（南から）
	2）3号墳地山整形全景（北から）		2）4号墳主体部墓壙半裁状況（南から）
PL. 8	1）3号墳主体部全景（北から）	PL.25	1）4号墳主体部半裁状況（南から）
	2）3号墳主体部横断面（東から）		2）4号墳土層断面（南から）
PL. 9	1）4号墳調査前墳丘全景（西から）	PL.26	1）5号墳調査前墳丘全景（東から）
	2）4号墳全景（北から）		2）5号墳地山整形全景（北から）
PL.10	1）4号墳主体部蓋石検出状況（西から）	PL.27	1）8号墳調査前墳丘全景（南から）
	2）4号墳墓壙土層断面（北から）		2）8号墳地山整形全景（南から）
PL.11	1）4号墳主体部開棺全景（北から）		
	2）4号墳主体部開棺状況（南から）		
PL.12	1）4号墳主体部埋葬人骨検出状況（東から）		
	2）4号墳主体部埋葬人骨検出状況（東から）		

- PL.28 1) 8号墳主体部検出状況(北から)
2) 8号墳主体部検出状況(東から)
- PL.29 1) 8号墳主体部覆蓋痕(北から)
2) 8号墳主体部東小口壁覆蓋痕(北から)
- PL.30 1) 8号墳主体部東小口壁覆蓋痕(西から)
2) 8号墳主体部西小口壁覆蓋痕(東から)
- PL.31 1) 8号墳主体部全景(南から)
2) 8号墳主体部西側壁(北から)
- PL.32 1) 8号墳主体部東側壁(西から)
2) 8号墳主体部西小口壁(東から)
- PL.33 1) 8号墳裏込石除去後の南側壁(南から)
2) 8号墳主体部縦断面(南から)
- PL.34 1) 11号土器置遺構甕・小型丸底壺出土状況
(北から)
2) 12号焼土壙全景(東から)
- PL.35 1) 13号石組遺構(南から)
2) 15号石組遺構全景(西から)
- PL.36 1) 14土壙全景(北から)
2) 16号墓全景(南から)
- PL.37 1) 17号貯蔵穴全景(北から)
2) 18号貯蔵穴、19号土壙全景(西から)
- PL.38 卯内尺古墳群出土遺物(縮尺不同)

はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

卯内尺古墳群は、福岡市南区老司3丁目545-3外の地にあり、油山山塊の東麓に屹立する片縄山から派生した舌状丘陵先端に立地している。現況は山林で、丘陵上には雑木や孟宗竹が繁茂し、パソコンや自転車などが不法投棄されていたが、この地域に残る最後の緑地帯でもあった。

平成21(2010)年9月29日、北九州市の辰巳開発株式会社から分譲住宅の建設に伴う造成計画が提出され、埋蔵文化財の有無についての照会が申請された。この丘陵の基部には、福岡平野で最大級の前方後円墳である老司古墳が占地している。卯内尺古墳群は、昭和53(1978)年の分布調査では、丘陵長が350mほどの尾根上に4基の円墳が並んでいると報告されていた。このうち1号墳は、丘陵の基部に占地し、先端部にある3基とは150mほどの距離をおいて単独で立地している。また、南へ120mの距離には老司古墳がある。この卯内尺古墳群1号墳は、平成3(1991)年の発掘調査で老司古墳に先行する全長が73~78mの前方後円墳であることが判明した。

埋蔵文化財課では、今回の開発計画に先立って現地踏査を実施して古墳の再確認作業を行なった。その結果、住宅の造成で切り崩された南端の残丘面で墳丘の2/3を失った円墳(5号墳)とその北東裾で小型の低墳丘墳(6号墳)を、更に2号墳と3号墳の間で墳丘の半分を失った7号墳の3基の古墳を確認した。この結果を受けて、発掘調査の対象を6基として記録保存の協議を重ねた。

発掘調査には、雑木林の伐開が必要で、その作業の完了を待って平成22(2010)年8月27日に開始した。発掘調査は、まず丘陵上に残された雑木の切り屑や不法投棄物などの処理からはじめ、その過酷な作業に2週間を要した。その後、調査は順調に進捗したが、11月下旬には4号墳の箱式石棺から4体の被葬人骨が検出され、俄かに緊張した。この間、4号墳の北で新たに8号墳を発見し、5基の古墳と貯蔵穴や土壌を検出して平成23(2011)年1月28日にすべての調査を終了した。

発掘調査は、猛8月から厳寒の1月まで続いた。発掘作業に従事した方々のこの間の労苦と埋蔵文化財の保護にご理解とご協力をいただいた辰巳開発株式会社の関係者諸氏に改めて感謝します。

2. 発掘調査の組織

調査委託 辰巳開発株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財第2課

埋蔵文化財第2課長 田中壽夫

埋蔵文化財第2課調査1係長 米倉秀紀

調査庶務 埋蔵文化財第1課管理係 井上幸江

調査担当 埋蔵文化財第2課 小林義彦

技能員 谷直子

調査・整理 秋本君子 石橋陽子 伊藤美伸 今村ひろ子 浦崎てい子 大瀬良清子 坂梨美紀 知花繁代 塚本よし子 土斐崎孝子 遠山勲 西田文子 杵山恵子 日高芳子 馬場イツ子 濱フミコ 福田操 増田ヒロ子 松下さゆり 諸泉良子 森田祐子 渡部律子 渡辺律子

発掘調査では、中橋孝博(九州大学大学院比較社会文化研究院)、山口譲治(前埋蔵文化財第1課長)、横山邦継(前文化財整備課長)、米倉秀紀(埋蔵文化財第2課調査1係長)、藏富士寛(埋蔵文化財課)の各氏にご指導やご教示をいただいた。記して謝意を表します。

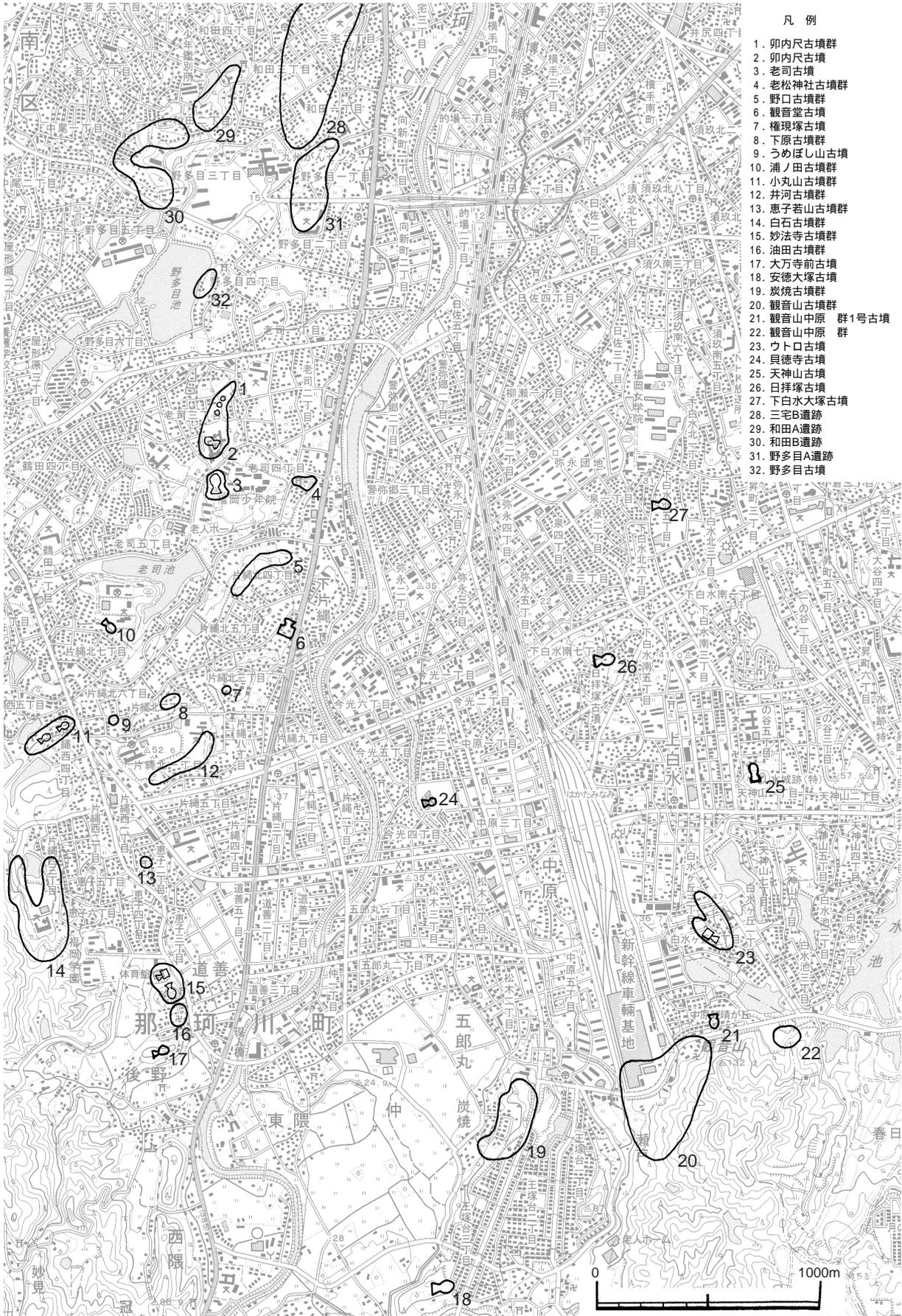


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

3. 立地と歴史的環境 (Fig.1・2)

卯内尺古墳群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘にむかって開口する博多湾に面した沖積平野である。卯内尺古墳群は、この福岡平野の西縁にあり、東は三郡山系より派生した四王寺山塊と月隈丘陵に、西は背振山系より派生した油山山塊によって囲繞遮断され、平野の中央部には那珂川と御笠川が北流して博多湾に注ぎ込んでいる。この二つの河川によって博多湾に面した中～下流域には広大な沖積地が形成されている。この那珂川と御笠川に挟まれた中流域には、阿蘇山の噴火によるAso 4火砕流によって形成された八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積する標高11～15mの低平な河岸段丘が北の博多湾にむかって断続的に長くのび、眼下の沖積地は、弥生時代以降生産活動の主要な場となっている。

福岡平野の西縁を画する油山山塊の東麓には、花崗岩を基盤層とする標高が293mの片縄山が屹立し、その東辺には、複雑に開析された舌状の丘陵が八つ手の葉のように幾重にも派生しており、その丘陵上には、前方後円墳や円墳群が数多く点在している。

この那珂川中流域の左岸地帯を考古学的に概観すると、可耕地そのものが狭小なことに由来するものか、旧石器時代～古代、中・近世の遺構が見出されるが、断片的で調査例が少ない。稲作農耕が始まる縄文時代晩期～弥生時代前期には野多目A・B遺跡で水路や水口などの初期の水田遺構が検出されている。野多目C遺跡では、弥生時代前期後葉～中期初めの竪穴住居や貯蔵穴群が、和田B遺跡では前期中葉の貯蔵穴群が検出されているが、中期後半～後期前半の遺跡は減少する。観音山の麓に広がる右岸地帯とは好対照をなしている。

古墳時代になると、丘陵の東麓一帯に老司古墳や卯内尺古墳などの前方後円墳や円墳が造墓される。卯内尺古墳群もそのひとつで、片縄山から派生する舌状丘陵の先端部に立地しており、丘陵の基部には、福岡平野最大の前方後円墳である老司古墳や卯内尺古墳が占地している。この那珂川中流域の左岸に広がる沖積地を望む丘陵地帯には、北から和田B古墳群、野多目古墳群、卯内尺古墳群、老松神社古墳群、野口古墳群、観音堂古墳、箱池古墳、大牟田古墳群、四十塚古墳群、柏原古墳群、浦ノ田古墳、小丸古墳群、井川古墳群、若山古墳群、白石古墳群などが繋がるようにして分布している。このうち、老松神社古墳群や小丸古墳群、柏原古墳群、妙法寺古墳群には30m規模の小さな前方後円墳が含まれている。このように古墳時代前半期には、前方後円墳をはじめとする多くの古墳が分布しているが、中～後期には、浦ノ田古墳、小丸古墳群、中尾古墳などが点在するものいずれも古墳群的な群構成をせずに単独で造墓されものが多い。しかも小丸古墳や浦ノ田古墳は小規模な前方後円墳である。

これに対して、那珂川の右岸地域では、貝徳寺古墳、安徳大塚古墳、日拝塚古墳、下白水大塚古墳、上白水天神山古墳、観音山古墳群中原 群 1号墳、竹ヶ本古墳、須玖御陵古墳などの前方後円墳があるほかに、観音山の山麓には大小合せて数百基に及ぶ後期の群集墳である観音山古墳群が広がっている。また、西方の油山山麓でも大規模な群集墳が形成されている。このように那珂川中流域の左岸地帯では、前期には老司古墳や卯内尺古墳などの前方後円墳が盛んに造墓されるが、中～後期には群集墳の造営はきわめて少ない。これに対して右岸地帯や油山山麓では、前方後円墳の造墓に続いて大規模な群集墳の造墓活動が盛んに行なわれていることに比べて様相を大きく異なり、好対照な現象と云える。それが単に首長墓層の権力移譲なのか、あるいは生産基盤の格差に因るものなのか、その要因の検討が必要であろう。

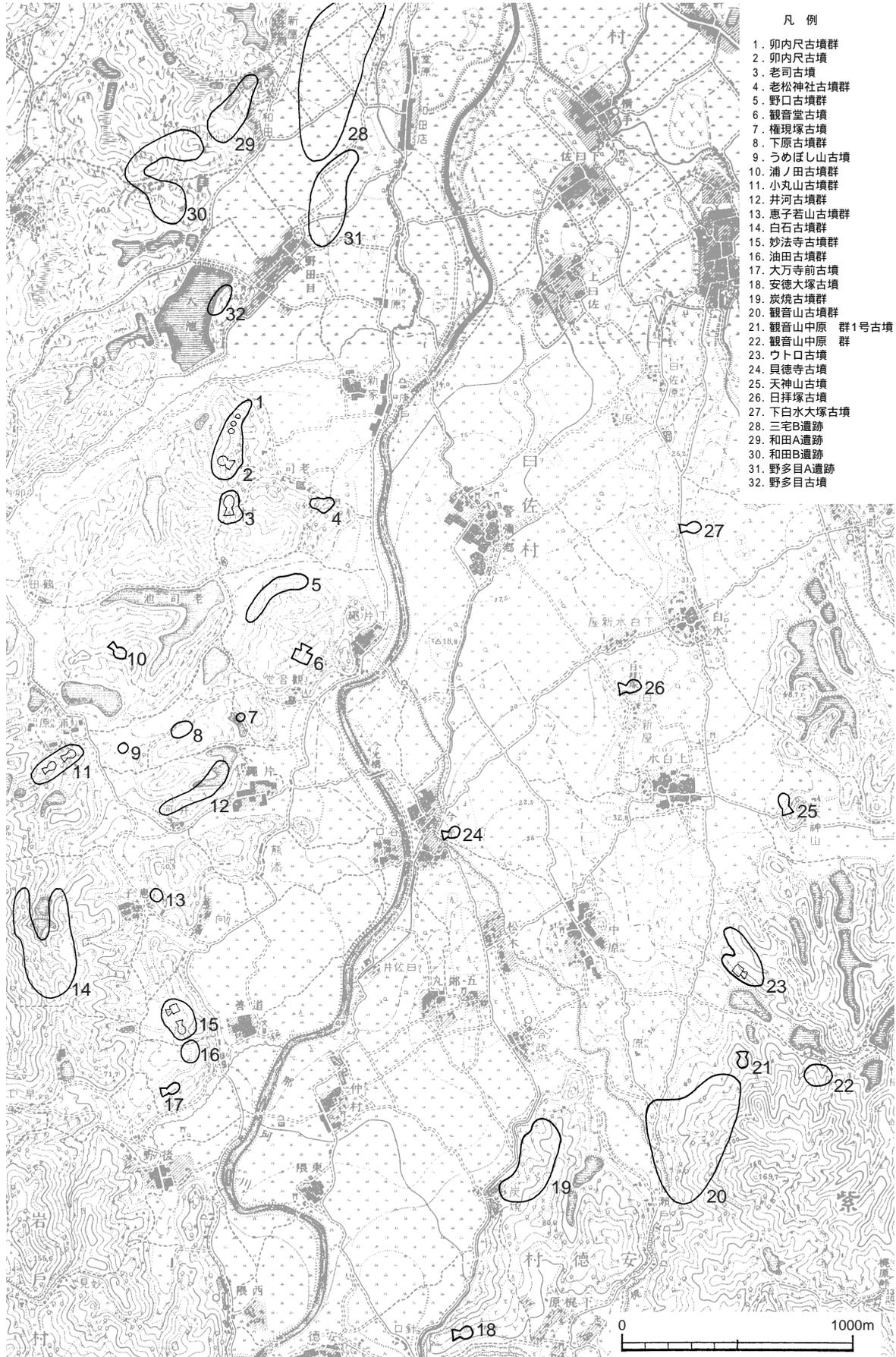


Fig. 2 卯内尺古墳群周辺旧地形図 (1/25,000)

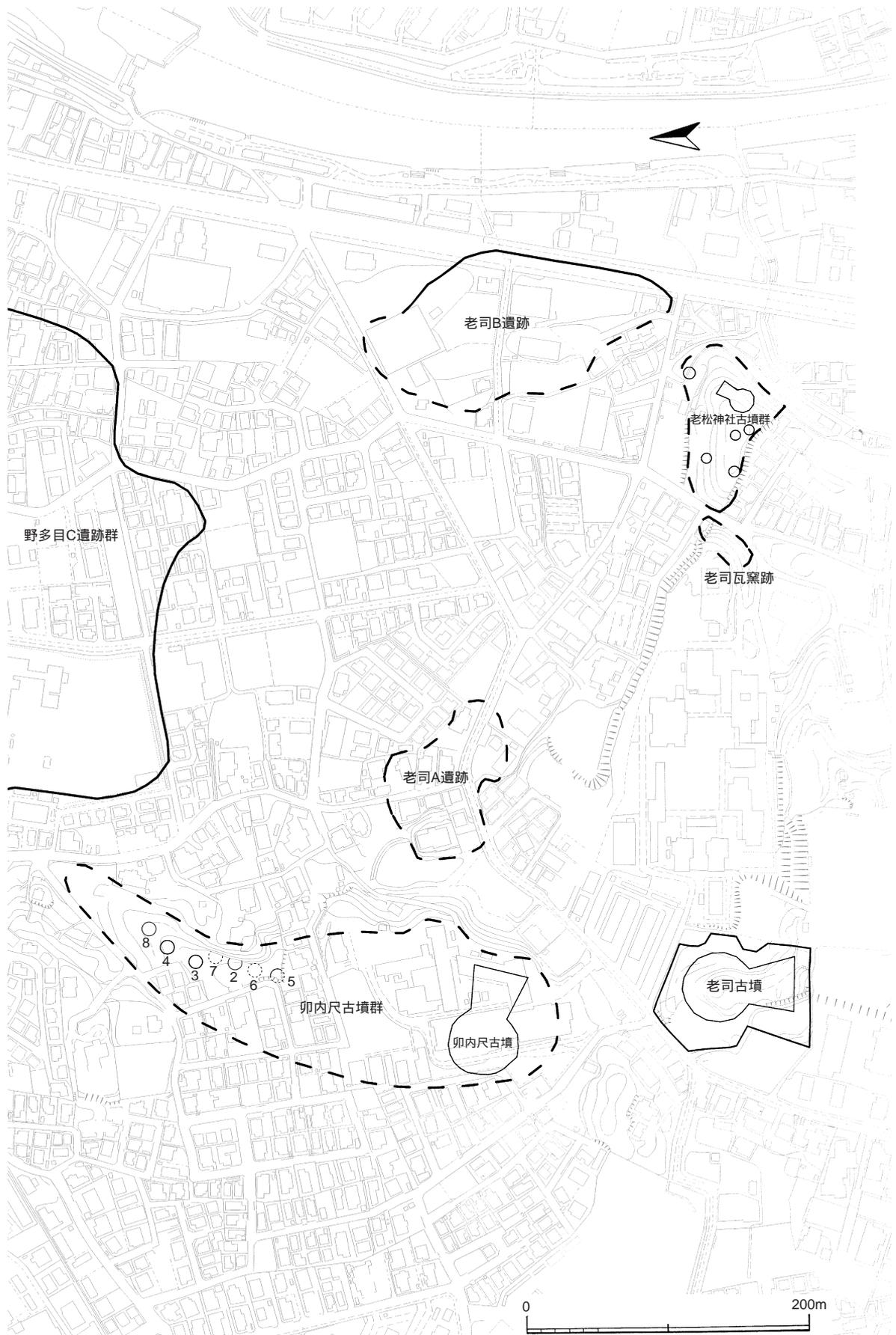


Fig. 3 卯内尺古墳群位置図 (1/4,000)



Fig. 4 卯内尺古墳群現況図 (1/800)

．調査の記録

1．調査の概要

福岡市南区老司3丁目45-3ほかに位置する卯内尺古墳群は、片縄山の東麓から派生した舌状丘陵の先端部に立地する小円墳群である。北へ延びる丘陵の基部には、昭和55（1980）年の分布調査で卯内尺古墳群を構成する円墳として登録された1号墳があり、さらにその南には福岡平野最大の前方後円墳である老司古墳が立地している。この1号墳は、平成3（1991）年の発掘調査で、全長が73～78mで、仿製の三角縁獣帯三神三獣鏡が副葬されていたと伝えられている。故に1号墳は、卯内尺古墳と登録され、卯内尺古墳群は、2～4号墳からなる円墳群とされた。

卯内尺古墳群の所在するこの丘陵には、これまでに幾度となく開発計画が企画されたが、実現には至らなかった。この間の経緯を受けて埋蔵文化財課では、現地踏査を実施して古墳の再確認作業を行なった。その結果、既存住宅の造成で切り崩された南端の残丘面で墳丘の大半を失った円墳（5号墳）とその北東裾で小型の低墳丘墳（6号墳）を、更に2号墳と3号墳の間で墳丘の半分を失った7号墳の3基の古墳を確認した。この結果、6基の古墳を調査対象として記録保存の協議を重ねた。

卯内尺古墳群の現況は、雑木と孟宗竹が繁茂する山林であった。発掘調査には、雑木の伐開と切り立った崖面の転落防止策、周辺道路からの無断侵入の防止策が必要不可欠であった。このうち崖面の転落防止用の防護柵は埋蔵文化財課が担当し、と は造成施工社の日本国土開発株式会社が担当することになった。発掘調査は、雑木の伐開の完了を待って平成22（2010）年8月27日より着手したが、丘陵上には雑木の大きな切り屑やパソコン、自転車などの不法投棄物が散乱しており、まずその撤去作業から始めた。丘陵上から崖下へ廃棄物を引き下ろす作業は、すべて人手頼りでかつ炎天下で行なう過酷な作業であった。これに2週間を要し、その間に丘陵の現況測量を行なった。その過程で、4号墳の北東に直径が8～9mの低墳丘墳の存在が確認され、これを8号墳とした。この現況測量の終了後、株式会社側技に委託してラジヘリによる空中写真の撮影を行なった。丘陵上には、樫木などの大きな切株があり、人力による抜根と表土層の除去を断念し、重機によってその作業を実施した。作業にあたっては、慎重にかつ薄く剥ぐことで古墳への影響を最小限に留めた。

古墳の調査は、はじめに予定された6基に8号墳を加えた7基を対象としたが、調査の進捗に従って6号墳と7号墳が古墳でないことが判明し、都合5基の古墳を丘陵基部の南から先端にむかって順次調査した。このうち4号墳は、測量時から墳丘上に円礫が見え隠れしており、葺石で覆われている可能性が示唆されていた。そこで東西南北に4本のトレンチを設定して墳丘の確認を行なった結果、墳丘斜面に円礫を葺いた二段築成の円墳であることが判明した。11月中旬に主体部の箱式石棺を検出し、開棺したところ棺内から4体の被葬人骨が良好な状態で検出され、調査は俄かに緊張した。2・3・8号墳は、直径が10～13mの低墳丘墳で、2号墳の主体部は消失していたが、3号墳は土壙墓、8号墳は箱式石棺墓が主体部で、いずれも木蓋で覆蓋されていた。丘陵の南端部にある5号墳は、比高が1.5mほどの墳丘を残していたが、主体部は既に消失していた。また、この間に舌状丘陵北端の2,000㎡が追加して造成されることになり、急遽試掘調査を実施して遺構の確認にあたった。遺構の確認は、幅が2mのトレンチを尾根線に沿って47m（（T-1））、東側の緩斜面上の6m（T-2）の2本を設定して行った。その結果、T-1の南端で、中世墓を検出したほかに遺構はなく、約200㎡を追加して調査範囲に加えた。このほかに4号墳の盛土下では弥生時代前期の土壙を、8号墳の周辺で貯蔵穴や焼土壙、石組遺構などを検出して平成23（2011）年1月28日にすべての調査を終了した。



Fig. 5 卯内尺古墳群地形測量図 (1/600)

2. 古墳の調査

古墳は、調査前は6基であったが、現況測量時に1基（8号墳）を新たに発見して7基を対象として調査を開始したが、調査の進捗に伴って6号墳と7号墳が古墳でないことが判明し、最終的に5基の古墳を調査した。古墳は、舌状に延びた丘陵頂部の眺望に優れた尾根線上に列をなすように築造されている。東側の斜面は崖面で大きく抉り取られているが古墳の築造は無かったと思われる。反面、丘陵基部の南～西側は卯内尺古墳（1号墳）までの尾根線上に古墳の築造が無かったとは断言できない。調査開始前は、5号墳を除いて低墳丘墳と考えていたが、4号墳は盛土に円礫を葺いた二段築成の円墳で、箱式石棺内に4人が合葬されていた。また、8号墳は、4号墳の葺石を剥ぎ取って箱式石棺裏込め石にしていた。5基の古墳の中で主体部を検出した3・4・8号墳はいずれも棺床に玉砂利状の円礫を敷き詰め、ベンガラを撒くと云う共通性が認められた。

1). 2号墳SO - 02

墳 丘 (Fig.6~8 PL.5・6)

2号墳は、5号墳の墳裾から17m北東の尾根線上に立地する低墳丘の円墳で、東半部は崖面の崩落で消失している。墳頂部の標高は33mで、南北には西から等高線が彎入するような浅い溝状の凹みを有することから低平な円墳であることが判明していた。古墳の基盤層は、花崗岩パイラン土上に載った灰青～灰白色粘土（八女粘土）層と黄褐色粘土（鳥栖ローム）層で、墳丘はこの黄褐色土層を削り出すように地山整形して墳丘を造り出し、盛土は一切ない。この地山整形に際して、北と南には幅が1.6～2.3mの浅い凹みが馬蹄形状に巡っている。墳径は、墳裾から計測すると11.5m、溝状の凹みを入れると15～16mの円墳になる。墳頂の標高は32.5mで、墳丘は50cmの高さである。この墳丘の北縁から壺形埴輪片1個体分が土壌状の浅い凹みに横倒しの状態で出土した。また、西側の墳裾で1個の切子玉が採集された。

内部主体

主体部は、崖面に面した墳頂部にあったと推定されるが、崖面の崩落で消失しており、崖面断面観

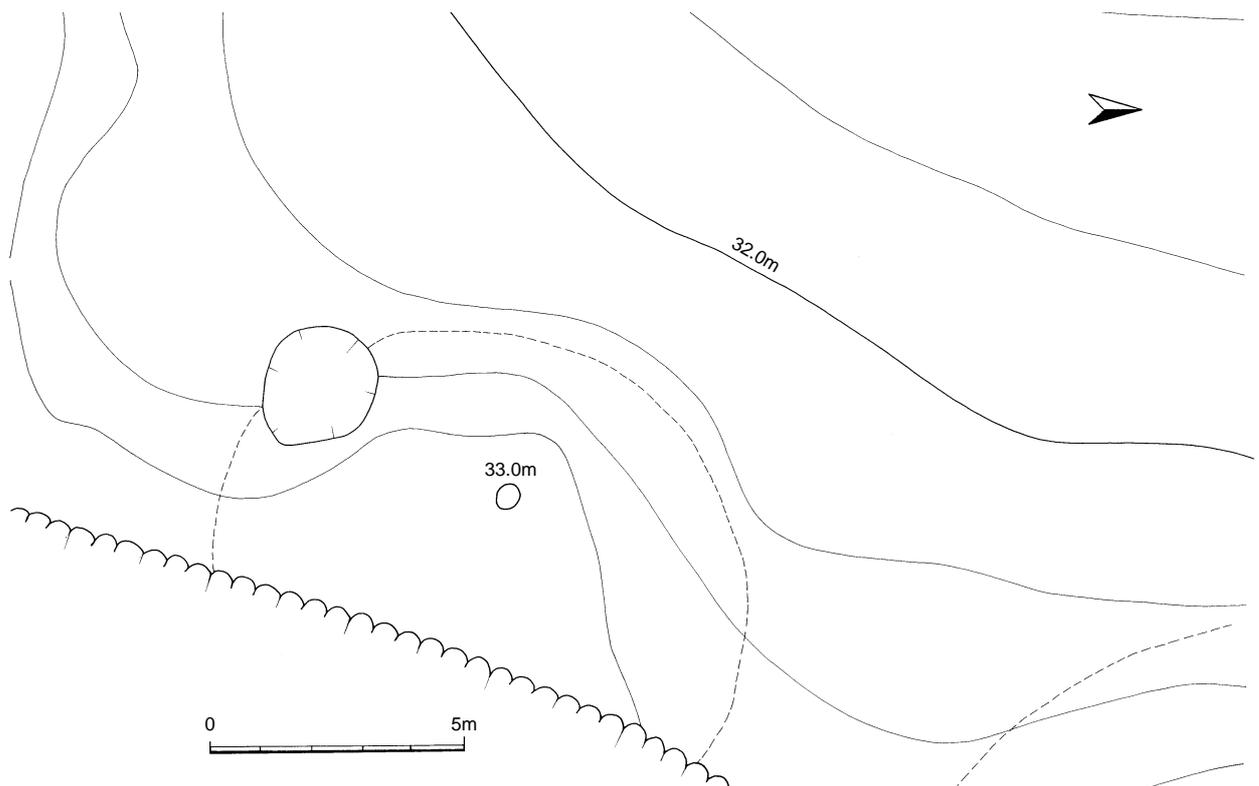


Fig. 6 2号墳墳丘測量図 (1/150)

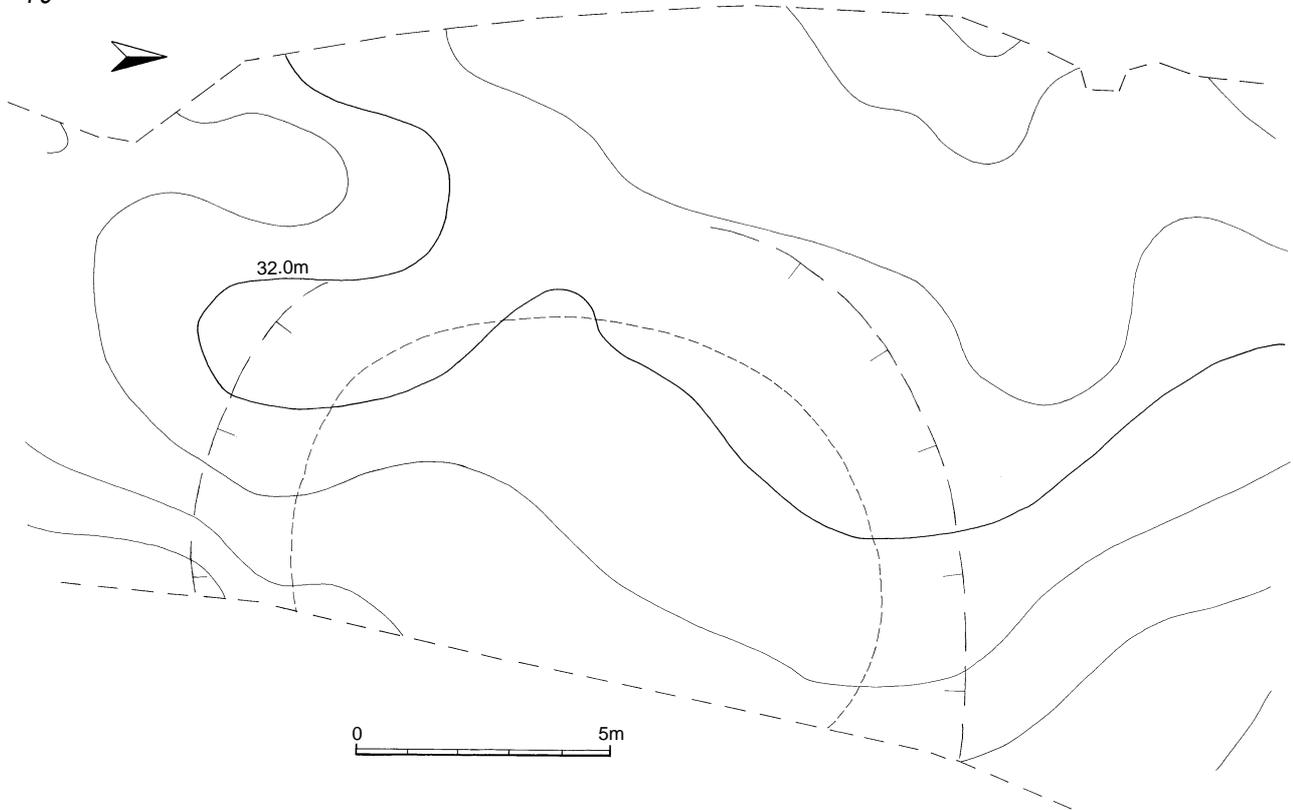


Fig. 7 2号墳地山整形測量図 (1/150)

察でも確認できなかった。形態的には土壙墓の可能性が高い。墳頂の崖面に沿った主体部の推定地付近から鉄器片と土師器小片が出土した。

出土遺物 (Fig.9 PL.38)

1は、口径が36.2cmの壺形埴輪片で、胴部片とは接合しなかった。1次口縁部は、ほぼ水平に外反し垂直に立ち上がった後に緩やかに外反する。胎土は良質で、微細～小砂粒を比較的多く含むほかに少量の雲母微細を含む。器面には化粧土塗布後に丹で彩色している。色調は明赤橙色。2は、断面形が2.5～3mmの方形をなす鉄器片で、鉄鏃の茎片か。3は、長さが1.09cm、最大径が0.62cm、孔形が0.17cmの切子玉で、6面をなし面取は甘い。滑石製か。

2). 3号墳SO - 03

墳 丘 (Fig.10・11 PL.7)

3号墳は、4号墳の南側墳裾のすぐ南に立地する低墳丘の円墳である。南西側の後背面は、旧7号墳とされた高まりを馬蹄形状に削り出し、そこから舌状のフラット面が9mほど張り出すように北東へ延びた後、緩やかに1mほど比高を減じている。墳頂部の標高は32mで、南側斜面面および4号墳と接する東～北方に微かな墳裾状の変換線が観察されるほどで、古墳としては懐疑的であった。この時点での墳径は北西～南東が11.2m、北東～南西が8mの楕円形プラン

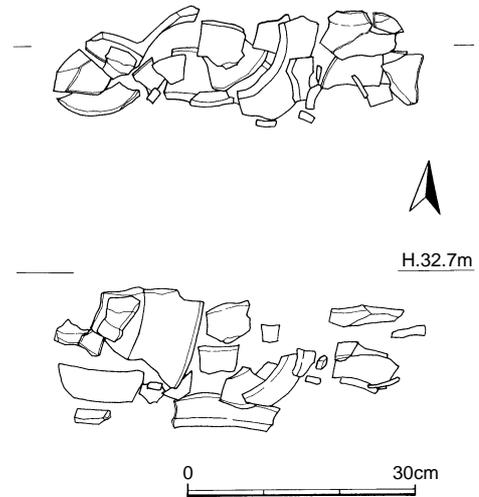


Fig. 8 2号墳墳丘土器出土状況実測図 (1/10)

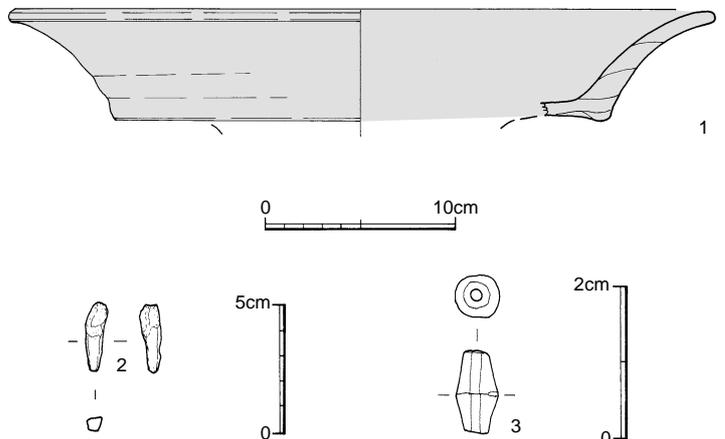


Fig. 9 2号墳出土遺物実測図 (1/1・1/3・1/4)

を呈していた。古墳は、後背面の黄褐色粘土層を馬蹄形状にわずかに削り出して地山整形し、南西側の墳裾との間は浅く溝状に掘り窪めて墳裾を造り出しており、その比高差は20cmである。一方、南側の斜面は、東側から等高線がわずかに彎入して墳裾状をなしているが、地山の削り出しはきわめて曖昧で、墳裾は明確ではない。4号墳の墳裾と接する東側～北側は等高線に沿ってなだらかに削り出して、墳裾を明確にしており、4号墳との境は周溝状をなしている。古墳は、直径が13mのやや楕円形的な円墳である。古墳を尾根下の4号墳側から見ると比高差が1.2mあって見上げる感があるが、尾根上の西側から見ると古墳としては懐疑的にならざるを得ない。また、北東縁の墳裾上でベンガラを入れた土師器甕と小型丸底壺が放置された状態で出土したが(SJ-11)、このベンガラが3号墳の礫床に撒かれたものか、あるいは4号墳の棺床に撒かれたものの残余物かは判然としない。

内部主体 (Fig.12 巻頭図版PL.7 PL.8)

主体部は、墳頂部の中央で円礫敷きの木蓋土壙墓を検出した。土壙墓は、はじめに長軸が250cm、短軸が72cm、深さが5cmほどの隅丸長方形プランを呈する1次墓壙を掘り、その10～15cm内側に深さが5～8cmの2次墓壙を掘り込む、いわゆる2段掘りの構造をなしている。次に、この2次墓壙からさらに13～15cmほどの深さに3次墓壙を掘り込み、その内側に灰青～灰白色粘土を小口壁側で10～18cm、側壁側で6～8cm、床面上で3～5cmの厚さに塗り込めて土壙の壁面と床面を造り出している。この3次墓壙上に割板材を横架して木蓋とし、その隙間は灰青粘土(八女粘土)で目貼りしている。床面と棺床には、暗茶褐色土に黄褐色粘土ブロックの混入土を敷き、その上に1～4cmほどの小円礫を隙間なく敷き詰めて礫床としている。その礫床上にはベンガラが撒かれていた。遺物は、何ら出土しなかった。(小林義彦)

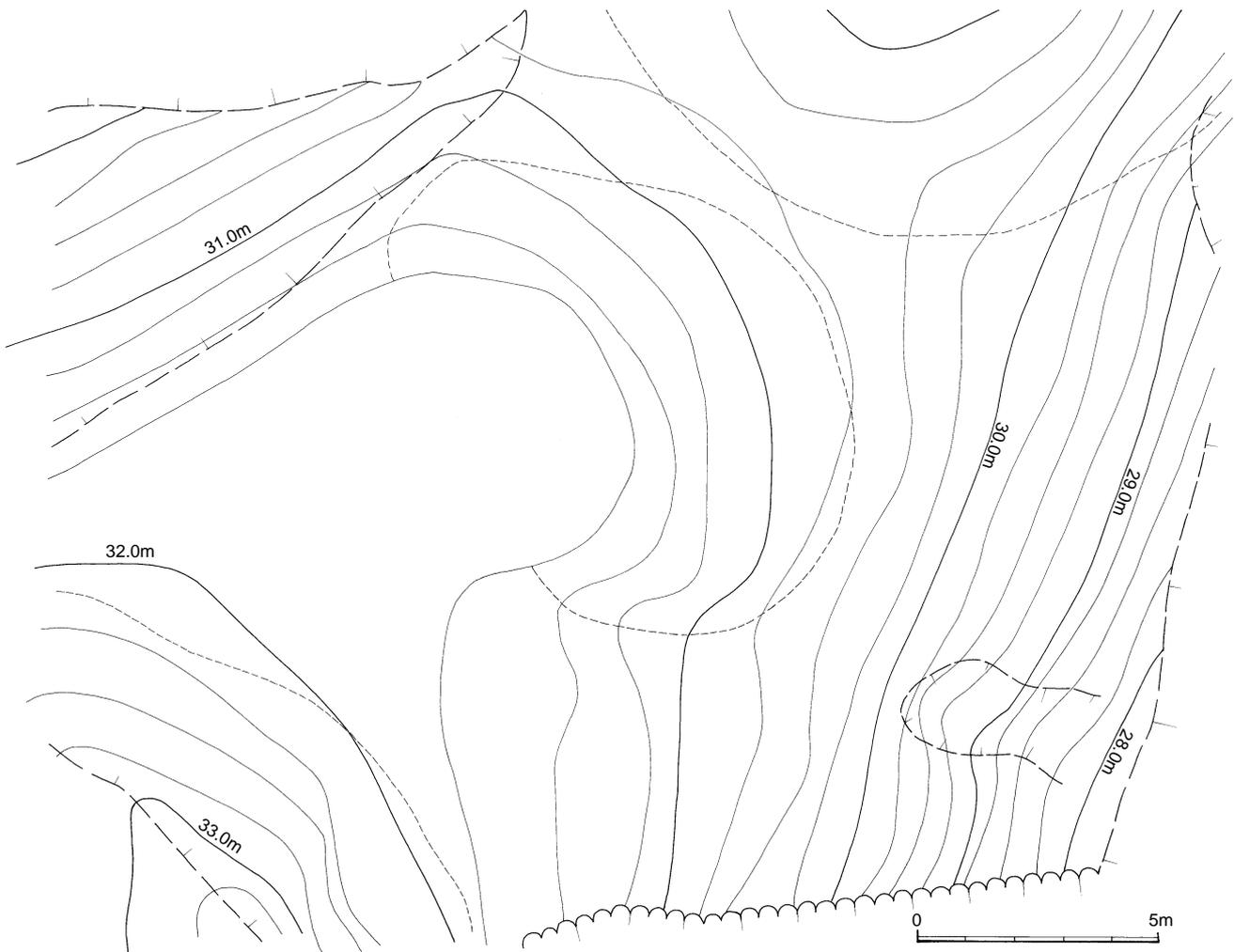


Fig. 10 3号墳墳丘測量図 (1/150)

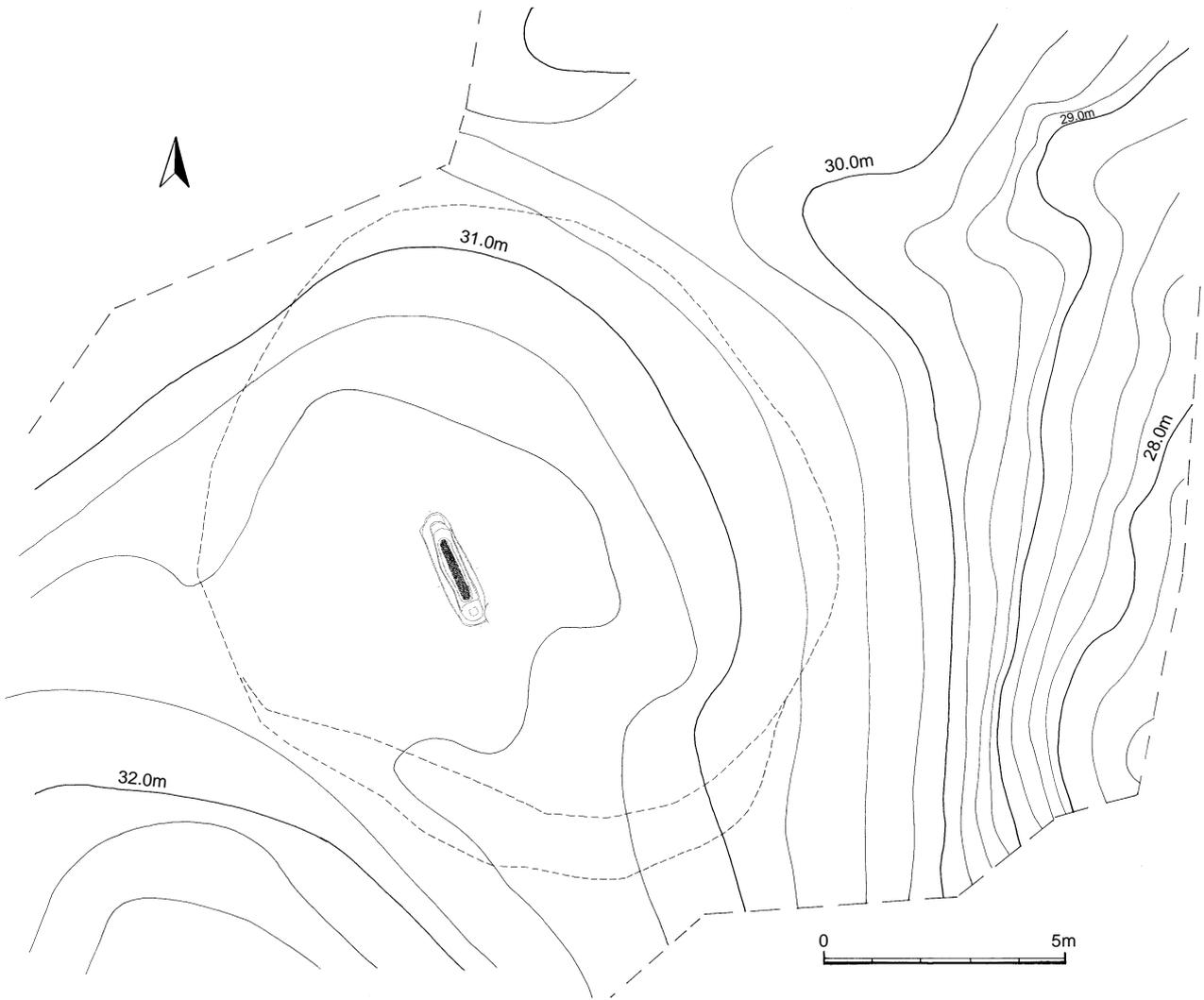


Fig. 11 3号墳地山整形測量図 (1/150)

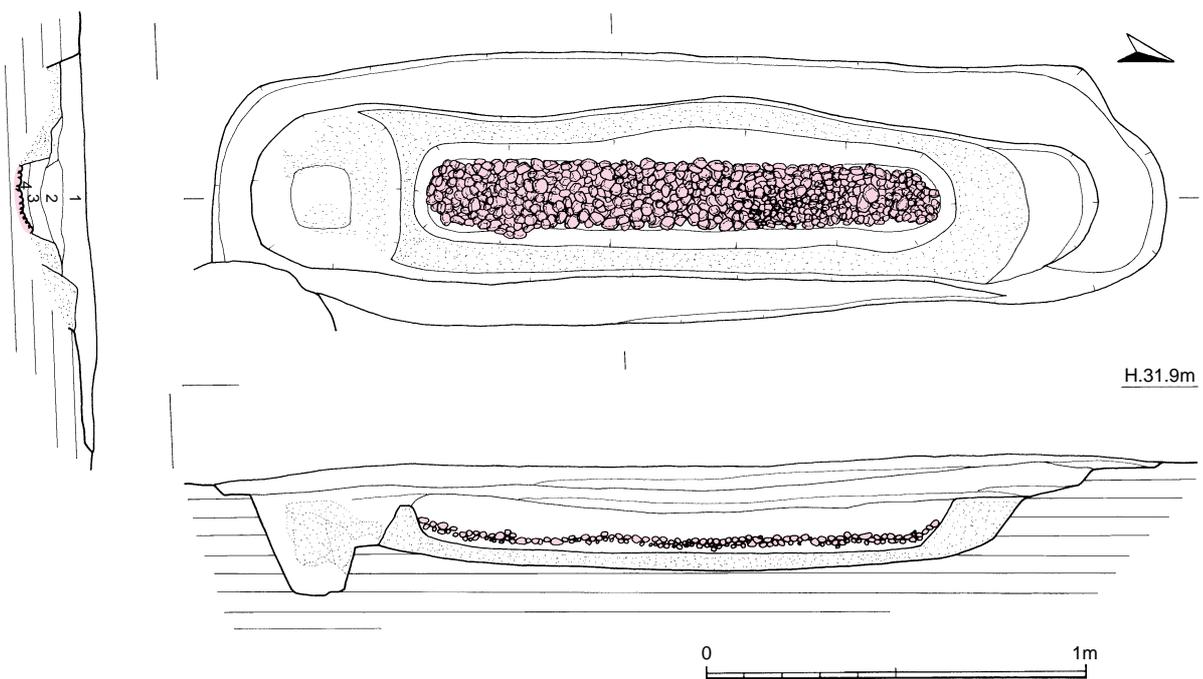


Fig. 12 3号墳主体部実測図 (1/20)

3). 4号墳SO - 04

墳 丘 (Fig.13~15 巻頭図版PL.2PL.9)

標高30m付近の丘陵鞍部に立地する円墳である。花崗岩のバイラン土の地山に、黄褐色土が堆積し、その上に旧表土が観察される。墳丘はその上に盛土して構築している。尾根が低くなる北東側に厚く盛土して、墳丘が水平になるように整形している。北東 - 南西方向の墳裾部分は旧表土を削って、幅1mほどの平坦面を形成している。北西 - 南東方向は尾根が狭くなっており、平坦面はつくりだせなかったと思われる。墳丘には葺石が2段めぐり、葺石と葺石の間に平坦面を形成した二段築成である。葺石は1段目の墳裾基底部分の石が大きくやや角があり、その上に丸い河原石を積んでいる。2段目も基底部分の石がやや大きく、その上に丸い河原石を積む。福岡平野に面する側の葺石は、基底部分の石が大きく、積み方も丁寧である。墳丘の北側1/4ほどは葺石が抜き取られている。この抜き取りがいつ行われたかは不明であるが、福岡平野側からは見えにくい部分が抜き取られている。抜き取られた石は、8号墳主体部や石組遺構に用いられた可能性が高い。墳丘規模は葺石の基底から計ると、北東 - 南西方向が10.9m、北西 - 南東方向が11.5m、高さ約1.0mである。

内部主体 (Fig.16・17・21 巻頭図版PL.3~6PL.10~25)

主体部は墳丘のほぼ中央に設けられた箱式石棺である。石棺の主軸はN - 51° - Wである。棺材は粘板岩質で、蓋石が2枚、北東側が2枚、南西側が2枚、小口が各1枚の8枚である。側板が小口板を挟む形態である。棺の内法は長さ155cm、幅40cm、深さ42cmである。棺底には礫を敷き詰め、赤色顔料を散布する。蓋石にも赤色顔料が付着している。2枚の蓋石の合わせ目部分には割石をのせ、粘土目貼りが施されていた。棺の周りにも粘土が敷かれていた。墓壇は長さ約280cm、幅約230cm、深さ約1mであったと考えられるが、初葬ののち3回の追葬が行われたため、掘り返しが行われてお

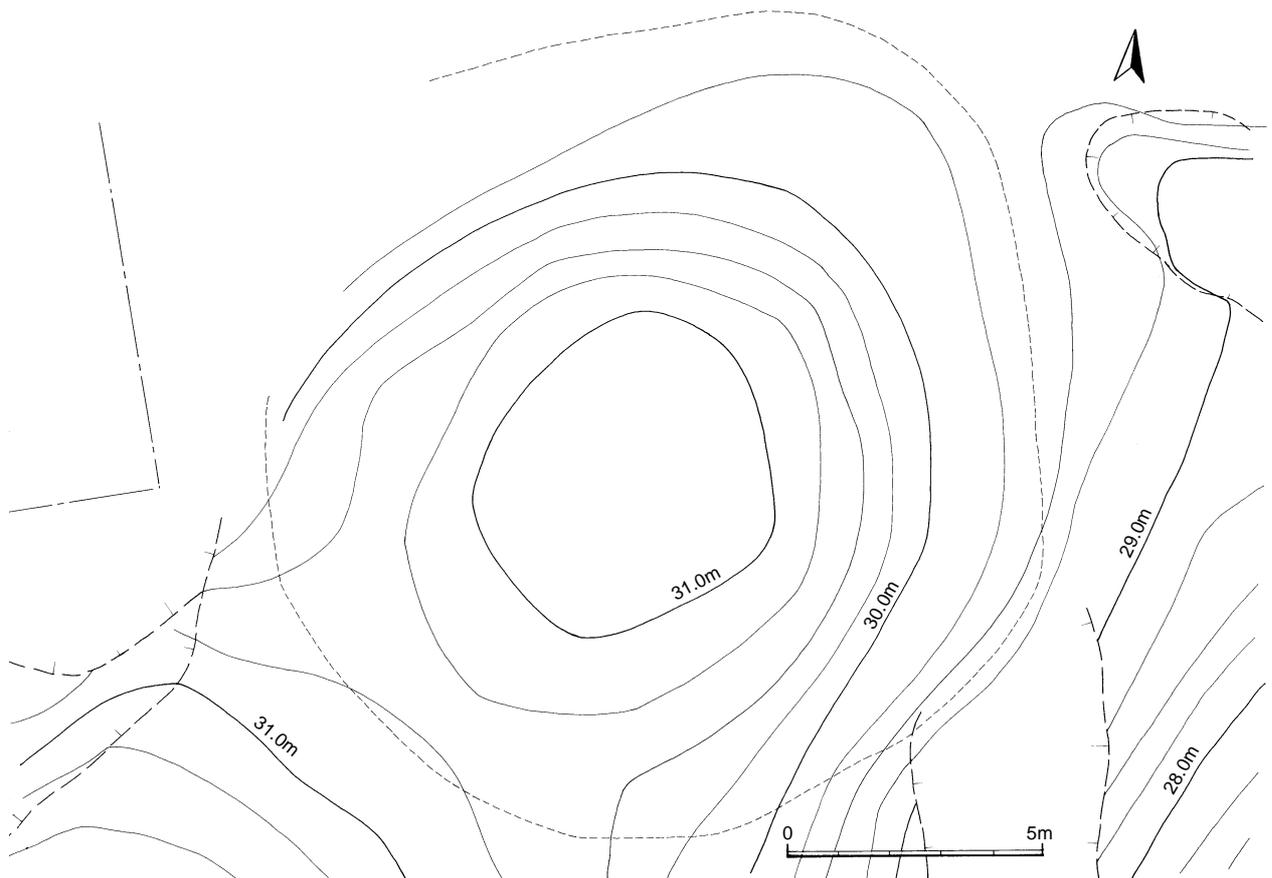


Fig. 13 4号墳墳丘測量図 (1/150)

り、やや不明瞭である。墓壇に小口と側板を立て、周囲と内部を土で埋めながら石棺を構築したか、墓壇に埋土を入れて整地したのち、小口と側板を立てて石棺を構築したかのどちらかと考えられるが、石材を抜きとりながら発掘したこともあり、判断はつかなかった。小口と側板の間には割石を挟んで隙間を調整している。側板や小口を固定するための溝状の掘込みなどは確認されなかった。

棺内には4体の人骨が残存していた。北（北西）頭位で西側の人骨をA号、東側の人骨をD号、南（南東）頭位で東側の人骨をB号、西側の人骨をC号とした。埋葬順序はB号（男性） A号（男性） C号（女性） D号（女性）である。A号人骨は顔面付近に赤色顔料が散布されていたが、棺底に散布されていたものとは色調が異なる。

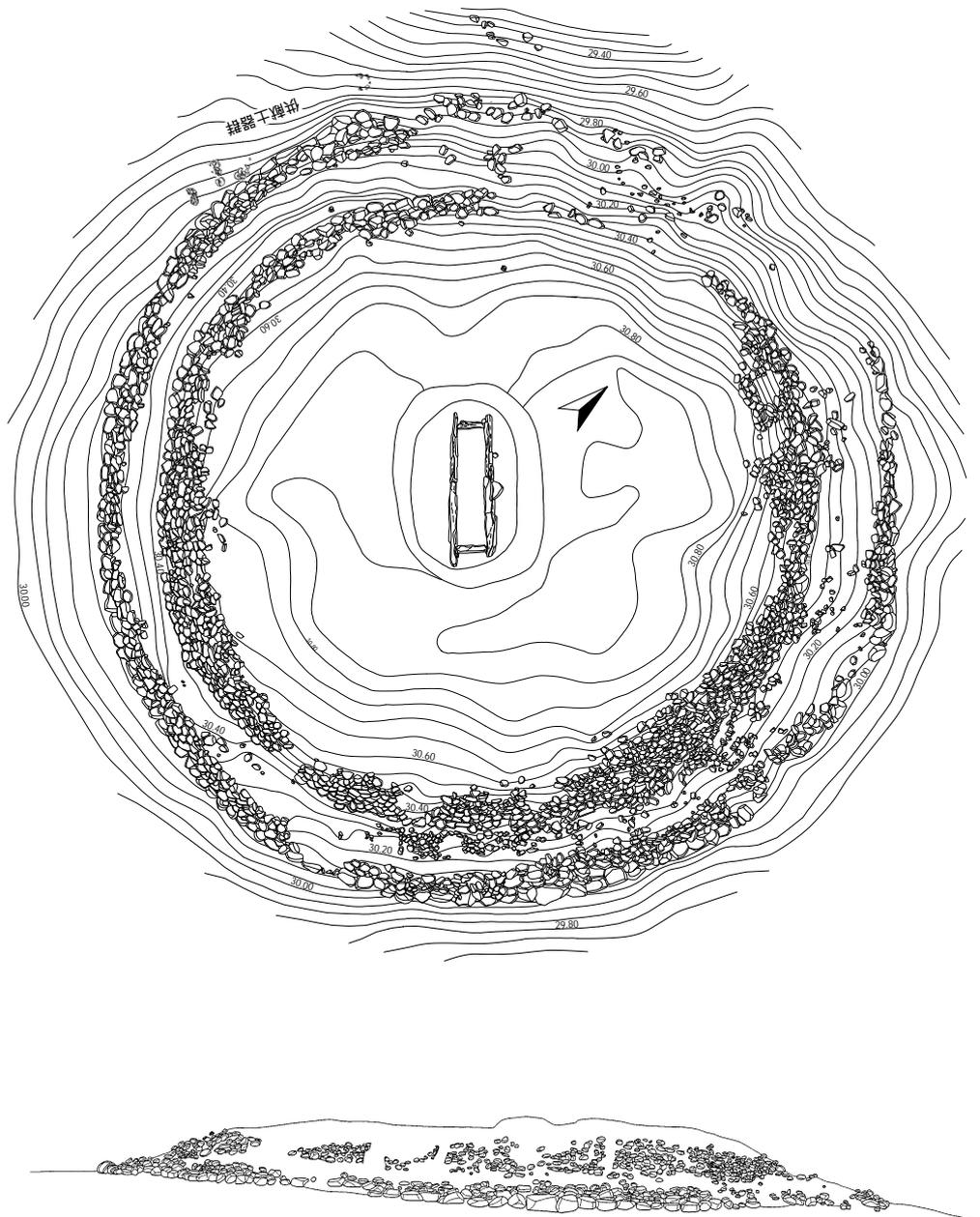


Fig. 14 4号墳墓石実測図 (1/100)

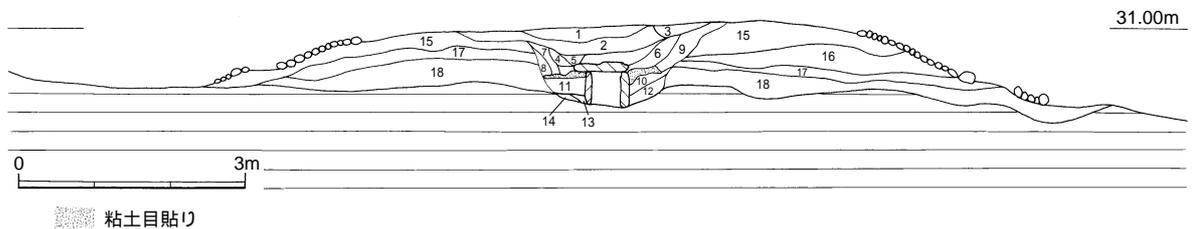
出土遺物 (Fig.9 巻頭図版PL.6 PL.38)

A号人骨は櫛を身につけて埋葬されていたと思われる。櫛はA号人骨の頭部から上腕付近にかけて4点出土した。いずれも黒漆塗りの豎櫛で、結縛部付近のみ残存する。そのうち図化できたものは1点である。4は豎櫛の結縛部で、櫛歯の痕跡が残る。長さ3.2cm、幅3.8cm、厚さ0.4cmである。

棺内の副葬品は不明鉄製品1点である。棺内の北東側側板の継ぎ目付近から出土した。全体に錆びて膨らんでいるが、先端に向かって細くなり、やや反った形状である。断面形は台形である。長さ6.3cm、幅1.2cm、厚さ0.8cmである。

棺外には北西方向の小口付近に鉄鎌と鉄斧、北東側側板の継ぎ目付近に鉄刀子がそれぞれ1点副葬されていた。6は鉄刀子で、基部を欠損する。脊の稜線は明瞭で刃部も鋭利である。基部側は錆び膨れしている。長さ6.6cm、幅1.6cm、厚さ0.7cmである。7は鉄鎌で基部に柄を装着するための折り返しがあり、身部はまっすぐのびて、先端部で急に曲がる。片刃である。全体に残存状況は良い。長さ24.6cm、幅3.7cm、厚さ0.5cmである。8は鉄斧で、基部には折り返した痕跡がある。刃部は鋭利である。内面の中心部は鉄材が急に厚くなっており、厚みは1.5cmほどある。内面の左右隅は厚みが0.6cmほどである。X線で確認したが錆び膨れではない。長さ11.8cm、幅5.3cm、厚さ4.4cmである。

墳丘の西側墳裾からは供献と思われる土師器が出土した。高坏2点、小型丸底壺4点である。高坏の脚部は供献されたときの状態を保って出土した。9・10は高坏で、いずれも内外面とも丹塗りである。9の坏部外面は八ケ目のちナデ調整で、口縁部はナデ調整である。坏部内面は八ケ目のちナデ調整である。脚部外面は八ケ目のちナデ調整で、裾部はナデ、脚部内面はケズリで裾部はナデ調整である。胎土は緻密で雲母片を少量含む。色調は赤色。器高12.0cm、口径19.0cm、脚裾径12.4cmである。10の坏部外面はナデ調整である。坏部内面は八ケ目のちナデ調整である。脚部外面は八ケ目のちナデ調整で、裾部はナデ、脚部内面はケズリで裾部はナデ調整である。胎土は緻密で雲母片を少量含む。色調は赤色である。器高12.6cm、口径17.6cm、脚裾径11.1cmである。11~14は小型丸底壺である。11はやや直立する口縁に、球形の胴部がつく。外面は八ケ目のちナデ調整、内面は口縁部が八ケ目、胴部がケズリである。胎土はやや粗く中砂を多く含む。色調は橙色である。器高11.0cm、口径7.8cmで、胴部最大径が8.9cmと口径より大きい。12は外側にややひらく口縁に。球形の胴部がつくとと思われる。外面は口縁部がナデ、胴部は八ケ目のちナデ調整である。内面はナデ調整である。胎土は緻密で、色調は黄褐色である。器高は現存高で6.7cm、口径9.8cmで、胴部最大径が8.8cmと口径より小さい。13は口縁部で、内外面とも八ケ目のちナデ調整で、外面は丹塗りである。胎土は緻密で、少量の赤褐色粒を含む。色調は橙色で、丹塗り部分は赤橙色である。器高は現存高で4.7cm、口径は



凡例

- | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 明黄褐色土：5ミリほどの砂粒を含む | 7. にぶい褐色土：黄褐色土を含む | 13. 明青灰色粘土：石棺の裏込土 |
| 2. 明黄褐色土：黄橙色の風化土を含む | 8. 明黄褐色土：青灰色粘土を少し含む | 14. 橙色土：石棺の裏込土 |
| 3. 明褐色土：5ミリほどの砂粒を含む | 9. 明褐色土：粘土を含む | 15. 明褐色土：盛土層 |
| 4. 明黄褐色粘質土：青灰色粘土を含む | 10. 橙色土：石棺の裏込土 | 16. 明褐色土：有機質含む |
| 5. 明褐色土：青灰色粘土を含む | 11. 橙色土：石棺の裏込土 | 17. にぶい黄橙色土：旧表土、炭化物含む |
| 6. 明黄褐色粘質土：黄橙色の風化土を含む | 12. 明褐色土：有機質含む。石棺の裏込土 | 18. 黄褐色土：茶褐色土混 |

Fig. 15 4号墳墳丘土層断面実測図 (1/100)

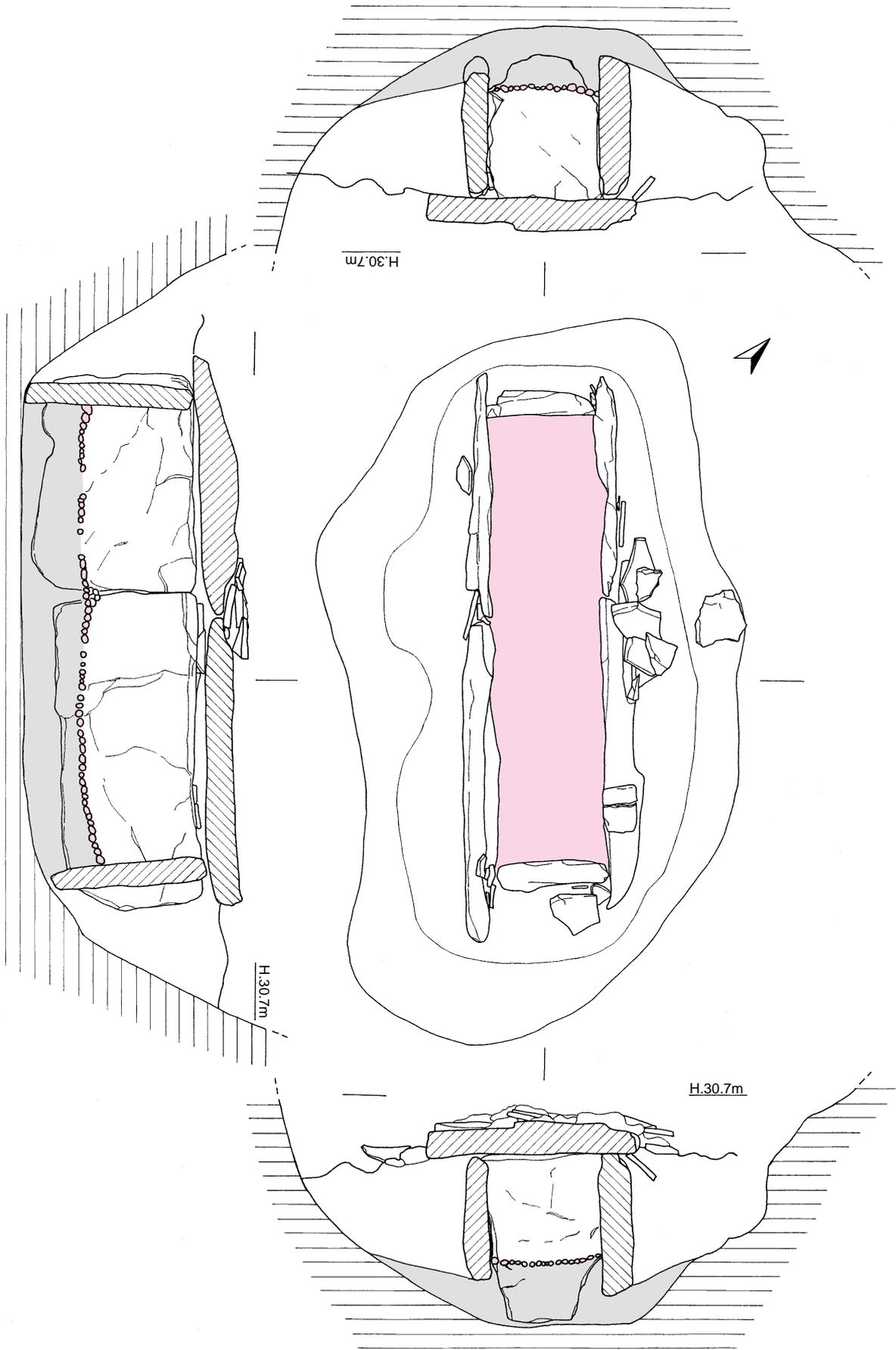
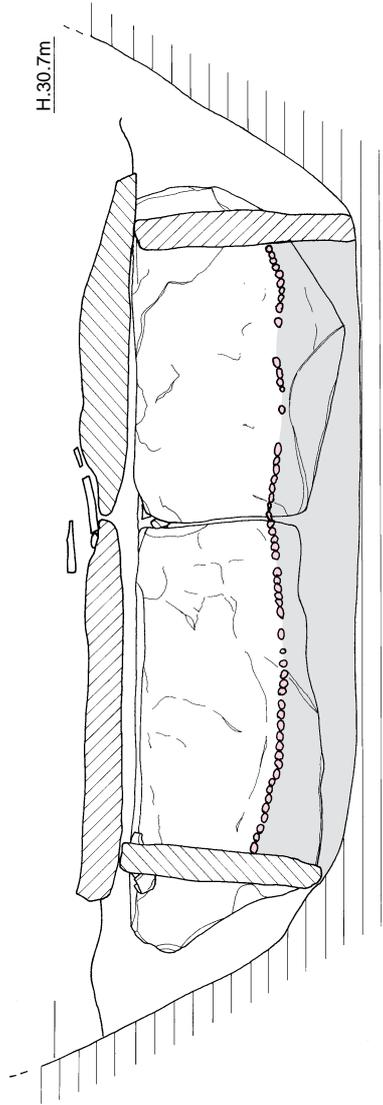
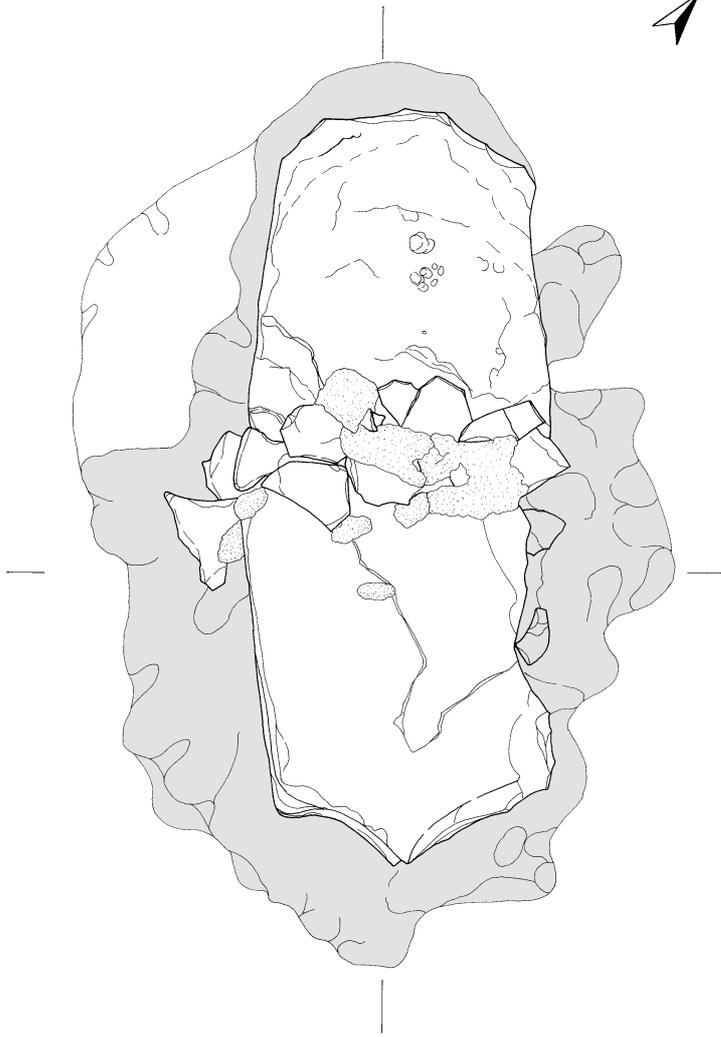


Fig. 16 4号墳主体部実測図 (1/20)



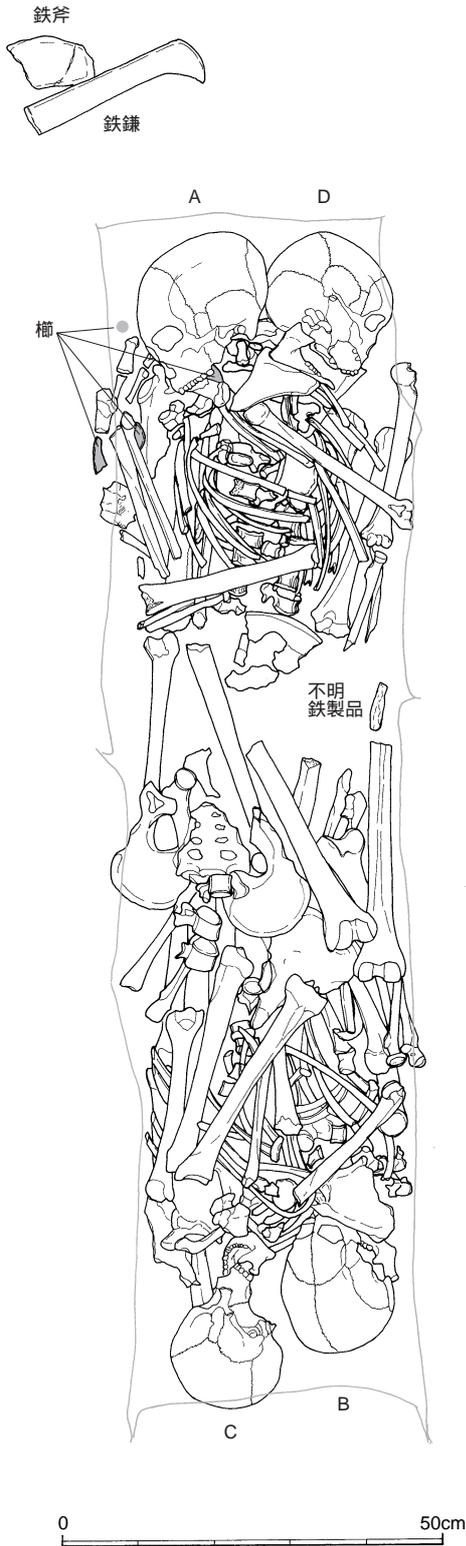


Fig. 17 4号墳主体部埋葬人骨検出状況実測図 (1/10)

14.6cmである。14は頸部から胸部で、内外面ともナデ調整である。外面にわずかにハケ目が観察される。底部内面には工具痕が残る。胎土は緻密で色調は橙褐色である。

墓壙の棺蓋上面の埋土からは、土師器の高坏が7点出土した。高坏はいずれも破片であり、埋土中からの出土であるので、墳丘上に供献されていたものが、再度の掘り返しにより埋土に混入したと考えられる。19は高坏坏部である。内外面ともナデ調整で、外面は丹塗りである。胎土は緻密で少量の雲母片を含む。色調は橙色で丹塗り部分は暗赤色である。口径は18.2cmである。15から18・20・21は高坏脚部である。15は内外面ともナデ調整で、外面と内面の一部は丹塗りである。胎土は緻密

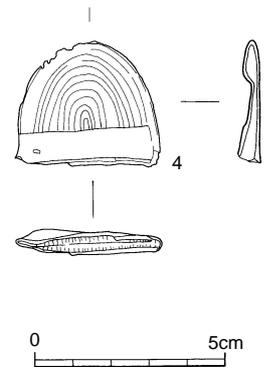


Fig. 18 4号墳主体部棺内副葬遺物実測図1 (1/2)

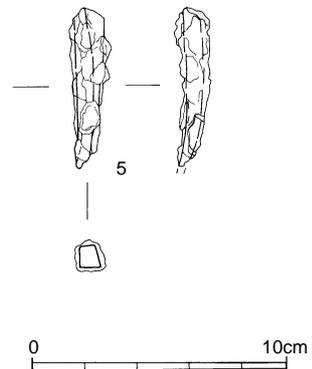


Fig. 19 4号墳主体部棺内副葬遺物実測図2 (1/3)

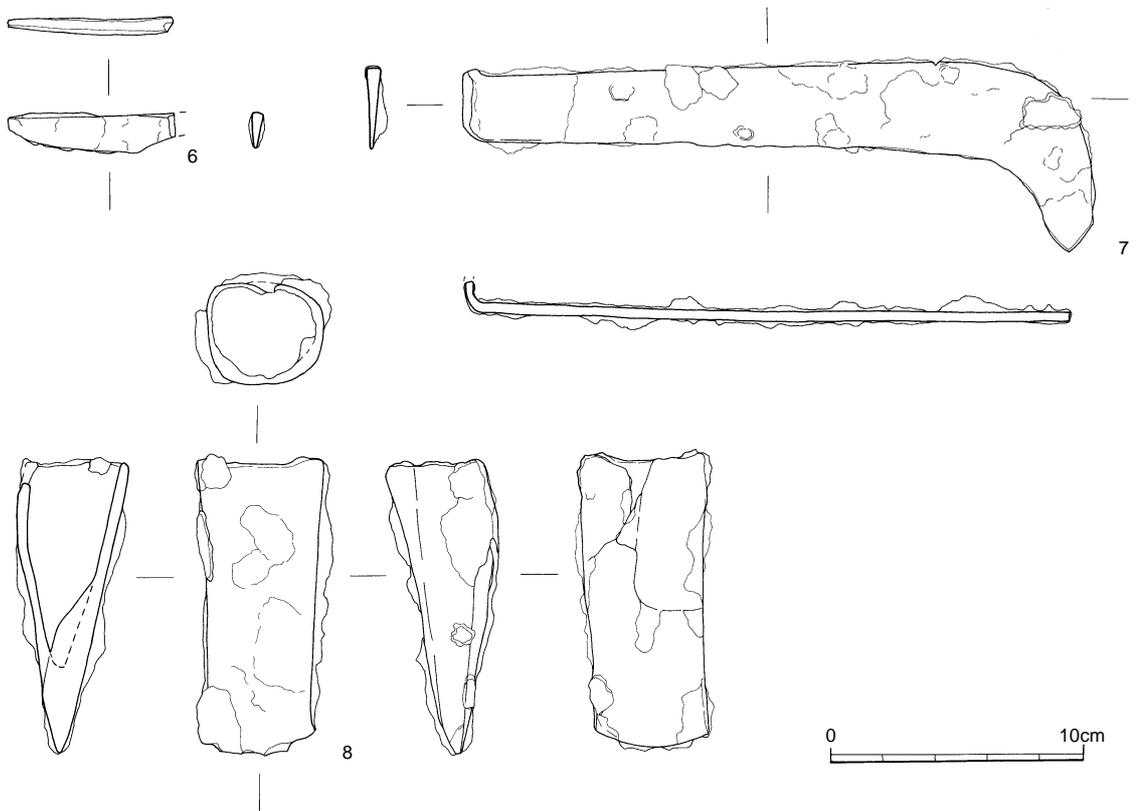


Fig. 20 4号墳主体部棺外副葬遺物実測図(1/3)

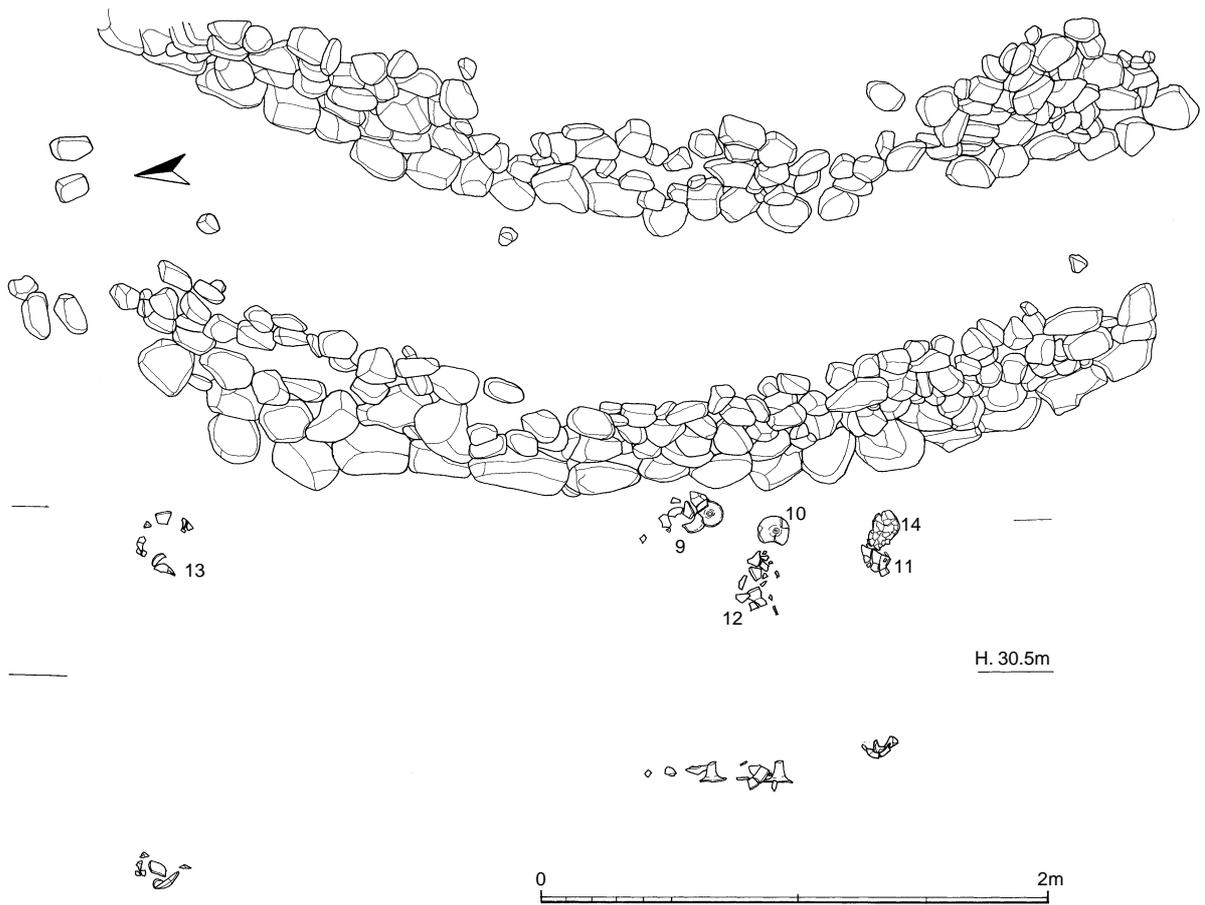


Fig. 21 4号墳裾奉献遺物出土状況実測図(1/30)

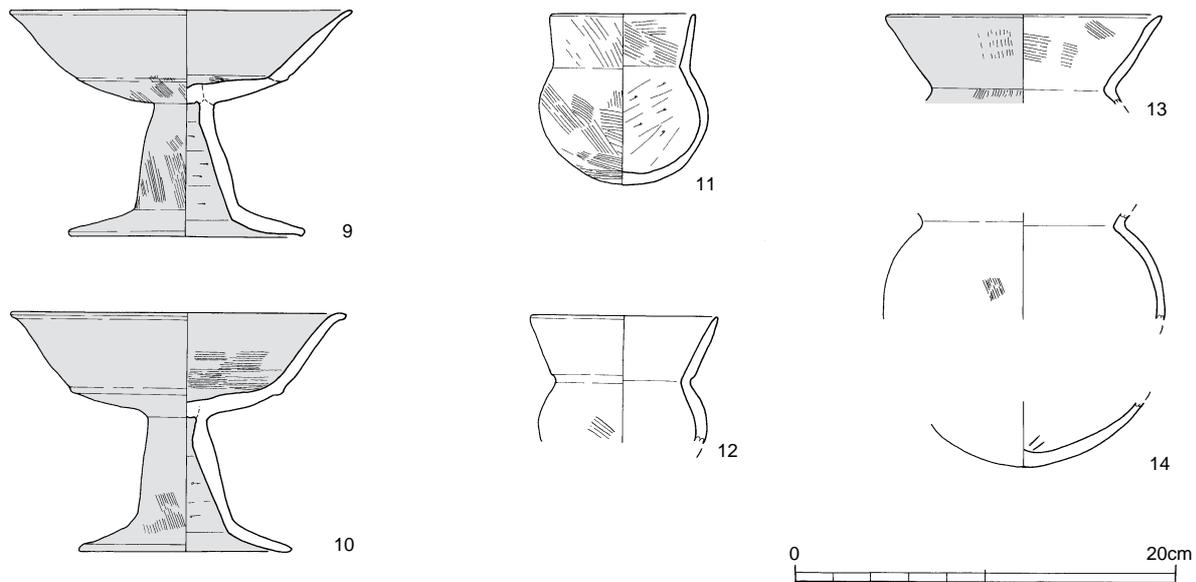


Fig. 22 4号墳丘裾出土供献遺物実測図(1/4)

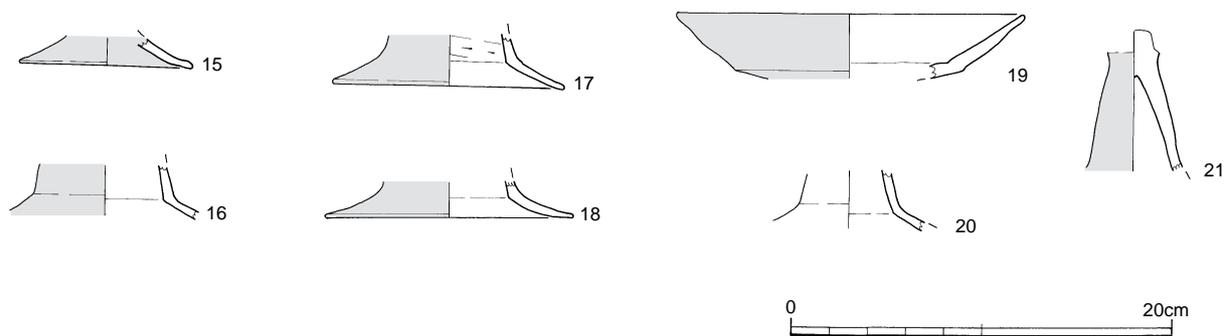


Fig. 23 4号墳主体部墓壙出土遺物実測図(1/4)

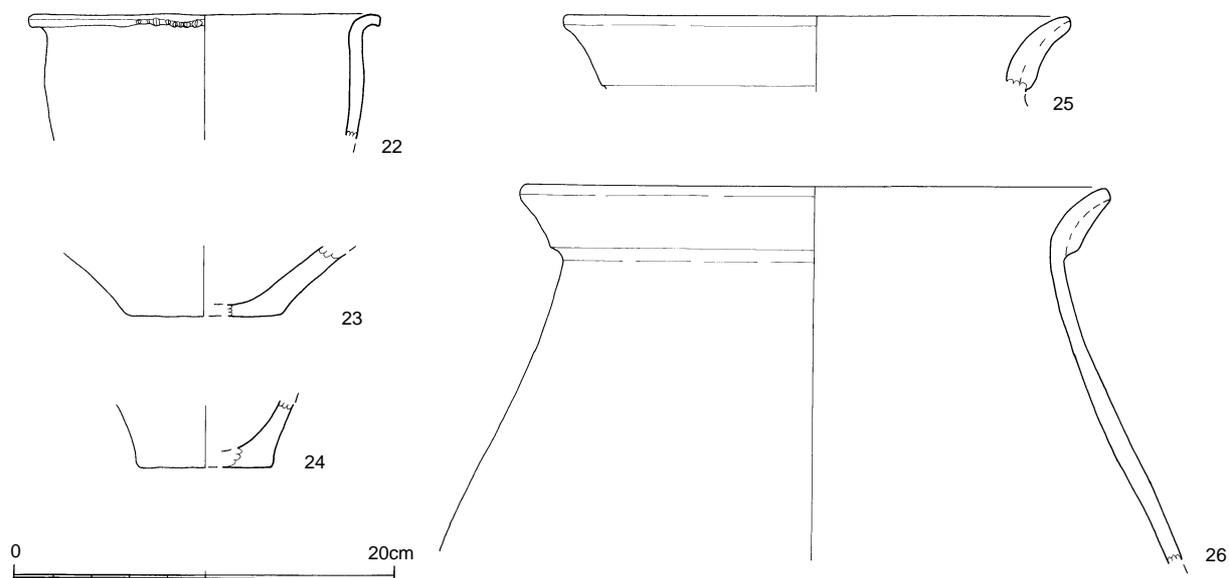


Fig. 24 4号墳墳丘出土遺物実測図(1/4)

で少量の雲母片を含む。色調は橙色で丹塗り部分は赤色である。脚裾径は9.0cmである。16は外面がナデで丹塗り、内面はケズリとナデ調整である。胎土は緻密で雲母片を含む。色調は橙色で丹塗り部分は赤色である。17は外面がナデで丹塗り、内面はケズリとナデ調整である。胎土は緻密でわずかに雲母片を含む。色調は橙色で丹塗り部分は赤色である。脚裾径は12.2cmである。18は内外面ともナデ調整で丹塗りである。胎土は緻密で、色調は赤橙色である。脚裾径は13.0cmである。20は内外面ともナデ調整で磨滅している。胎土は緻密で、色調は橙色である。21は外面がナデ調整で丹塗り、内面に絞り痕が残る。坏部との接合のための突部が見られる。胎土は緻密で赤褐色粒を含む。色調は橙色で、丹塗り部分は暗赤褐色である。

4号墳の墳丘中からは、弥生時代前期の甕・壺などが出土した。8号墳付近から弥生時代前期と思われる貯蔵穴が検出されていることもあり、墳丘構築以前にあった弥生時代前期の遺構に伴う土器が混入したのであろう。22・24は甕である。22は板付式の甕で、やや強く外反する口縁の端部下側に刻目を施す。胎土はやや緻密で、色調は黄褐色である。口径は16.6cmである。24は底部で、内外面とも磨滅が激しい。胎土はやや緻密で、色調は橙色である。底径は7.2cmである。23・25・26は壺であ

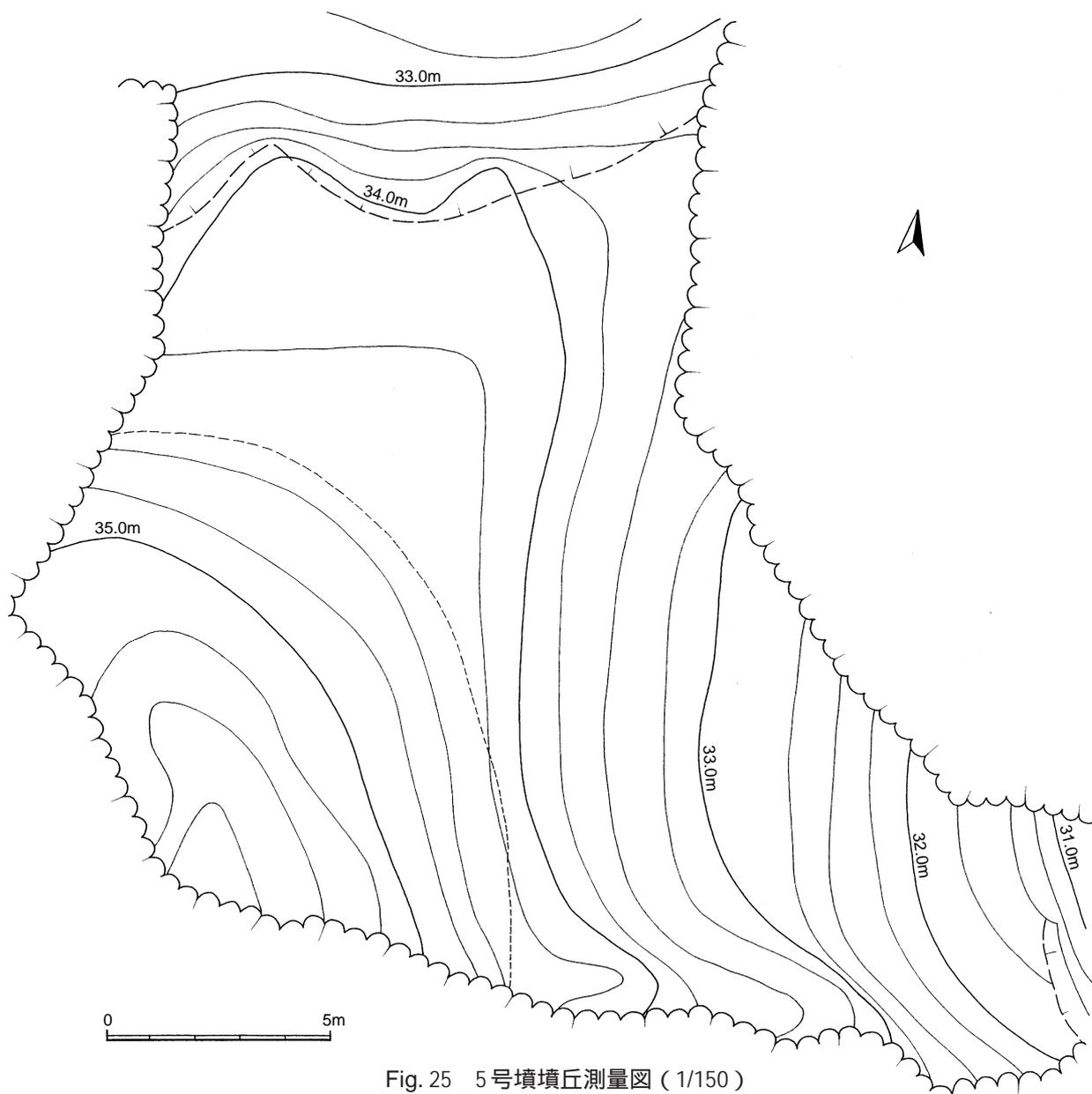


Fig. 25 5号墳墳丘測量図 (1/150)



Fig. 26 5号墳地山整形測量図 (1/150)

る。23は底径が8.4cmの底部で、胎土は緻密。色調は橙色。25は板付 式の壺口縁部で、口唇部に粘土を貼り付けて肥厚させる。胎土はやや緻密で雲母片を含み、橙色。口径は26.6cm。26は板付 式の壺で、口唇部に粘土を貼り付けて肥厚させており、明瞭な段を持つ。内外面ともナデ調整でやや磨滅している。胎土はやや緻密で、細～中砂粒を含み、色調は橙色。口径は31.0cmである。(谷 直子)

4). 5号墳SO - 04

墳 丘 (Fig.25・26 PL.26)

5号墳は、丘陵尾根の最南端に位置する円墳で、北へ13mの距離には2号墳が占地している。墳丘は、既存住宅の建設で南側と西側の大半を消失しており、原状は留めていない。墳頂の現標高は35.8mで、34.3mと34.5mの等高線の中に墳裾の微かな変換点が見出せ、見かけ上の墳丘高は130cmの比高がある。古墳の地山整形は、花崗岩のバイラン土上に載った鳥栖ローム層を削り出して円形に整えて墳形を造りだしており、盛土は一切していない。造営時の古墳は、墳径が20～25mほどの円墳に復原される。墳頂の標高は、35.55mで34.3～34.5mの等高線付近に墳裾線が廻っているが、東斜面の墳裾はやや曖昧なままに比高を減じていく。墳頂部には、土壙墓系かあるいは石棺系の主体部があった可能性が想定されるが、崖面の切り崩しで消失しており、詳細は不明である。

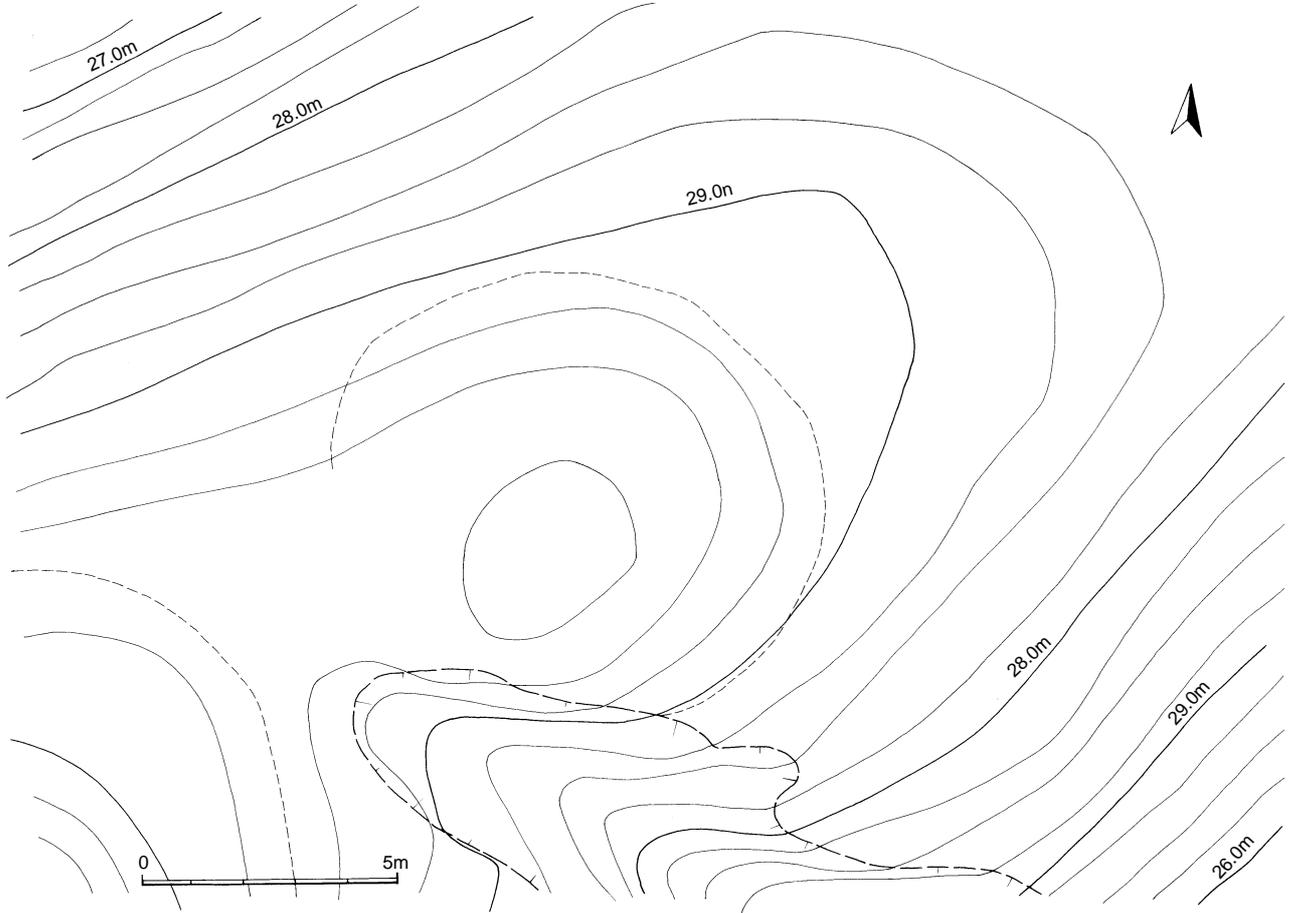


Fig. 27 8号墳丘測量図 (1/150)

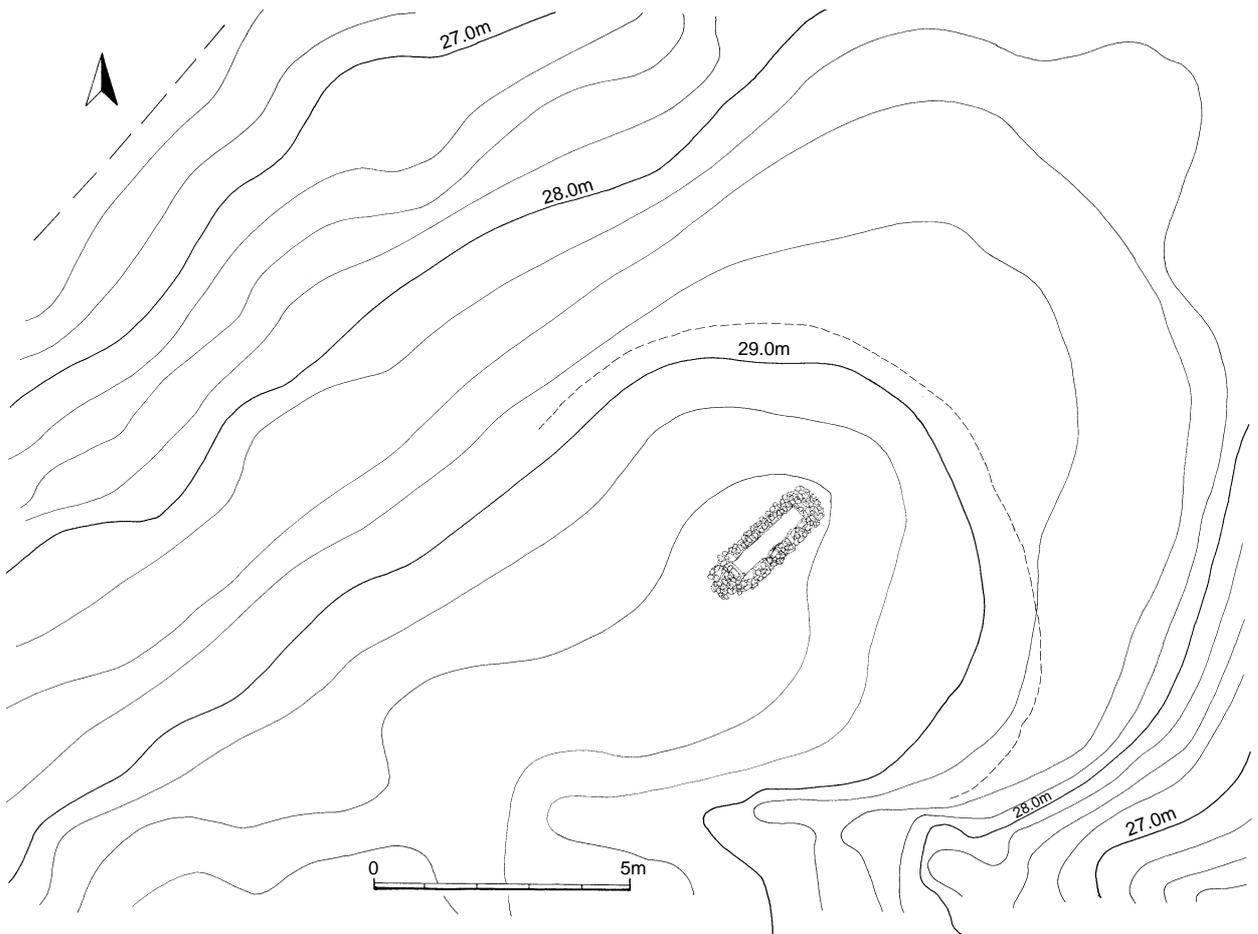


Fig. 28 8号墳地山整形測量図 (1/150)

H.29.7m

H.29.7m

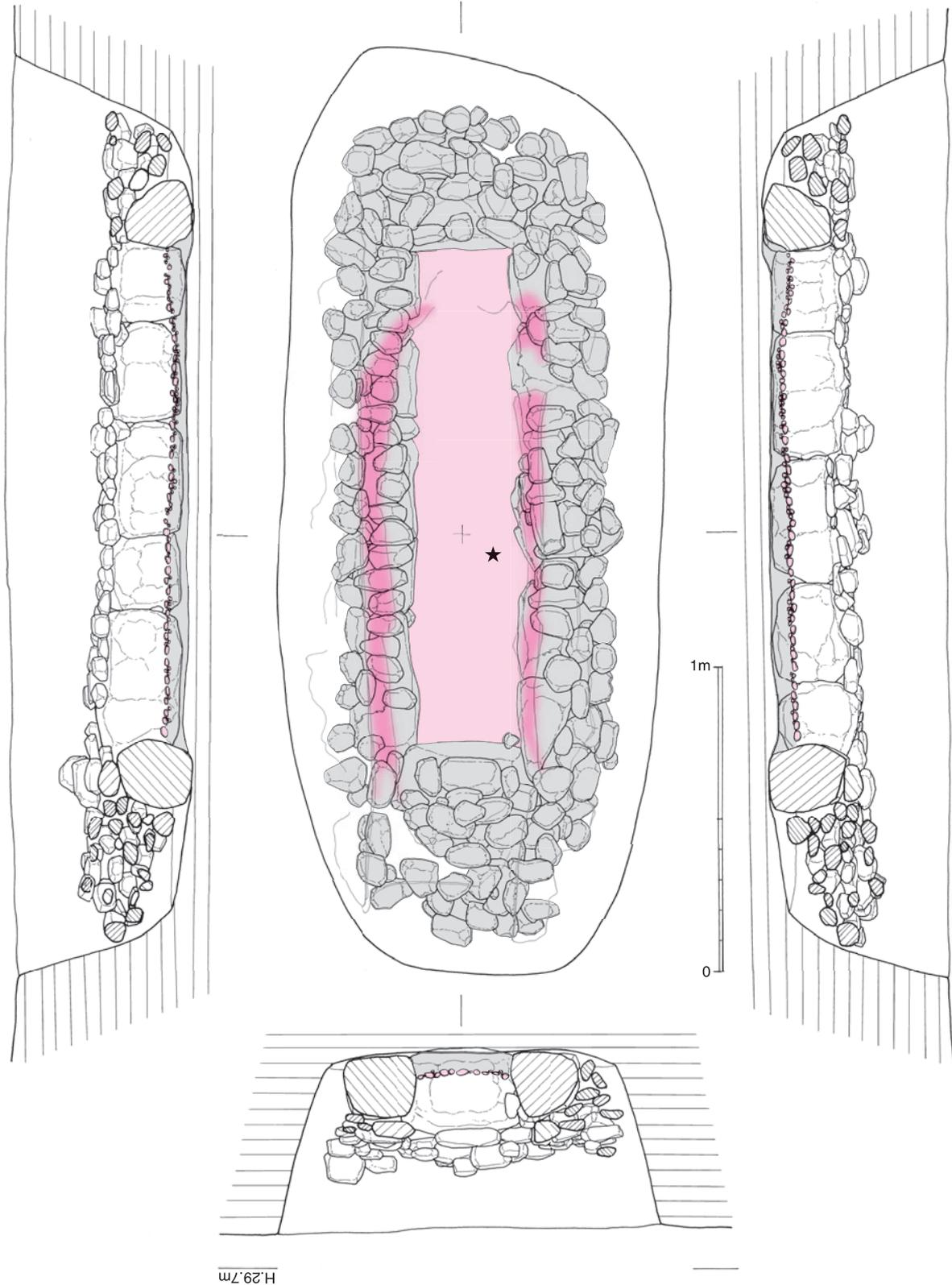


Fig. 29 8号墳主体部実測図 (1/20)

5). 8号墳SO - 08

墳 丘 (Fig.27・28 PL.27)

8号墳は、弧を描くように東へ下りながら延びる丘陵尾根の東部に位置する低墳丘の円墳で、4号墳の北東側の墳裾とは浅い鞍部を隔てて接している。墳頂部の標高は29.8mで、南～東～北は、29.0mの等高線に沿って円形に周る墳裾の緩やかな変換点が観察され、4号墳に接する西側は尾根の鞍部が浅い溝状に窪むことから直径が9～10mの低平な円墳であると判断された。古墳は、花崗岩パイラン土に載る鳥栖ローム層を円形に削って地山整形した低墳丘墳で、4号墳と接する西側は地山を馬蹄形溝状に浅く削り出して低い墳丘を造り、尾根筋の東側と南北の斜面側は28.75～29.0mの等高線に沿って地山整形して円形に整えている。盛土は一切していない。古墳の直径は9.5mである。4号墳側からの比高差は低く無いに等しいが、尾根下からの比高差は60cmほどあり、明らかに小盛りとした墳丘が見て取れる。

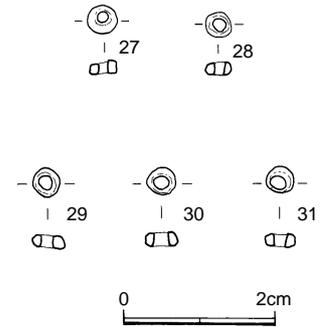


Fig. 30 8号墳主体部
出土遺物実測図 (1/1)

内部主体 (Fig.29 巻頭図版PL.8 PL.28～33)

主体部は、箱式石棺で墳丘のほぼ中央に掘り込まれている。石棺は、長軸が300cm、短軸が125cmの隅丸長方形の竪穴を掘り、その墳底に横が40～50cm、高さが20～25cm、厚さが20～23cmの花崗岩の角礫を横位に据えて小口壁としている。側壁は、花崗岩の角礫5枚を並べて作り、東側は小口壁を側壁が挟むように、また西側は小口壁が側壁を押すようにして四壁を作っている。石棺の内法は、長軸が160cm、短軸が33～38cmの長方形プランをなす。この石棺の四周壁の裏込めには4号墳から抜き取った8～15cmの円礫を密に詰め込んでいる。同時に上縁にも円礫を敷き並べ、その上面と回りにはベンガラを含んだ黄褐色粘土が敷き固められていた。粘土帯の下面は平坦で、外縁は直線的に延び、上縁までの高さは1.5cmである。これは木蓋の覆蓋痕で、被葬者の納棺後に木蓋で丁寧に覆蓋したことが窺われる。棺床は墳底に薄く敷いた黄褐色粘土層の上面に1～3cm大の小円礫を密に敷き詰めた礫床でベンガラを密に撒いている。この礫床上には5点の滑石製白玉が副葬されていた。

出土遺物 (Fig.30 PL.38)

27～31は、滑石製白玉である。直径は3.6～4mm、厚さは1.4～2.4mm、孔径は1.4～2.4mmである。このうちもっとも小さい29は、直径が3.6mm。もっとも大きい27は、直径が4mmで孔径は2mm。28～30は、側面に弱い稜線が入り、算盤玉状の断面形をなす。

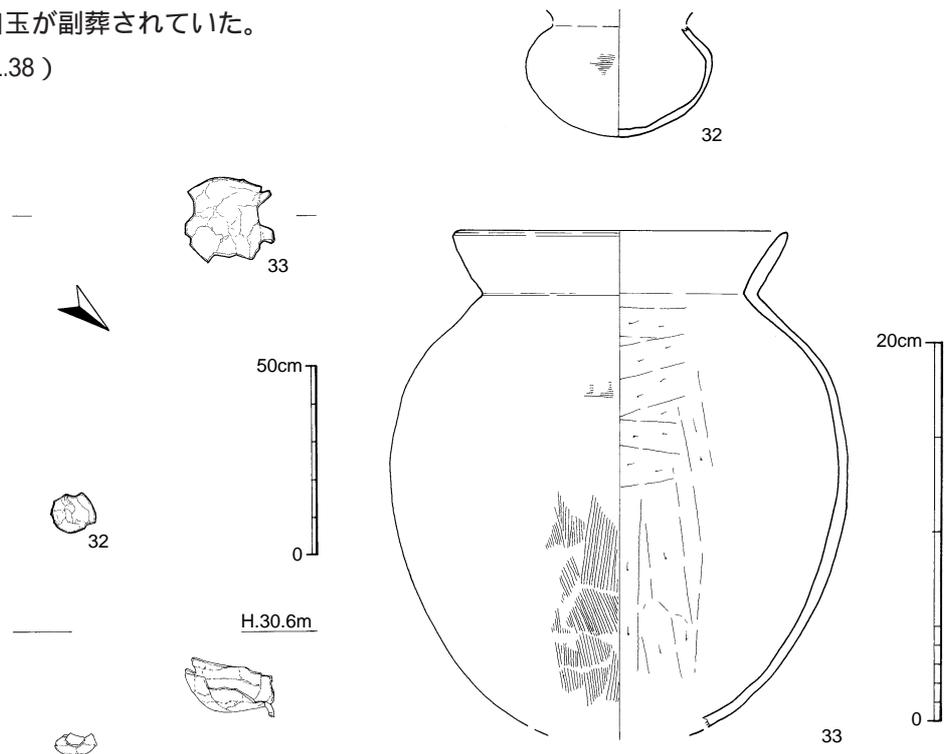


Fig. 31 11号土器置遺構実測図 (1/20) Fig. 32 11号土器置遺構出土遺物実測図 (1/4)

3. そのほかの遺構の調査

1). 土器置遺構 (SJ)

11号土器置遺構SJ - 11 (Fig.31 ~ 15 巻頭図PL.7 PL.34)

11号遺構は、3号墳の北側墳裾から出土した土師器甕と小型丸底壺である。小型丸底壺は立位で、その西70cmの距離に甕が横位で検出された。このうち甕内にはベンガラ濃い沈澱痕が残るベンガラの容器甕で、本来は、立位で置かれたものが横倒しになったものと推考される。位置的には3号墳の墳裾にあるが、甕内のベンガラが3号墳かあるいは4号墳の礫床に撒かれたものかは明らかでない。

出土遺物 (Fig.32 PL.38)

32は、玉葱状の偏球形をなす小型丸底壺の胴部である。胴部最大径は10cm。外面はナデ後にハケ目、内面は指頭押圧ナデ調整。33は、口径が17.8cm、器高が26.2cmの土師器甕である。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は倒卵形をなす。胴部外面はハケ目後にナデ、内面は粗いヘラケズリ。胎土には微細～石英粗砂粒を多く含むほかに雲母微細を含む。黄橙～淡黄褐色。

2). 土壇 (SK)

12号焼土壇SK - 12

(Fig.31 ~ 15 PL.34)

12号焼土壇は、8号墳の墳裾から東北東へ6mの距離にあり、尾根を挟んで13号石組遺構と対峙している。平面形は、長軸が172cm、短軸が155cmの不整な円形プランをなす。深さが77cmの壁面は、一旦緩やかに掘り込んだ後に屈曲して急峻に掘り込む2段掘りのな構造をなす。覆土は、炭灰を含む黒色土層と黄褐色土層からなり、尾根側の西壁には被熱による赤変した焼土壁が残っている。

14号土壇SK - 14

(Fig.34 PL.36)

14号土壇は、8号墳の北東部の墳裾上に掘り込まれた小土壇である。平面形は、長軸が130cm、短軸が約110cmの楕円形プランを呈する。壁面は、緩やかに立ち上がる。壁高は23cmで、

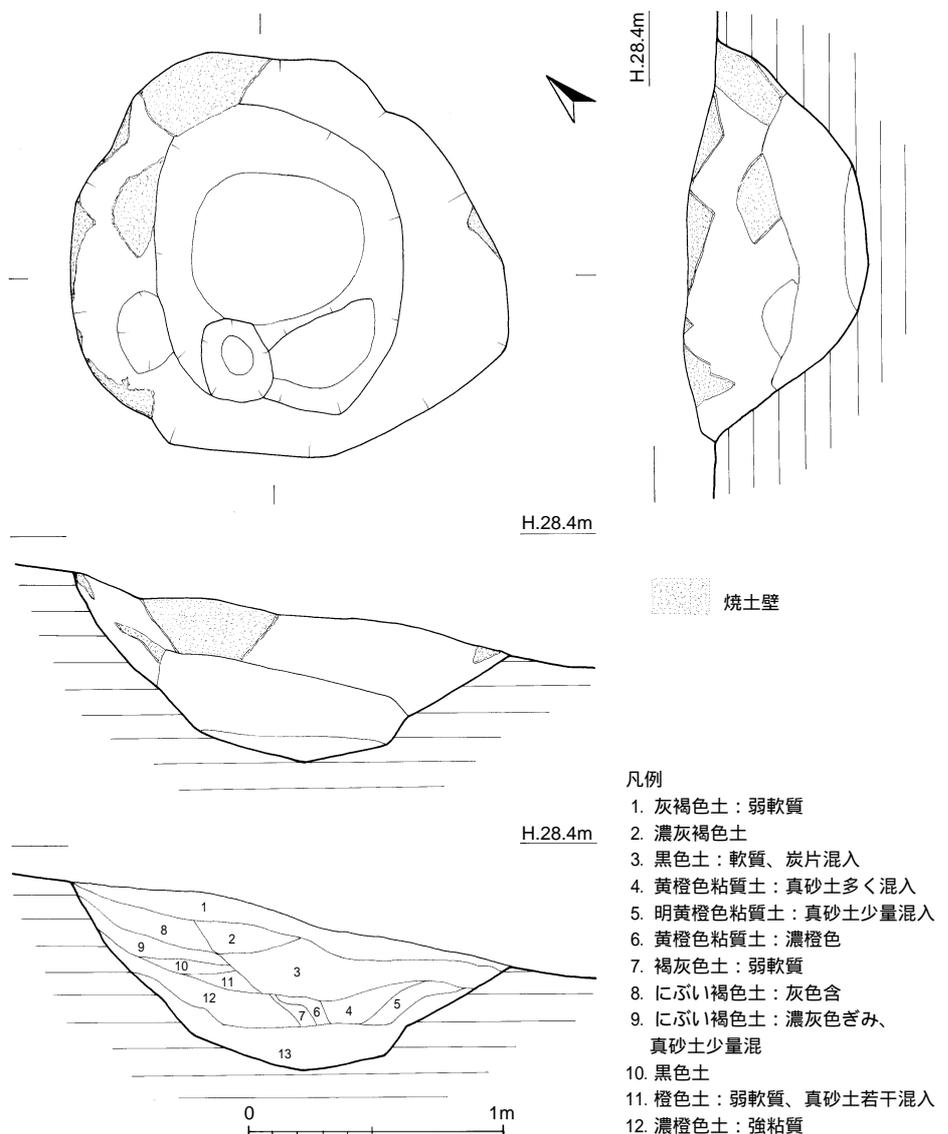


Fig. 33 12号土壇実測図 (1/30)

断面形は浅い凹レンズ状をなしている。覆土は茶褐色土の単一層で、土壌の覆土上層から土師器甕片がまとまって出土した。

出土遺物 (Fig.35 PL.38)

34は、口径が17cmの土師器甕で器高は24cmに復原されようか。「く」字状の口縁部はストレートに外反し、胴部は球形をなす。調整は、口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目後にナデ、内面は押圧後にヘラケズリ。胎土はやや粗く石英小～粗砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は、外面が淡赤橙色、内面はくすんだ淡黄橙色。

19号土壌SK - 19 (Fig.38 PL.37)

19号土壌は、8号墳の東側の墳丘下に掘り込まれた土壌で、北半部は18号貯蔵穴に切られている。平面形は、短軸が150cmで、長軸が200cm余の楕円形プランをなそうか。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は80cm。断面形は、逆台形状をなす。

20号土壌SK - 20 (Fig.36)

20号土壌は、8号墳の盛土下にある小土壌である。平面形は、長軸が112cm、短軸が85cmの不整な楕円形プランを呈する。緩やかに立ち上がる壁面の高さは60cmを測る。壙底は、東にむかって緩やかに傾斜し、箱形の断面形をなす。

3). 貯蔵穴 (SU)

17号貯蔵穴SU - 17 (Fig.37PL.37)

17号貯蔵穴は、8号墳の南側墳丘下に位置する貯蔵穴で、天井部は大きく崩落している。北東方へ2.5mの距離には18号貯蔵穴がある。床面の平面形は、直径が200～220cmの円形プランを呈し、平坦な床面の標高は26.5mである。壁面は、床面から90～115cmの高さまで緩やかに内彎しながら立ち上がり、大きく屈曲してフラスコ状に窄まって天井部中央の入口部へ至ると推考される。覆土は、下層が崩落した天井のマサ土で、上層はマサ土ブロックの混入した暗茶褐色土、最上層が軟質の黒色土層である。貯蔵穴内からは黒曜石片が出土した。

18号貯蔵穴SU - 18 (Fig.38 PL.37)

18号貯蔵穴は、8号墳の東側墳丘下に位置する貯蔵穴で、北東へ1.5mの距離には15号土壌がある。貯蔵穴は、はじめに50×65cmの方形の縦穴を90cm+ を掘り、そこから更に85cmほど掘り下げた後に、230cmほど奥へドーム状に掘り進む、いわゆる地下式横穴的構造をなす。床面の平面形は長軸が235cm、短軸が90cmの隅丸長方形プランをなし、奥壁側がわずかに高い段構造をしている。壁面は、床面から120cmほど内彎気味に立ち上がった後に緩やかに屈曲してアーチ状に膨らんで天井部へと続く。

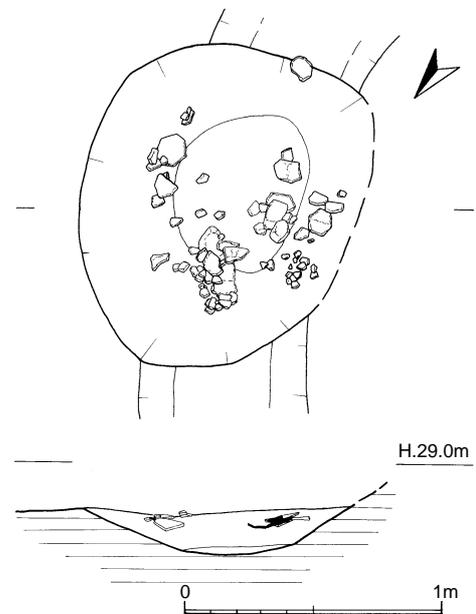


Fig. 34 14号土壌実測図 (1/30)

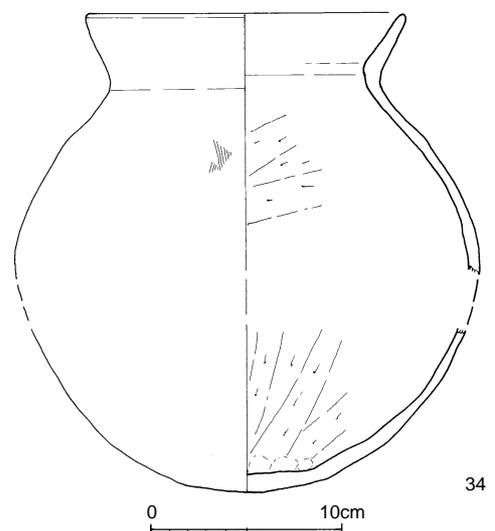


Fig. 35
14号土壌出土遺物実測図 (1/4)

4). 石組遺構 (SI)

13号石組遺構SI - 13 (Fig.39 PL.35)

13号石組遺構は、8号墳の墳裾から北へ5mの距離にある石組遺構である。石組は、円礫を幅60cmの広さで東西に270cmほど延ばし、その両端から斜面側の北西方へ70~80cmほど「コ」字状に矩形に敷き並べている。円礫は、重なることなく接するように密に敷き並べており、石敷きの基壇状をなしているが、斜面側に矩形にするためには北側に整地面が必要になるが、その痕跡は確認できなかった。また、円礫は4号墳の北側の葺石列から抜き取って来たものと推考される。

15号石組遺構SI - 15 (PL.35)

15号石組遺構は、丘陵尾根の最南端に位置する5号墳の北側墳裾から3mほど北にある。円礫が東西に3m、南北に2mほどの三角形状に分布している。丘陵上で円礫を確保できるところは、4号墳の葺石であり、消失している北側の葺石を抜き取って積んだと考えられるが、その積み方は散漫的である。円礫の下には何の遺構もなく、打製石鏃片が1点出土した。

出土遺物 (Fig.40 PL.38)

35は、凹基式三角形石鏃の基部である。表裏とも比較的丁寧な押圧剥離後に基部に抉りが入る。長さは0.95cm+、器幅は1.35cm、最大厚は0.45cm。黒曜石製。

5). 中世墓 (SX)

16号墓SX - 16 (Fig.41 PL.36)

16号墓は、調査区の最北東端に位置する土壙墓で、8号墳の墳裾から北東へ16mの距離にある。平面形は、東西長が143cm、南北長が130cmの円形プランを呈する。深さが165cmの壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。フラットな底面は、やや西に傾斜し、箱型の断面形をなす。この墳底から両膝を抱えた状態で埋葬された人骨が検出された。

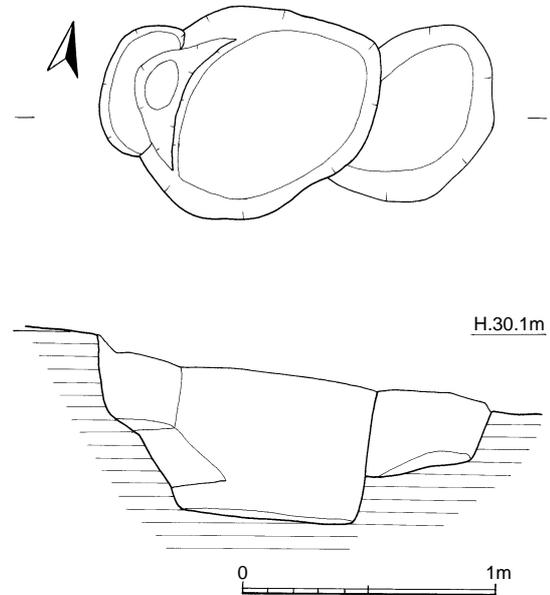


Fig. 36 20号土壙実測図 (1/30)

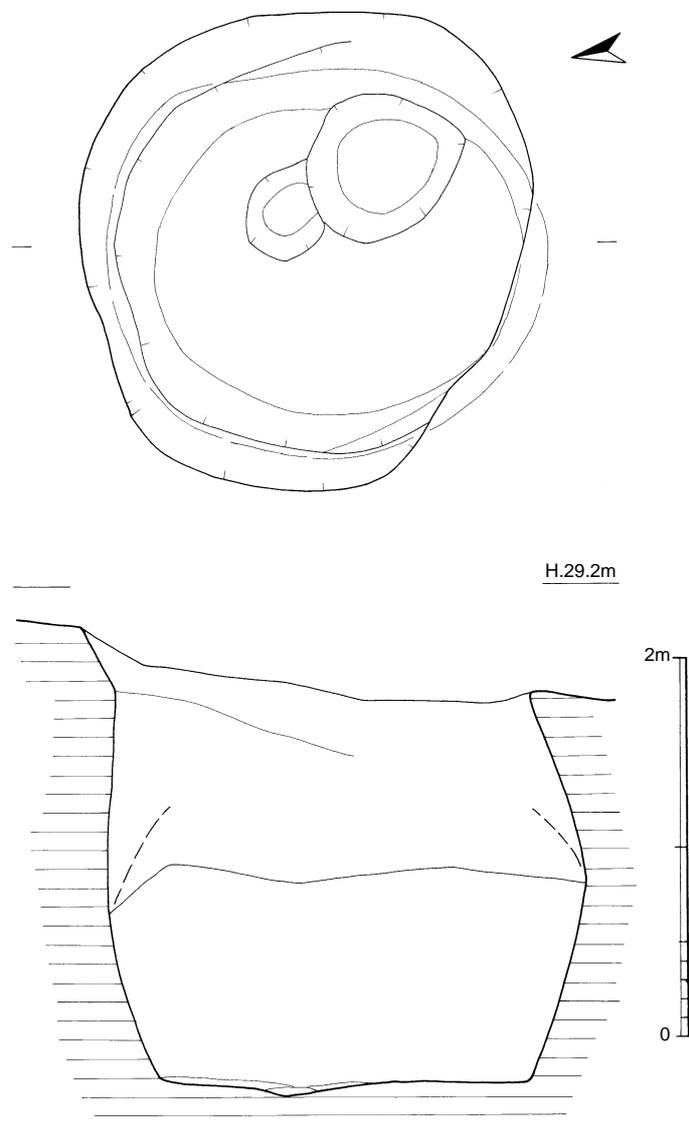


Fig. 37 17号貯蔵穴実測図 (1/40)

4. おわりに

卯内尺古墳群の発掘調査では、5基の円墳と2基の貯蔵穴や土壇、石組遺構などを検出した。古墳は墳径が9.5～15mの小円墳で、2・3・8号墳は低墳丘墳、4号墳は二段築成の円墳で墳丘斜面を葺石で覆われていた。また、埋葬主体部を検出した3基の古墳のうち3号墳が木蓋土壇墓、4号墳が箱式石棺墓、8号墳が木蓋の箱式石棺墓でいずれも小円礫を敷いた棺床にはベンガラが撒かれていた。このように古墳は、墳丘の規模や埋葬主体部の構造などに特徴的な要素をもっている。

まず立地的には、福岡市の西縁を北流して博多湾に注ぐ那珂川中流域左岸の丘陵上に造営された古墳時代前半期の小古墳群である。古墳は、片縄山からハッ手状に派生する舌状丘陵の先端部に位置し、眼下には那珂川左岸の加耕地帯が広がっている。また、この丘陵の基部には老司古墳や卯内尺古墳などの盟主墓的な前方後円墳が立地している。卯内尺古墳と最南端に位置する5号墳との間には150mの隔りがあり、この間に古墳があった可能性は否定できない。5基の古墳は、狭長な細尾根上に並んで占地している。殊に、東へ弧状に延びる丘陵の屈曲部に占地する4号墳は、尾根が低くなる北東側に厚く盛土して墳丘の水平を保ち、葺石も平野に面する北東側の基石列を大きな角礫を並べてより

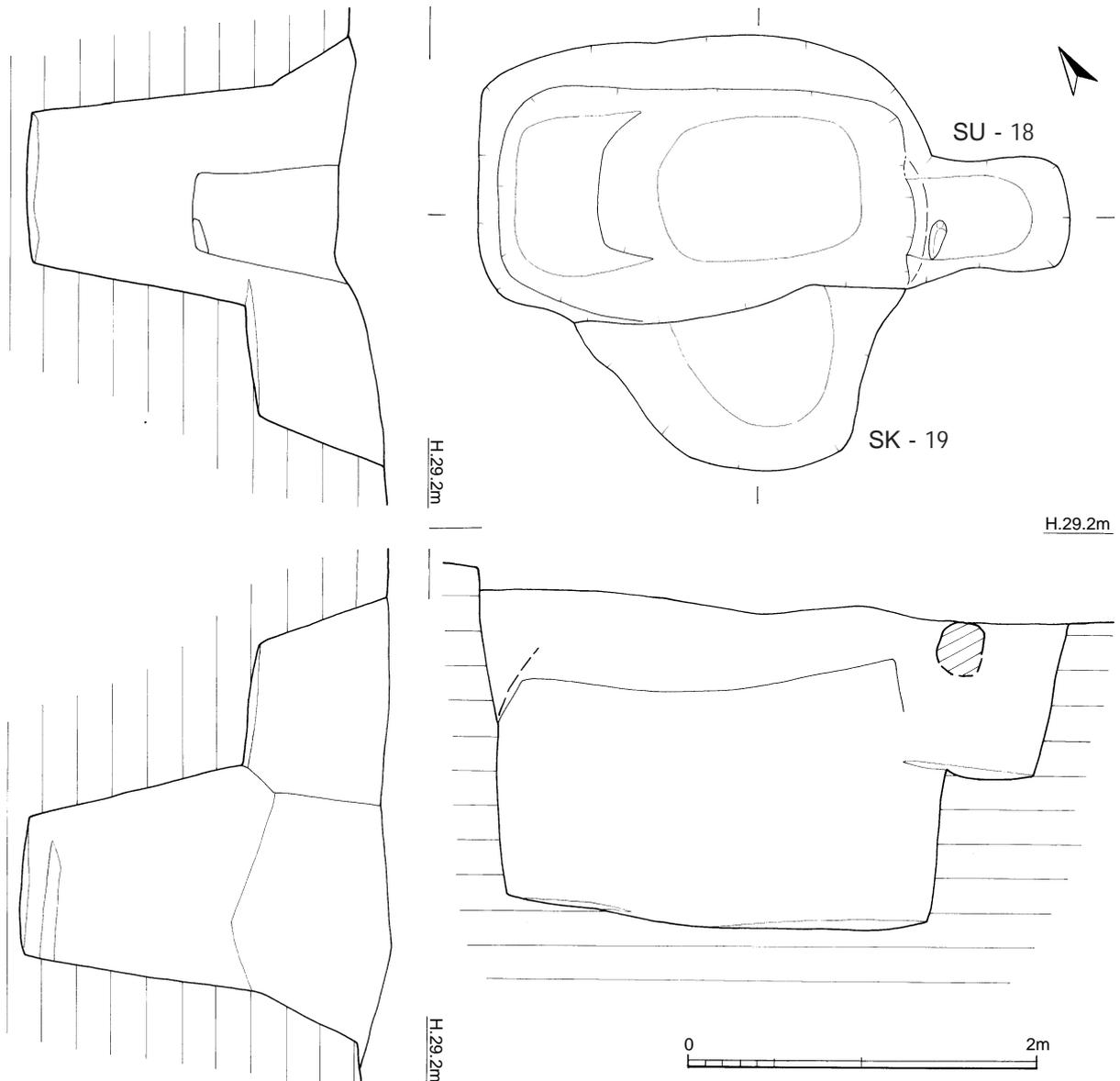


Fig. 38 18号貯蔵穴・19号土壇実測図 (1/40)

大きく見せようとする意図が窺がえ、その規模や構造は、低墳丘墓からなる古墳群の中でも一歩秀でた存在感を示している。那珂川中流域には、炭焼古墳群や井河古墳群、恵子若山古墳群など小古墳と一種秀でた円墳からなる小古墳群があり、低位な丘陵尾根上に立地する共通性ももっており、那珂川中流域における古式古墳の立地や墳丘および埋葬主体部の形態的特徴と酷似している。

一方、この期の古墳は、築造期を決する副葬品や供献遺物の少ない例が一般的である。しかし、2号墳の墳丘から滑石製切子玉、8号墳からは滑石製白玉、4号墳の石棺内には漆塗櫛が、小口壁には鉄斧と鉄鎌が棺外副葬されていた。西側墳裾には丹塗高坏と小型丸底壺が供献されていた。この一群の土器は、少なくとも5世紀初頭のもので、高坏脚の形態的特徴から4世紀末に遡り得る要素を備えている。また、滑石製玉や漆塗櫛は、5世紀代の古墳に副葬される遺物とされ、老司古墳1号石室や野口古墳群2号墳1号主体、同5号墳にも副葬されている。低墳丘墳は、概ね5世紀代の年代観を付与しても差し支えはあるまい。大胆に換言すれば、卵内尺古墳群は5世紀初頭に古墳群の盟主的4号墳が築かれ、追葬が繰り返された中葉までの時期に2・3・8号墳などの低墳丘墳が造墓されたと云えよう。低墳丘など墳丘規模と形態的特徴や在地的な主体部の構造、副葬品などが酷似する等質的な小古墳群と大型前方後円墳とは格段の相違があり、その格差は被葬者の階層的差異に起因し、この地の階層的支配構成を知る資料となる。

(小林義彦)

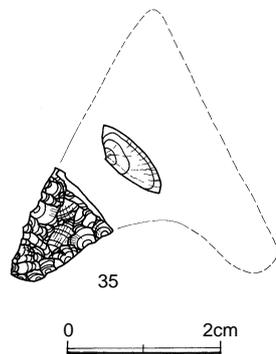


Fig. 40 15号石組遺構出土遺物実測図(1/1)

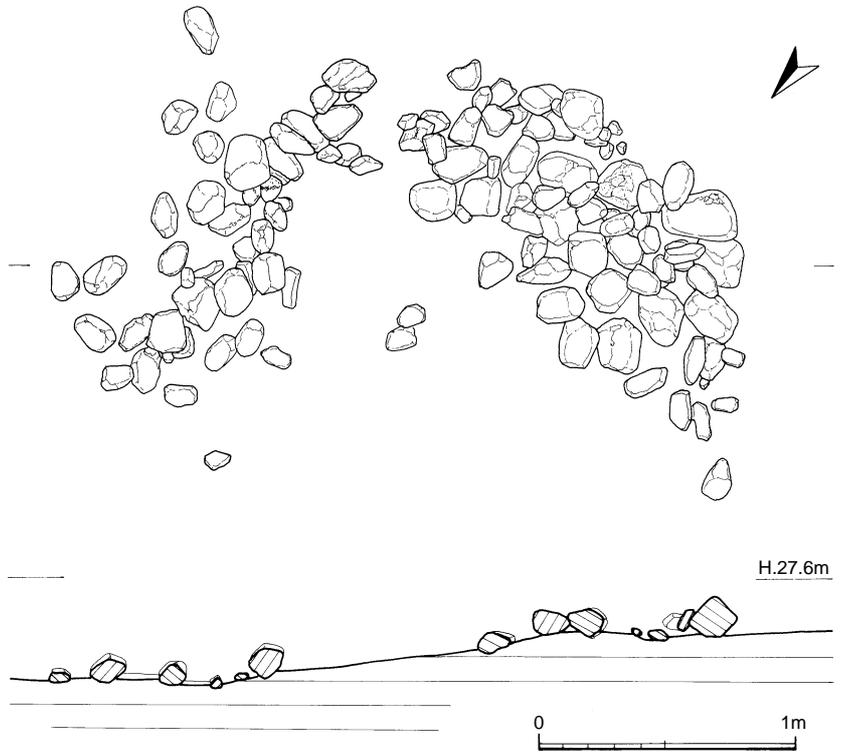


Fig. 39 13号石組遺構実測図(1/30)

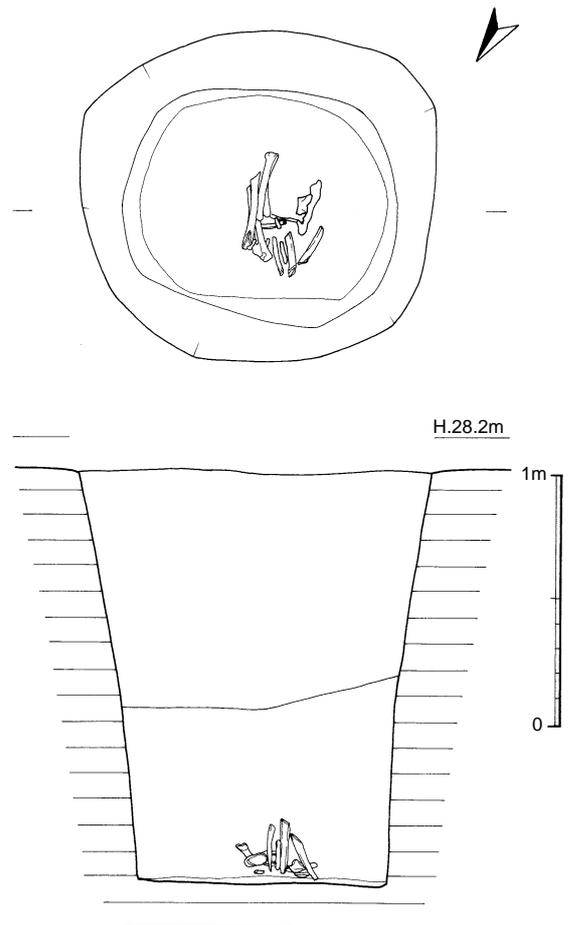


Fig. 41 16号墓実測図(1/30)



Fig. 42 卯内尺古墳群地山整形測量図 (1/500)

卯内尺古墳出土の古墳時代人骨調査報告

高椋浩史・米元史織・中橋孝博
九州大学大学院比較社会文化学府

1 はじめに

福岡市教育委員会による福岡市南区老司所在の卯内尺古墳群の調査によって、古墳時代に該当する箱式石棺から人骨が出土した。卯内尺古墳群は那珂川中流域西岸の丘陵上に立地するが、同丘陵には、福岡平野の古墳の中でも有数の墳丘規模を誇り、初現期の横穴式石室を持つ老司古墳が所在する。この老司古墳からも計6体の人骨が出土しており、その形質は旧筑前地域古墳時代人骨の平均値よりもやや長頭・低顔傾向にあることが指摘されている（土肥ほか，1989）。旧筑前地域における古墳時代人骨は現在までに一定数出土しているが、福岡平野部の古墳から出土した人骨資料はやや少ない。老司古墳人骨が示したような傾向がどの程度の広がりを持つのか、今回報告を行う卯内尺古墳群4号墳の人骨資料は、そうした古墳時代の福岡平野部に居住した人々の特徴を把握する上でも資料的価値が高い。また、卯内尺古墳群4号墳からは後述するように1基の箱式石棺から計4体もの人骨が折り重なって出土しており、その埋葬状況を復元することは考古学分野においても興味深い事例となろう。以下に卯内尺古墳群4号墳から出土した人骨の分析結果を報告する。

2 資料と方法

【分析資料】

卯内尺古墳群4号墳の箱式石棺から出土した人骨は計4体である。人骨は、組み合わせ式の箱式石棺の中に、南北に差し違えに頭位をとって埋葬されていた。北頭位の2体のうち西側の個体をA号人骨、東側の個体をD号人骨とした。また、南頭位の2体のうち東側の個体をB号人骨、西側の個体をC号人骨とした（図2）。

【分析方法】

性別の判定は頭蓋と骨盤の観察に基づいて行った。頭蓋については眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起に注目し、Buikstra and Ubelaker (1994)の基準に拠った。また、骨盤については大坐骨切痕・恥骨下角・恥骨長に注目し、Phenice (1969)、Buikstra and Ubelaker (1994)、Bruzek (2002)の方法に従った。

年齢の判定は、歯の咬耗、寛骨耳状面の観察に基づいて行った。歯の咬耗については栃原 (1957)の方法に、寛骨耳状面についてはLovejoy (1985)の方法に従った。年齢の表記に関しては九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』（1988）記載の年齢区分に従い、幼児（1～6歳）、小児（6～12歳）、若年（12～19歳）、成年（20～39歳）、熟年（40～59歳）、老年（60歳～）とする。

計測は主にMartin-Saller (1957)と馬場 (1991)に従った。また、鼻根部については鈴木 (1963)、顔面の平坦度はYamaguchi (1973)の方法を用いた。脛骨については一部、Vallois (1938)の方法を用いた。

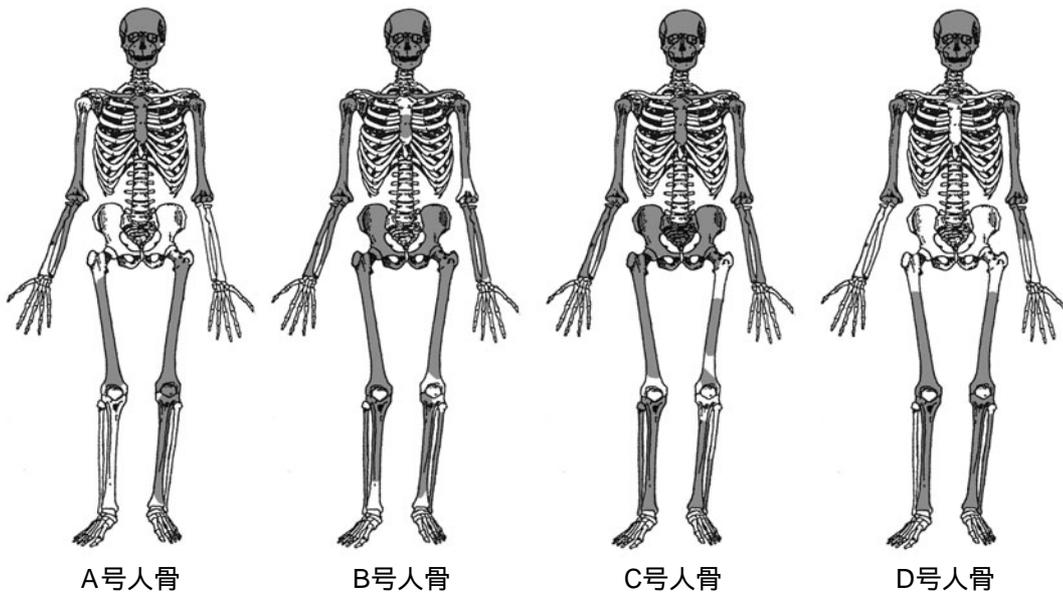


図1 各人骨の残存部位

3 分析結果

【人骨所見】

各個体の残存部位を図1に示している。

〔A号人骨〕

保存状態は比較的良好で、残存歯牙は以下の通りである。歯牙の咬耗度は栃原（1957）の1c~2bである。性別は、頭蓋の乳様突起と眼窩上隆起が発達しており男性と推定される。年齢は、歯牙の咬耗度から熟年以上と推定される。

	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
M ₃	x	x	\	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

○歯槽開放 x歯槽閉鎖 歯根のみ /欠損 ・遊離歯

〔B号人骨〕

保存状態は良好で、ほぼ全身の部位が残存している。残存歯牙は以下の通りである。歯牙の咬耗度は栃原（1957）の1a~1bである。性別は、頭蓋の乳様突起が発達していること、恥骨長と坐骨長がほぼ等しく、恥骨下角が狭いことから男性と推定される。年齢は、歯牙の咬耗度と寛骨耳状面に比較的明瞭な線状の溝が確認できることから成年と推定される。

	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₁	I ₁		C	P ₁		M ₁	M ₂	M ₃

〔C号人骨〕

保存状態は比較的良好で、ほぼ全身の部位が残存している。残存歯牙は以下の通りである。歯牙の咬耗度は柘原(1957)の2 a~2 bである。性別は、頭蓋の乳様突起と外頭隆起が発達していないこと、大坐骨切痕と恥骨下角が広いことから女性と推定される。年齢は歯牙の咬耗度と寛骨耳状面の全面に微小孔が見られることから熟年と推定される。

	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹				P ¹	P ²	M ¹		
x	M ₁	\	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁			M ₂	M ₃

〔D号人骨〕

保存状態は比較的良好で、右前腕と骨盤以外の部位はほぼ残存している。残存歯牙は以下の通りである。歯牙の咬耗度は柘原(1957)の2 b~3°である。性別は、頭蓋の乳様突起、眼窩上隆起、外後頭隆起が発達していないことから女性と推定される。年齢は残存歯牙の咬耗度と、歯牙の脱落と歯槽の閉鎖が一部に見られることから熟年後半から老年と推定される。

\	M ¹	x	x	C	I ²		I ¹	I ²	C	x	x	x	M ²
x	x	P ²	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	x

【埋葬状態】

人骨の出土状況を図2に示している。人骨4体が2体ずつ頭位を差違えて埋葬されている。石棺中央部付近の人骨の保存状態は悪く、これは石棺内部に土砂が流入したことによるものと推定される。

4体のうちB号人骨は南側にすべての骨が寄せられた状態で出土している。体幹および四肢骨はほとんど関節状態を保っておらず、埋葬後に軟部組織がかなり腐朽した段階で片付けが行われたと考えられる。B号人骨の動かし方について、例えば上肢のみあるいは下肢のみを動かすなどの傾向はなく、上肢骨と下肢骨が混在した状態で出土している。B号人骨の上にA号人骨の大腿骨、C号人骨の躯幹骨と右側の上肢骨、D号人骨の下肢がのっており、その三体がほぼ関節状態を保っていることから、B号人骨が初葬と推定される。A号人骨の下肢骨の上にC号人骨の上半身とD号人骨の下腿がのっていることから、A号人骨がC号人骨とD号人骨に先行して埋葬されたと考えられ、A号人骨がB号人骨の次に埋葬されたと推定される。さらに、D号人骨の下肢骨がC号人骨の躯幹骨および上肢骨の上のっていることから、最終埋葬はD号人骨であると考えられる。以上より、B号 A号人骨 C号人骨 D号人骨の順で埋葬されたと推定することができる。

問題となるのはこのような埋葬過程の中でB号人骨の片付けがどの段階で行われたのかという点で、これは各被葬者間の埋葬間隔を推定する上でも重要である。人骨を取り上げていく過程で、二番目に埋葬されたA号人骨の椎骨や左側の大腿骨がB号人骨の片付けられた骨の上のっていることが確認された。A号人骨の下肢骨の関節やその位置に大きな乱れが無いことから、A号人骨が埋葬される際にB号人骨の骨を片付けた可能性が高い。ただし、B号人骨の片付けは少なくとも2回以上あった可能性がある。石棺南半の中央部の棺底から、B号人骨の歯牙が数点検出された。その歯種は上下左右の中切歯、左上顎側切歯、右上顎犬歯、右下顎犬歯、左上顎小臼歯、右上顎小臼歯、左右下顎小臼歯、右下顎第1大臼歯である。発掘調査時にB号人骨の頭蓋から脱落した可能性は低く、それらは

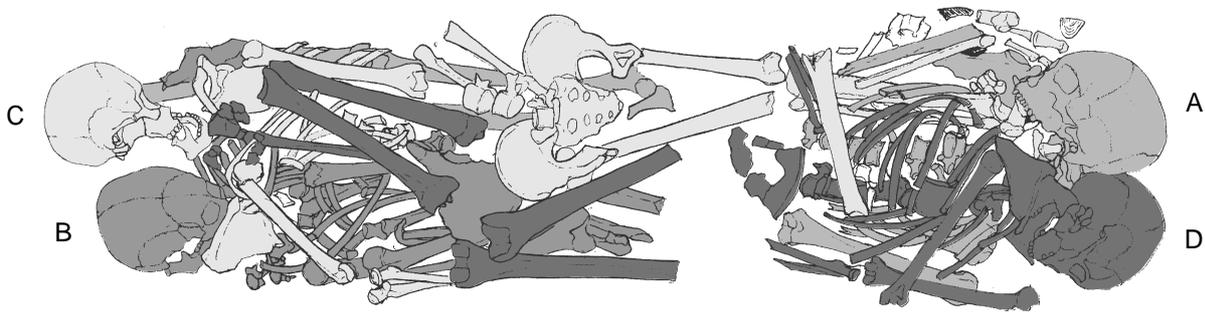


図2 人骨の出土状況

頭蓋に残っていた歯牙と異なる色調を呈することから異なる埋蔵環境下にあったことを示している。つまり、このことはB号人骨の頭蓋が現状とは異なる位置にあったことを示唆し、B号人骨の片付けは骨の動かし方に程度の違いがあるものの少なくとも2回以上行われた可能性が高い。そのうちの一回はA号人骨の埋葬時に行われ、現状に近い状態まで動かし、その後さらにその一部をC号人骨やD号人骨を埋葬する際に動かしたと推定される。以上のことから、初葬者であるB号人骨と次の被葬者であるA号人骨の埋葬間隔は、B号人骨の軟部組織がほぼ完全に腐朽するほどの間隔があると言える。

上述した様にB号人骨以外の被葬者については骨の関節状態やその位置に大きな乱れはないものの、一部については解剖学的正位置を保っていない。例えば、C号人骨の左橈骨は近位と遠位が逆を向き、またC号人骨の左脛骨・左腓骨は右側と比べると動いている。さらに、D号人骨の右側の上腕骨と前腕骨は関節していない。これらについては石棺中央部の土砂の流入による可能性が想定される。その一方で、人為的な移動の可能性も否定できない。特に、C号人骨についてはD号人骨が埋葬される際に動いた可能性がある。両方の可能性を排除することができないが、いずれにせよ上述した各被葬者の埋葬順位を大きく変更する必要はないと考えられる。

【形態的特徴】

〔頭蓋〕

各個体の頭蓋の計測データを表1に、男女ごとの平均値と比較集団の平均値を表2と表3に示している。

A号人骨の脳頭蓋は頭蓋最大長（195mm）が大きく、頭蓋長幅示数（72.3）は長頭型に属する。Ba-Br高（143mm）も他集団の平均値と比べると大きい傾向がみられる。頭長高示数（73.3）は中頭型に、頭幅高示数（101.4）は狭頭型に属する。顔面部は顔高（115mm）、上顔高（69mm）ともに低いため、顔示数と上顔示数ともに低顔傾向を示している。眼窩の各径は比較集団の中でもやや小さい値を示し、眼窩示数（80.5）は中眼窩に属する。鼻幅（28mm）はやや大きく、鼻高（49mm）は比較集団の中でも小さいため、鼻示数（57.1）は広鼻型に属する。また、歯槽側面角（74°）は突顎傾向を示している。

B号人骨の脳頭蓋は頭蓋最大長（179mm）がやや小さく、頭蓋長幅示数（81.6）は短頭型である。Ba-Br高（137mm）は比較集団の中でも高く、頭長高示数（76.5）は高頭型に、頭幅高示数（93.8）は中頭型に属する。顔面部は顔高（107mm）、上顔高（63mm）ともに低く、顔示数と上顔示数ともに低顔傾向を示す。眼窩は幅、高径ともに小さく、眼窩示数（81.6）は中眼窩に属する。鼻幅（27mm）はやや大きく、鼻高（49mm）は比較集団の中でも小さく、鼻示数（55.1）は広鼻型に属する。また、歯槽側面角（75°）は突顎傾向を示している。

C号人骨の脳頭蓋は頭蓋最大長（181mm）および頭蓋最大幅（141mm）ともに女性としては大きく、

表1 各個体の頭蓋計測値と男女別の平均値

Martin No.		A号人骨		B号人骨		C号人骨		D号人骨		N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.
1	頭蓋最大長	195	179	181	179	2	187.0	8.00	2	180.0	1.00				
8	頭蓋最大幅	141	146	141	141	2	143.5	2.50	2	141.0	0.00				
17	Ba-Br高	143	137	137	133	2	140.0	3.00	2	135.0	2.00				
8/1	頭長幅示数	72.3	81.6	77.9	78.8	2	76.9	4.63	2	78.3	0.44				
17/1	頭長高示数	73.3	76.5	75.7	74.3	2	74.9	1.60	2	75.0	0.69				
17/8	頭幅高示数	101.4	93.8	97.2	94.3	2	97.6	3.79	2	95.7	1.42				
5	頭蓋基底長	108	102	102	100	2	105.0	3.00	2	101.0	1.00				
9	最小前頭幅	102	104	94	98	2	103.0	1.00	2	96.0	2.00				
12	最大後頭幅	121	-	109	109	1	121.0	-	2	109.0	0.00				
23	頭蓋水平周	543	-	504	502	1	543.0	-	2	503.0	1.00				
24	横弧長	317	313	300	306	2	315.0	2.00	2	303.0	3.00				
40	顔長	105	101	96	97	2	103.0	2.00	2	96.5	0.50				
43	上顔幅	111	109	101	105	2	110.0	1.00	2	103.0	2.00				
45	頬骨弓幅	139	139	129	135	2	139.0	0.00	2	132.0	3.00				
46	中顔幅	109	108	97	98	2	108.5	0.50	2	97.5	0.50				
47	顔高	115	107	-	-	2	111.0	4.00	-	-	-				
48	上顔高	69	63	60	63	2	66.0	3.00	2	61.5	1.50				
47/45	顔示数(K)	82.7	77.0	-	-	2	79.9	2.88	-	-	-				
47/46	顔示数(V)	105.5	99.1	-	-	2	102.3	3.22	-	-	-				
48/45	上顔示数(K)	49.6	45.3	46.5	46.7	2	47.5	2.16	2	46.6	0.08				
48/46	上顔示数(V)	63.3	58.3	61.9	64.3	2	60.8	2.48	2	63.1	1.22				
50	前眼窩幅	24	23	19	20	2	23.5	0.50	2	19.5	0.50				
F	鼻根横弧長	30	24	26	25	2	27.0	3.00	2	25.5	0.50				
50/F	鼻根曲示数	80.0	95.8	73.1	80.0	2	87.9	7.92	2	76.5	3.46				
51	眼窩高(左)	41	38	37	39	2	39.5	1.50	2	38.0	1.00				
52	眼窩高(左)	33	31	31	34	2	32.0	1.00	2	32.5	1.50				
52/51(L)	眼窩示数(左)	80.5	81.6	83.8	87.2	2	81.0	0.55	2	85.5	1.70				
54	鼻幅	28	27	26	29	2	27.5	0.50	2	27.5	1.50				
55	鼻高	49	49	46	48	2	49.0	0.00	2	47.0	1.00				
57	鼻骨最小幅	11	10	11	10	2	10.5	0.50	2	10.5	0.50				
54/55	鼻示数	57.1	55.1	56.5	60.4	2	56.1	1.02	2	58.5	1.95				
72	全側面角	81	80	82	83	2	80.5	0.50	2	82.5	0.50				
74	齒槽側面角	74	75	70	75	2	85.5	1.50	2	86.5	0.50				
66	下顎角幅	-	-	125	-	-	-	-	1	125.0	-				
69	オトガイ高	36	32	27	-	2	34.0	2.00	1	27.0	-				
69(3)	下顎体厚(左)	16	15	15	-	2	15.5	0.50	1	15.0	-				
70a	下顎枝高(左)	-	-	55	-	-	-	-	1	55.0	-				
71a	下顎枝幅(左)	-	-	35	-	-	-	-	1	35.0	-				

表2 頭蓋計測値の比較(男性)

Martin No.		卯内尺		筑前 ¹⁾		豊前 ¹⁾		筑後 ¹⁾		豊後 ¹⁾		肥前 ¹⁾		肥後 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲・吉胡 ³⁾		西日本 ⁴⁾	
		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(弥生)		(縄文)		(現代)	
		N	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	2	187.0	21	183.0	30	180.6	8	181.4	22	181.8	5	184.6	6	179.8	118	183.7	60	184.2	108	181.4
8	頭蓋最大幅	2	143.5	23	141.3	35	140.7	9	144.1	24	138.6	4	139.5	6	143.2	117	142.4	62	144.9	108	139.3
17	Ba-Br高	2	140.0	17	135.7	23	134.9	7	135.9	23	135.0	6	132.3	7	135.3	101	137.7	26	135.5	108	139.3
8/1	頭長幅示数	2	76.9	18	77.5	30	77.5	7	78.1	20	76.3	3	75.7	4	78.8	104	77.7	55	78.7	108	76.9
17/1	頭長高示数	2	74.9	15	73.8	20	74.4	6	74.6	20	73.7	5	72.0	5	76.6	91	75.3	25	73.3	108	76.9
17/8	頭幅示数	2	97.6	16	95.4	23	96.3	7	96.6	20	97.6	4	95.1	5	94.7	91	97.0	26	93.6	108	100.1
45	頬骨弓幅	2	139.0	19	139.7	19	137.4	6	139.2	17	138.6	6	138.7	5	141.4	103	140.0	16	141.0	106	134.5
46	中顔幅	2	108.5	23	105.3	29	103.9	8	105.0	31	100.9	9	104.0	8	103.6	114	104.7	31	103.8	107	99.9
47	顔高	2	111.0	12	121.2	12	121.8	6	119.5	19	117.9	5	119.2	7	113.9	80	123.8	25	115.7	66	122.2
48	上顔高	2	66.0	22	71.9	28	71.0	8	73.1	31	68.8	6	71.0	6	66.5	114	74.8	28	66.3	92	71.8
47/45	顔示数(K)	2	79.9	10	85.2	9	90.1	5	84.9	12	83.7	3	85.5	4	82.1	71	88.4	10	80.4	64	91.4
47/46	顔示数(V)	2	102.3	11	113.9	12	116.2	6	114.8	18	115.4	5	115.3	6	111.2	74	118.4	18	110.4	65	122.2
48/45	上顔示数(K)	2	47.5	17	51.1	18	49.5	6	51.9	17	49.1	5	52.2	4	47.5	95	53.3	10	47.0	90	53.5
48/46	上顔示数(V)	2	60.8	21	68.3	29	63.7	8	69.8	30	68.2	5	69.4	6	64.3	105	71.5	22	63.1	91	71.8
51	眼窩幅(左)	2	39.5	24	43.7	30	42.6	9	43.9	33	42.8	7	44.7	7	43.6	89	43.2	40	43.2	108	43.0
52	眼窩高(左)	2	32.0	25	34.0	31	33.8	9	34.3	32	33.3	7	33.9	6	32.2	93	34.5	38	33.2	108	34.4
52/51(L)	眼窩示数(左)	2	81.0	24	77.9	30	79.3	9	78.3	32	77.8	7	75.9	6	73.1	86	79.9	32	77.5	108	80.2
54	鼻幅	2	27.5	22	26.5	28	26.4	9	26.3	31	26.1	9	26.9	6	26.3	117	27.1	36	26.5	108	25.9
55	鼻高	2	49.0	22	51.7	29	50.6	9	52.7	32	50.1	10	50.2	8	49.8	116	52.8	30	48.1	108	52.2
54/55	鼻示数	2	56.1	22	51.3	28	52.2	9	50.1	30	52.6	9	54.2	6	52.6	113	51.4	27	54.7	108	49.8

1)九州大学医学部解剖学第2講座(1987) 2)中橋・永井(1989) 3)清野・宮本(1926), 金高(1928) 4)原田(1954)

表3 頭蓋計測値の比較(女性)

Martin No.		卵内尺		筑前 ¹⁾		豊前 ¹⁾		筑後 ¹⁾		豊後 ¹⁾		肥前 ¹⁾		肥後 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲・吉胡 ³⁾		西日本 ⁴⁾	
		(古墳) N	(古墳) M	(古墳) n	(古墳) M	(古墳) n	(古墳) M	(古墳) n	(古墳) M	(古墳) n	(古墳) M	(古墳) n	(古墳) M	(古墳) n	(古墳) M	(弥生) n	(彌生) M	(縄文) N	(縄文) M	(現代) N	(現代) M
1	頭蓋最大長	2	180.0	14	171.6	19	177.9	4	174.3	6	175.0	3	175.7	3	173.3	86	177.0	46	176.1	57	172.8
8	頭蓋最大幅	2	141.0	15	135.4	19	137.8	3	136.7	10	134.7	1	136.0	4	137.8	84	138.4	49	141.5	57	134.0
17	Ba-Br高	2	135.0	12	128.5	11	130.4	3	131.0	8	127.5	4	134.3	2	132.0	66	130.7	21	129.7	57	131.3
8/1	頭長幅示数	2	78.3	12	79.1	17	77.2	3	78.3	6	75.8	1	76.8	3	80.0	72	78.1	41	80.3	57	77.6
17/1	頭長高示数	2	75.0	9	74.7	9	73.7	3	74.3	5	72.5	2	73.0	2	76.3	62	74.1	20	73.6	57	76.0
17/8	頭幅示数	2	95.7	9	95.3	11	94.2	2	97.1	7	94.1	1	92.6	2	97.8	56	94.9	20	91.9	57	98.0
45	頬骨弓幅	2	132.0	12	129.9	8	132.1	2	131.0	9	131.4	3	136.0	3	132.0	61	131.3	10	132.6	57	123.9
46	中顔幅	2	97.5	18	98.2	19	99.0	3	97.3	11	96.6	4	102.0	4	98.0	67	99.8	23	99.7	57	93.4
47	顔高	-	-	7	106.4	6	115.5	1	114.0	7	106.6	1	114.0	4	105.5	45	116.3	14	105.1	14	112.9
48	上顔高	2	61.5	17	65.6	17	66.4	2	67.5	11	62.8	3	69.7	3	61.3	66	70.1	17	62.0	55	68.2
47/45	顔示数(K)	-	-	6	81.6	3	84.7	1	86.4	6	80.8	1	85.1	3	77.6	34	88.7	7	79.2	14	90.8
47/46	顔示数(V)	-	-	7	107.8	6	113.5	2	58.8	7	108.6	1	123.9	4	107.7	39	116.7	13	106.8	14	119.0
48/45	上顔示数(K)	2	46.6	12	50.2	6	51.8	2	51.5	8	47.2	1	49.3	2	43.6	49	53.7	7	48.0	55	55.0
48/46	上顔示数(V)	2	63.1	17	67.0	16	67.4	2	69.6	10	65.2	2	70.7	3	62.7	57	70.2	14	62.3	55	72.9
51	眼窩幅(左)	2	38.0	17	40.8	18	41.4	3	41.7	11	40.0	4	42.0	3	42.0	66	41.6	22	41.7	57	40.5
52	眼窩高(左)	2	32.5	17	33.4	19	33.8	3	33.7	11	31.9	6	33.5	4	32.0	65	34.1	14	32.6	57	34.0
52/51(L)	眼窩示数(左)	2	85.5	16	81.9	18	81.4	3	80.9	11	80.1	4	80.5	3	76.2	62	82.0	13	78.0	57	83.9
54	鼻幅	2	27.5	15	24.4	16	25.8	3	26.3	9	25.8	4	25.3	4	26.0	72	26.6	27	25.4	57	25.0
55	鼻高	2	47.0	16	48.1	17	47.8	2	49.0	10	47.4	3	47.0	4	45.3	71	49.8	21	44.9	57	48.6
54/55	鼻示数	2	58.5	14	51.0	15	53.8	2	55.2	9	54.5	3	55.0	4	57.7	69	53.5	20	56.1	57	51.4

1)九州大学医学部解剖学第2講座(1987) 2)中橋・永井(1989) 3)清野・宮本(1926), 金高(1928) 4)源田(1954)

頭蓋長幅示数(77.9)は中頭型に属する。Ba-Br高(137mm)も他集団の平均値と比べると大きく、頭長高示数(75.7)は高頭型に、頭幅高示数(97.2)は中頭型に属する。顔面部は上顔高(60mm)が低く、上顔示数は低顔傾向を示している。眼窩は幅、高径ともやはり小さめで、眼窩示数(83.8)は中眼窩に属する。鼻幅(26mm)は大きく、鼻高(46mm)は比較集団の中でもやや小さいため、鼻示数(56.5)は広鼻型に属する。また、歯槽側面角(70°)は突顎傾向を示している。

D号人骨の脳頭蓋は頭蓋最大長(179mm)および頭蓋最大幅(141mm)ともに大きく、頭蓋長幅示数(78.8)は中頭型に属する。Ba-Br高(133mm)も他集団の平均値と比べると大きく、頭長高示数(74.3)は高頭型に、頭幅高示数(94.3)は中頭型に属する。顔面部は上顔高(63mm)が低く、上顔示数をみても低顔傾向を示している。眼窩の各径はやはり小さめだが、眼窩高は比較的高く、眼窩示数(87.2)は高眼窩に属する。鼻幅(29mm)は大きく、鼻高(48mm)は比較集団の中でもやや小さいため、鼻示数(60.4)は過広鼻型に属する。また、歯槽側面角(75°)は突顎傾向を示している。

以上の各個体の特徴を踏まえ、形質的特徴を比較集団とともに総合的に検討するために、頭蓋計測9項目を用いて主成分分析を行った。男女それぞれの結果を表4と表5に示す。

表4を見ると、第1主成分は上顔高の項目が高い正の値を示していることから、顔面部の高さを示す因子と考えられる。また、第2主成分はBa-Br高の項目が高い正の値を示していることから脳頭蓋の高さを示す因子と考えられる。第3主成分はすべての項目が正の値を示していることから頭蓋全体のサイズを示す因子と考えられる。

一方、女性の結果を示した表5を見ると、第1主成分は上顔高の項目が高い負の値を示し、頬骨弓間幅がやや高い正の値を示していることから、顔面部の幅と高さの比率を示す因子であると考えられる。つまり、第1主成分得点が高いほど顔面部の高さが低く、幅が広いことを示す。第2主成分はすべての計測項目で正の値を示していることから頭蓋全体のサイズを示す因子と考えられる。第3主成分は頬骨弓間幅で高い負の値を示していることから顔面部の幅を示す因子と考えられる。

男女間で共通する因子を用いて分析を行うために、男性では第1主成分と第3主成分を、女性では

第1主成分と第2主成分を用いて、各集団の主成分得点をプロットしたものが図3と図4である。男性では比較的津雲・吉胡縄文人集団や肥後古墳人集団に近く、北部九州弥生人集団や筑前古墳人集団とは離れている。女性についても同様で、北部九州弥生人集団や筑前古墳人集団とは離れている。

以上の結果から、卯内尺古墳から出土した人骨の頭蓋形態は、いわゆる渡来人の影響を強く受けた北部九州弥生人や筑前古墳人の形質とは異なり、いくぶん縄文人や渡来人の影響力が弱い地域の集団と類似することが明らかとなった。卯内尺古墳に近接する老司古墳から出土した人骨の形質も低顔性と突顎傾向が強いことが指摘されており（土肥ほか，1989）両古墳の人骨形質は非常に類似している。個体変異の影響も考慮しておかなければならないが、卯内尺古墳と老司古墳から出土した人骨の頭蓋形態は同じ地域の筑前古墳人集団とはやや異なる。このことが何を意味するのかについては今後、福岡平野の古墳時代人骨資料の増加を待ち判断する必要があり、さらに古墳の階層性などの考古学的情報を総合して検討する必要がある。

〔四肢骨〕

各個体の四肢骨の計測データと比較集団の平均値を、上肢については表6と表7に示し、下肢については表8と表9に示している。

A号人骨の上肢のうち計測が可能であったのは上腕骨のみであった。左側の最大長は北部九州弥生・古墳人集団の平均値より小さく、現代九州人の平均値と近い。断面形状は中央最大径・最少径ともに比較集団の平均値と異なる傾向はみられない。下肢についてはいずれも断面のみ計測が可能で、大腿骨は中央矢状径がやや長く、北部九州弥生・古墳人集団の断面示数と比較するとやや柱状性が強い。脛骨については発達した傾向は見られず、断面示数を見ても扁平性は強くない。

B号人骨の上肢骨では、上腕骨、橈骨、尺骨の長径はいずれも比較集団の平均値と同等かそれ以上である。その一方で、各断面径および周径は北部九州の古墳や弥生集団に比べてやや細い傾向を示す。下肢骨のうち長径が計測可能であった大腿骨は比較集団の中でも小さい。大腿骨、脛骨、腓骨の断面径・周径ともに比較集団の平均値より小さく、大腿骨の柱状性や脛骨の扁平性は見られない。

C号人骨の上肢骨では、上腕骨、橈骨、尺骨の長径はいずれも北部九州の古墳・弥生集団の平均値よりも小さく、各断面径および周径にも同様の傾向が認められる。下肢骨のうち長径の計測が可能であった腓骨は現代人を含む比較集団の平均値より小さい。大腿骨、脛骨、腓骨の断面径・周径ともに、かなり華奢な傾向がみられる。大腿骨の柱状性や脛骨の扁平性は見られない。

D号人骨の上肢骨のうち、長径が計測可能であった上腕骨は比較集団の中でも大きい。それに対して各断面径および周径では比較集団の平均値を下回る部分が多い。下肢骨のうち長径が計測可能であ

表4 頭蓋計測9項目に基づく主成分分析(男性)

	第1主成分	第2主成分	第3主成分
頭蓋最大長	-.138	.292	.144
頭蓋最大幅	-.176	.057	.634
Ba-Br高	-.045	.631	.010
頬骨弓幅	-.136	-.223	.432
上顔高	.587	.160	.515
眼窩幅(左)	.069	-.177	.066
眼窩高(左)	.047	.005	.027
鼻幅	-.006	.012	.016
鼻高	.150	.081	.120
固有値	3.734	2.021	1.422
寄与率	41.5	22.5	15.8

表5 頭蓋計測9項目に基づく主成分分析(女性)

	第1主成分	第2主成分	第3主成分
頭蓋最大長	.227	.265	.386
頭蓋最大幅	.275	.070	.209
Ba-Br高	.105	.248	.298
頬骨弓幅	.305	.351	-.873
上顔高	-.412	.699	-.041
眼窩幅(左)	-.022	.030	-.160
眼窩高(左)	-.022	.035	.025
鼻幅	.023	.019	.058
鼻高	-.084	.085	.121
固有値	3.491	1.951	1.493
寄与率	38.791	21.673	16.593

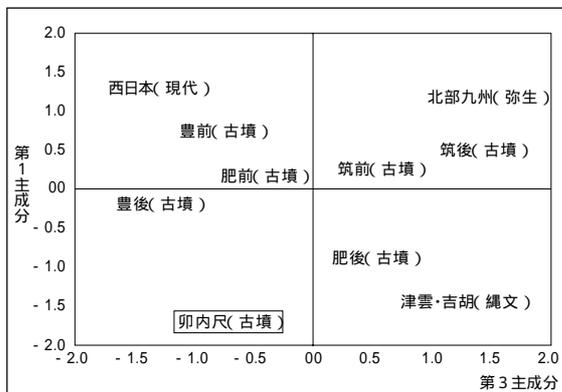


図3 各集団の主成分得点に基づく散布図(男性)

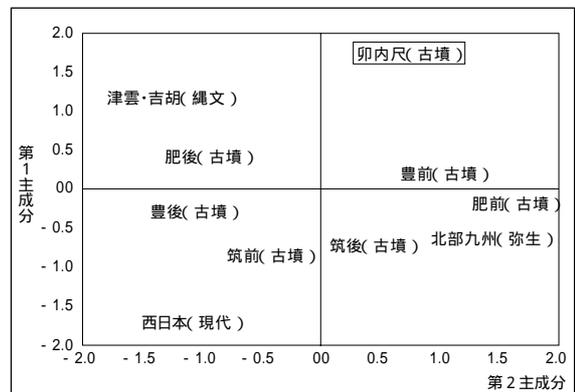


図4 各集団の主成分得点に基づく散布図(女性)

表6 上肢骨の計測値と平均値の比較(男性)

		卯内尺				北部九州 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲 ³⁾		九州 ⁴⁾	
		A号人骨		B号人骨		(古墳)		(弥生)		(縄文)		(現代)	
		R	L	R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨													
1	最大長	-	296	301	-	8	304.6	22	302.6	36	284.3	106	295.3
2	全長	-	289	296	-	6	300.7	17	296.8	35	280.6	106	290.6
5	中央最大径	23	23	21	22	21	23.3	76	23.3	50	24.1	106	21.9
6	中央最小径	18	18	17	17	20	17.7	76	17.4	50	17.8	106	16.9
7	骨体最小周	62	61	59	59	37	64.1	81	63.9	50	64.0	106	61.8
7a	中央周	64	65	62	63	21	68.1	75	67.8	50	69.3	106	63.7
6/5	骨体断面示数	78.3	78.3	81.0	77.3	21	72.3	76	74.9	50	73.9	106	79.1
7/1	長厚示数	-	20.6	19.6	-	6	21.4	22	21.3	36	22.7	106	20.9
橈骨													
1	最大長	-	-	-	237	9	226.2	37	236.5	27	230.6	64	219.9
2	機能長	-	-	-	224	8	215.8	28	220.0	28	217.4	64	208.2
3	最小周	-	-	39	40	25	42.2	78	43.1	38	44.0	63	40.1
4	骨体横径	-	-	15	16	30	17.3	79	17.2	42	17.1	63	16.0
4a	骨体中央横径	-	-	14	16	10	16.7	50	16.0	-	-	63	15.2
5	骨体矢状径	-	-	13	12	30	12.3	79	12.5	42	12.0	63	11.7
5a	骨体中央矢状径	-	-	13	12	10	12.3	50	12.6	-	-	63	11.9
3/2	長厚示数	-	-	-	17.9	7	20.4	28	19.8	27	20.5	61	20.4
5/4	骨体断面示数	-	-	86.7	75.0	30	71.1	79	72.6	42	70.2	60	71.4
5a/4a	中央断面示数	-	-	92.9	75.0	10	74.1	50	78.6	-	-	-	-
尺骨													
1	最大長	-	-	-	246	2	241.5	12	253.2	19	249.1	62	236.2
2	機能長	-	-	-	226	4	223.5	15	224.7	25	219.7	64	209.2
3	最小周	-	-	35	36	13	36.8	63	37.4	34	37.7	65	35.8
11	矢状径	-	-	15	15	24	13.4	100	13.2	50	14.3	63	12.8
12	横径	-	-	16	16	24	17.4	100	17.6	50	16.3	64	16.5
3/2	長厚示数	-	-	-	15.9	4	17.3	15	16.8	25	17.4	63	17.0
11/12	骨体断面示数	-	-	93.8	93.8	24	77.3	100	75.4	50	88.5	63	74.9

1)九州大学医学部解剖学第2講座(1987) 2)中橋・永井(1989) 3)清野・平井(1928) 4)専頭(1957), 溝口(1957)

った脛骨は上腕骨で見られた比較関係とはやや異なり、北部九州弥生・古墳人集団より小さく、縄文人集団の平均値に近い。各断面径および周径のうち大腿骨と脛骨については比較集団の平均値より小さいが、腓骨は比較集団の平均値より大きい。

[平均身長]

大腿骨の最大長からPearsonの式を用いて身長を推定した。身長を算出できたのはB号人骨のみで、158.6cmと推定される。他集団との比較を示した図5を見ると、北部九州弥生・古墳人集団の平均値より低く、比較集団の中でも低身長である。大腿骨の最大長が計測できなかった個体についても、大腿骨以外の四肢骨の長径から推測すると比較的に低身長であった可能性が高い。

表7 上肢骨の計測値と平均値の比較(女性)

		卯内尺				北部九州 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲 ³⁾		九州 ⁴⁾	
		C号人骨		D号人骨		(古墳)		(弥生)		(縄文)		(現代)	
		R	L	R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨													
1	最大長	-	281	290	-	2	286.0	11	283.2	21	264.4	36	271.7
2	全長	-	276	-	-	2	282.0	8	282.3	19	259.9	36	268.6
5	中央最大径	19	19	19	18	5	20.4	35	21.0	40	19.7	36	19.8
6	中央最小径	16	15	14	14	5	15.4	36	15.3	41	14.0	36	14.8
7	骨体最小周	52	51	52	51	15	54.5	47	56.9	42	53.9	36	54.8
7a	中央周	55	56	54	54	5	60.2	33	60.7	40	56.5	36	56.9
6/5	骨体断面示数	84.2	78.9	73.7	77.8	5	75.5	35	73.2	40	71.3	36	75.3
7/1	長厚示数	-	18.1	17.9	-	2	21.5	11	19.8	21	20.4	106	20.9
橈骨													
1	最大長	-	202	-	-	2	216.5	17	215.1	24	208.2	12	199.2
2	機能長	-	190	-	-	2	205.0	11	204.3	26	196.4	12	187.0
3	最小周	37	37	-	-	7	36.9	52	37.9	30	36.4	12	34.7
4	骨体横径	14	14	14	-	7	15.4	56	15.7	34	14.6	12	14.5
4a	骨体中央横径	14	14	-	-	3	14.7	24	14.3	-	-	12	13.5
5	骨体矢状径	11	12	11	-	7	10.9	56	10.9	34	9.8	12	9.7
5a	骨体中央矢状径	11	11	-	-	3	10.3	24	10.8	-	-	12	9.7
3/2	長厚示数	-	19.5	-	-	2	19.8	11	11.7	25	18.2	12	18.1
5/4	骨体断面示数	78.6	85.7	78.6	-	12	70.4	56	69.3	34	67.5	12	68.3
5a/4a	中央断面示数	78.6	78.6	-	-	3	70.5	24	75.7	-	-	-	-
尺骨													
1	最大長	-	219	-	-	1	233.0	6	236.5	12	227.2	12	215.0
2	機能長	-	197	-	-	1	208.0	8	207.6	12	198.6	12	189.2
3	最小周	-	36	-	-	8	33.3	34	34.4	24	32.8	12	32.1
11	矢状径	14	13	13	-	9	11.2	54	11.2	37	11.3	12	10.9
12	横径	12	14	14	-	8	15.0	54	16.0	37	13.6	12	13.9
3/2	長厚示数	-	18.3	-	-	1	16.3	7	16.5	12	16.4	12	16.8
11/12	骨体断面示数	116.7	92.9	92.9	-	8	74.5	54	70.4	37	83.5	12	77.5

1)九州大学医学部解剖学第2講座(1987) 2)中橋・永井(1989) 3)清野・平井(1928) 4)専頭(1957), 溝口(1957)

表8 下肢骨の計測値と平均値の比較(男性)

		卯内尺				北部九州 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲 ³⁾		九州 ⁴⁾	
		A号人骨		B号人骨		(古墳)		(弥生)		(縄文)		(現代)	
		R	L	R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨													
1	最大長	-	-	412	-	34	427.9	60	430.9	19	414.1	59	406.5
2	自然位長	-	-	406	-	19	426.0	18	427.7	19	411.0	59	403.2
6	中央矢状径	30	29	25	26	79	28.7	162	29.7	47	29.0	59	26.5
7	中央横径	27	27	26	27	80	27.6	166	28.0	47	26.0	59	25.6
8	中央周	87	85	80	80	74	88.5	161	90.8	47	87.4	59	82.4
9	骨体上横径	29	-	30	29	65	32.3	115	32.6	43	30.7	59	29.4
10	骨体上矢状径	26	-	25	25	65	25.7	115	26.2	43	25.5	59	24.3
8/2	長厚示数	-	-	19.7	-	19	20.4	18	21.4	19	21.2	59	20.4
6/7	中央断面示数	111.1	107.4	96.2	96.3	79	104.6	162	106.4	47	111.8	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	89.7	-	83.3	86.2	65	80.1	115	80.5	43	83.1	58	82.8
脛骨													
1	全長	-	-	-	-	14	334.9	27	345.6	20	340.0	61	320.3
1a	最大長	-	-	-	-	17	340.1	52	350.5	22	343.6	60	326.9
8	中央最大径	29	31	27	28	31	29.8	74	32.0	46	32.3	61	27.8
8a	栄養孔最大径	34	33	32	32	54	34.7	153	36.5	38	35.2	60	30.6
9	中央横径	23	22	23	22	32	21.8	72	22.9	46	20.4	61	21.1
9a	栄養孔位置横径	24	23	25	22	54	24.2	153	25.3	38	22.2	61	23.7
10	骨体周	82	82	79	72	30	82.0	74	86.5	45	84.5	62	78.4
10a	栄養孔位周	93	92	88	85	54	94.3	151	96.9	38	92.8	61	88.9
10b	最小周	75	74	-	-	51	75.1	122	78.4	41	76.7	60	71.3
9/8	中央断面示数	79.3	71.0	85.2	78.6	31	73.5	74	72.2	46	63.3	61	76.1
9a/8a	栄養孔位断面示数	70.6	69.7	78.1	68.8	54	69.9	152	69.5	38	63.0	60	77.5
10b/1	長厚示数	-	-	-	-	14	22.5	26	22.7	20	22.9	60	22.4
腓骨													
1	最大長	-	-	-	-	2	332.5	8	347.9	13	329.5	58	322.9
2	中央最大径	-	15	16	17	7	16.0	46	17.0	44	17.8	59	14.5
3	中央最小径	-	11	11	11	6	11.3	46	11.6	44	12.2	59	10.0
4	中央周	-	43	43	44	7	45.6	47	47.2	44	51.3	59	41.5
4a	最小周	-	-	-	-	11	36.5	24	39.7	29	39.2	59	35.6
3/2	中央断面示数	-	73.3	68.8	64.7	6	69.4	46	68.3	44	68.6	59	69.5
4a/1	長厚示数	-	-	-	-	2	11.7	8	11.0	13	12.0	58	11.1

1)九州大学医学部解剖学第2講座(1987) 2)中橋・永井(1989) 3)清野・平井(1928) 4)阿部(1955), 鑄鐵(1955)

表9 下肢骨の計測値と平均値の比較(女性)

	卵内尺				北部九州 ¹⁾ (古墳)		北部九州 ²⁾ (弥生)		津雲 ³⁾ (縄文)		九州 ⁴⁾ (現代)		
	C号人骨		D号人骨		N	M	N	M	N	M	N	M	
	R	L	R	L									
大腿骨													
1	最大長	-	-	-	-	11	401.0	34	413.4	22	388.2	13	380.1
2	自然位長	-	-	-	-	6	399.3	11	40.6	22	381.7	13	375.9
6	中央矢状径	22	-	24	23	42	24.5	112	25.9	45	25.2	13	23.6
7	中央横径	24	-	25	26	42	25.9	112	26.6	45	24.2	13	23.2
8	中央周	71	-	76	75	40	78.9	111	82.2	45	78.0	13	74.2
9	骨体上横径	28	-	-	-	33	30.5	86	31.2	42	28.4	13	27.5
10	骨体上矢状径	21	-	-	-	33	21.9	86	23.2	42	22.2	13	21.3
8/2	長厚示数	-	-	-	-	6	19.6	11	20.7	21	20.3	13	19.8
6/7	中央断面示数	91.7	-	96.0	88.5	42	94.9	112	97.7	45	104.5	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	75.0	-	-	-	33	72.0	86	74.9	42	78.2	13	77.1
脛骨													
1	全長	-	-	309	309	2	331.0	20	332.2	17	319.8	14	301.0
1a	最大長	-	-	321	325	3	333.0	30	333.3	17	324.4	14	306.0
8	中央最大径	24	24	26	25	8	25.8	46	27.3	42	27.3	14	24.7
8a	栄養孔最大径	26	27	28	31	22	30.9	97	31.3	37	30.5	14	28.1
9	中央横径	19	20	19	18	8	19.8	46	20.7	42	17.9	14	18.8
9a	栄養孔位置横径	20	21	19	20	23	21.1	98	22.7	36	19.4	14	21.1
10	骨体周	68	67	70	70	8	72.1	46	75.4	42	73.4	14	70.1
10a	栄養孔位周	75	73	76	79	24	82.9	96	84.0	35	81.3	14	78.2
10b	最小周	63	63	60	61	23	65.1	82	69.1	35	67.6	14	63.6
9/8	中央断面示数	79.2	83.3	73.1	72.0	8	77.0	46	76.2	42	65.8	14	76.3
9a/8a	栄養孔位断面示数	76.9	77.8	67.9	64.5	22	68.9	97	72.6	36	63.6	14	74.9
10b/1	長厚示数	-	-	19.4	19.7	2	21.6	20	21.1	17	21.1	14	21.2
腓骨													
1	最大長	296	-	-	-	-	-	2	328.0	8	316.9	14	300.6
2	中央最大径	13	12	-	16	-	-	34	14.7	32	14.7	14	12.9
3	中央最小径	9	9	-	10	1	13.0	34	9.8	32	10.0	14	8.6
4	中央周	38	-	-	41	1	35.0	34	40.7	32	42.8	14	36.8
4a	最小周	32	-	-	-	2	35.0	8	35.6	20	34.0	14	32.3
3/2	中央断面示数	69.2	75.0	-	62.5	-	-	34	67.3	32	68.3	14	67.6
4a/1	長厚示数	10.8	-	-	-	-	-	2	10.8	8	11.0	14	10.8

1)九州大学医学部解剖学第2講座(1987) 2)中橋・永井(1989) 3)清野・平井(1928) 4)阿部(1955), 鑄鍋(1955)

4 おわりに

以上、卵内尺古墳群4号墳出土の人骨資料について検討を行った。人骨は1基の箱式石棺の中に折り重なるように出土しており、人骨の出土状況から埋葬順位と埋葬間隔の復元を試みた。その結果、初葬者と後続の3体の被葬者との間にやや長い埋葬間隔があることが推定された。被葬者間の関係、例えば血縁関係の有無などについては今後の分析が必要である。頭蓋の形質的特徴については、4体とも顔面部の低顔性と突顎という共通した特徴を持ち、近接する

老司古墳から出土した人骨と共通する特徴が確認された。また、四肢骨の形質的特徴については、同時代の同じ地域集団と比べると各長径がやや短く、断面径・周径ともに小さくやや華奢な傾向が確認できた。身長については、推定ができたのは1体のみであったが、比較集団の平均値と比べると低身長であった。

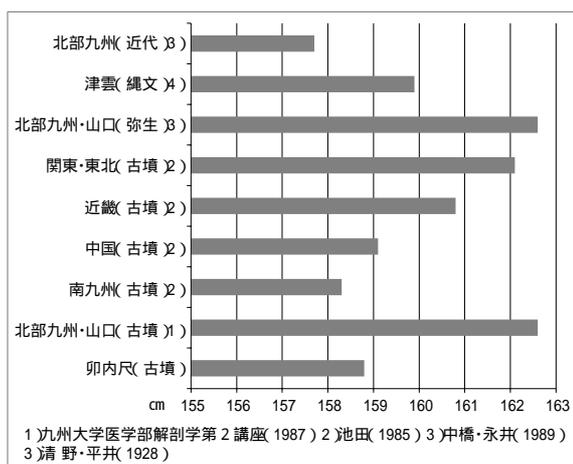


図5 平均身長比較(男性)

謝辞

報告を行うにあたり福岡市教育委員会の先生方に多くの御教示と御配慮をいただきました。また、人骨の整理に際して九州大学総合研究博物館の舟橋京子先生、九州大学大学院比較社会文化学府の李ハヤン氏、谷澤亜里氏、早川和賀子氏にご助力を賜りました。記して感謝申し上げます。

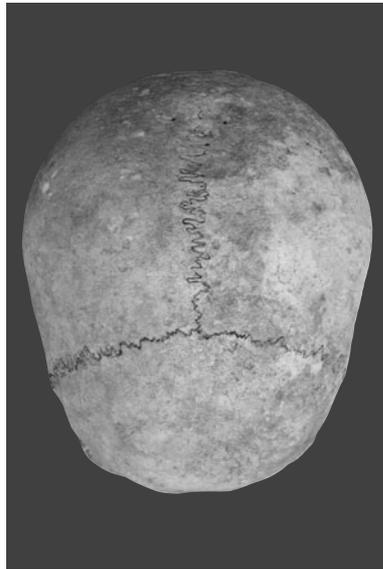
参考文献

- 阿部英世 (1955) 現代九州人大腿骨の人類学的研究 . 人類学研究 2 .
- 馬場悠男 (1991) 人体計測法 人骨計測法 . 人類学講座別巻 1、雄山閣出版 .
- Bruzek J. (2002) A method for visual determination of sex, using the human hip bone. *American Journal of Physical Anthropology*, 117: 157-168.
- Buikstra J.E. and Ubelaker D.H. (1994) Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains. *Arkansas Archeological Survey Research Series*, No.44. Fayetteville, Arkansas.
- Doi N. and Tanaka Y. (1987) A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. *Anthropological Science*, 95:325-343.
- 土肥直美・田中良之・永井昌文 (1989) 老司古墳出土人骨について . 老司古墳 . pp.151-162 , 福岡市教育委員会 .
- 鑄鍋命達 (1955) 九州人下腿骨の研究 . 人類学研究 2 .
- 原田忠昭 (1954) 現代西南日本人頭骨の人類学的研究 . 人類学研究 1 .
- 池田次郎 (1985) 国家成立前後の日本人 - 総合比較とまとめ . 季刊人類学 16 .
- 金高勘次 (1928) 吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究 . 人類学雑誌 43 .
- 鑄鍋命達 (1955) 九州人下腿骨の研究 . 人類学研究 2 .
- 清野謙次・宮本博人 (1926) 津雲貝塚人人骨の人類学的研究第 2 部、頭蓋骨の研究 . 人類学雑誌 41 .
- 清野謙次・平井隆 (1928) 津雲貝塚人骨の人類学的研究、第 3 部、上肢骨の研究、第 4 部、下肢骨の研究 . 人類学雑誌 43、第 3、4 付録 .
- 九州大学医学部解剖学第二講座編 (1988) 日本民族・文化の生成 2 . 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成 . 六興出版 .
- Lovejoy,C.Owen,R.S.Meindl,R.Mensforth,and T.J.Barton (1985) Multifactorial Determination of Skeletal age at Death. *American journal of Physical Anthropology* 68 : 1-14.
- Martin-Saller (1957) *Lehrbuch der Anthropologie*. Bd.I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 溝口静男 (1957) 現代九州日本人前腕骨の人類学的研究 . 人類学研究 4 .
- 中橋孝博・永井昌文 (1989) 弥生人の形質、男女差、寿命 . 弥生文化の研究 1 . 雄山閣 .
- Phenice T.W. (1969) A newly developed visual method of sexing the os pubis. *American Journal of Physical Anthropology*, 30:297-301.
- 専頭時義 (1957) 九州人下腿骨の研究 . 人類学研究 2 .
- 鈴木尚 (1963) 日本人の骨 . 岩波新書 477 .
- 栃原博 (1957) 日本人歯牙の咬耗に関する研究 . 熊本医学会雑誌 , 31 : 607-656.
- Vallois H.V. (1938) Les methodes de mensuration de la platycnemie: etude critique. *Bulletin of Society of Anthropology* .
- Yamaguchi, B (1973) Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. *Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo* 16: 161-171.



〔A号人骨〕

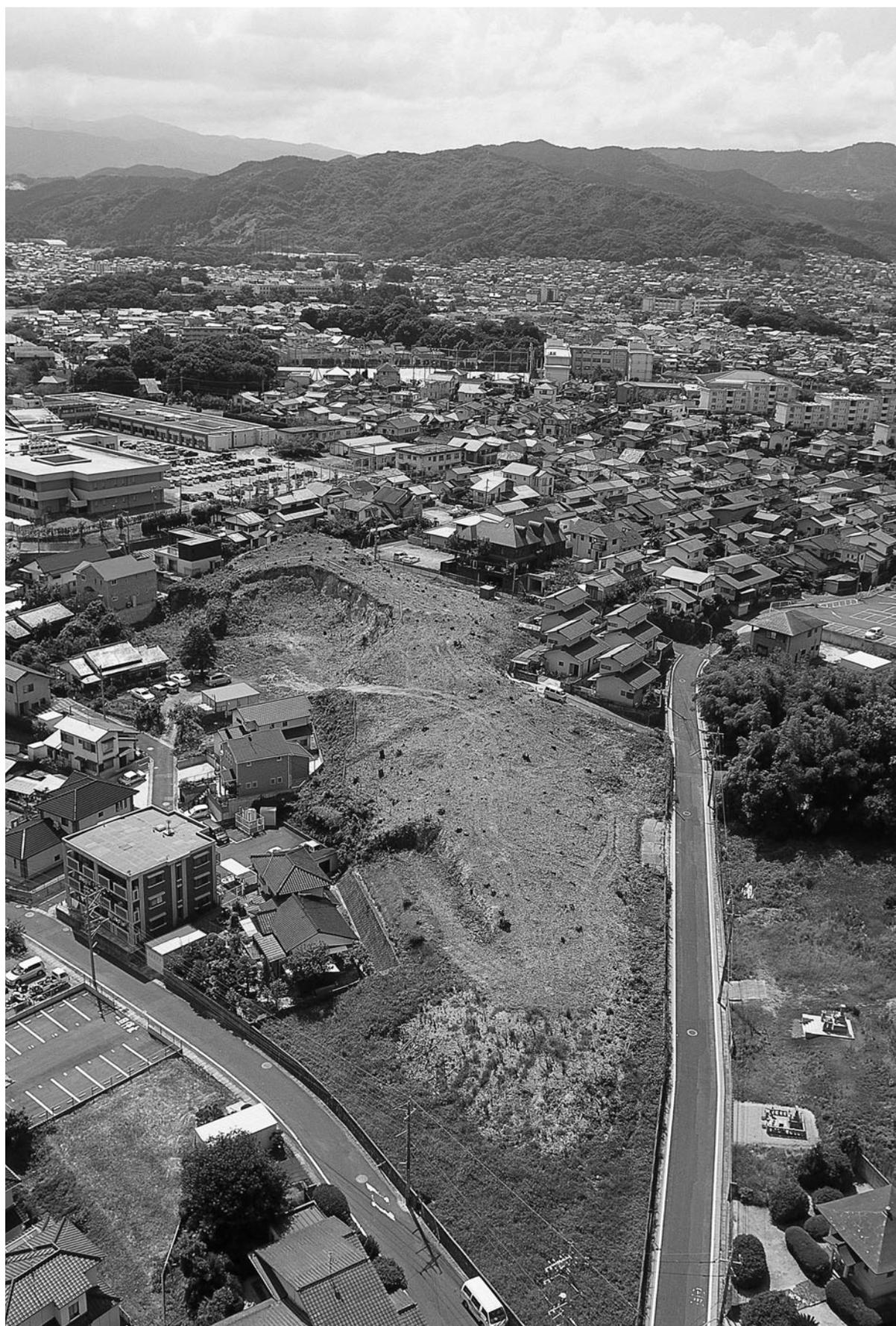
〔B号人骨〕



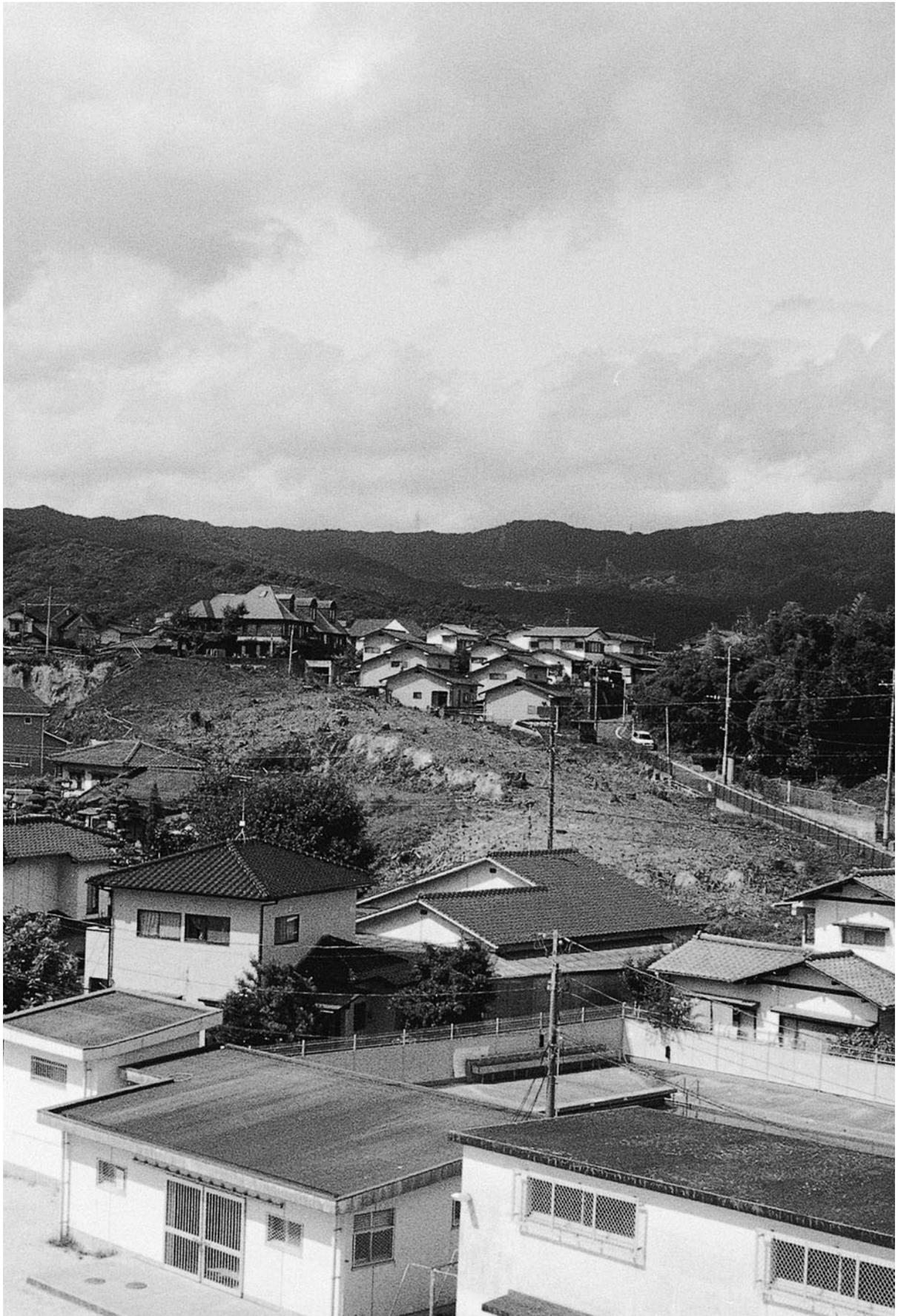
〔C号人骨〕

〔D号人骨〕

PLATE



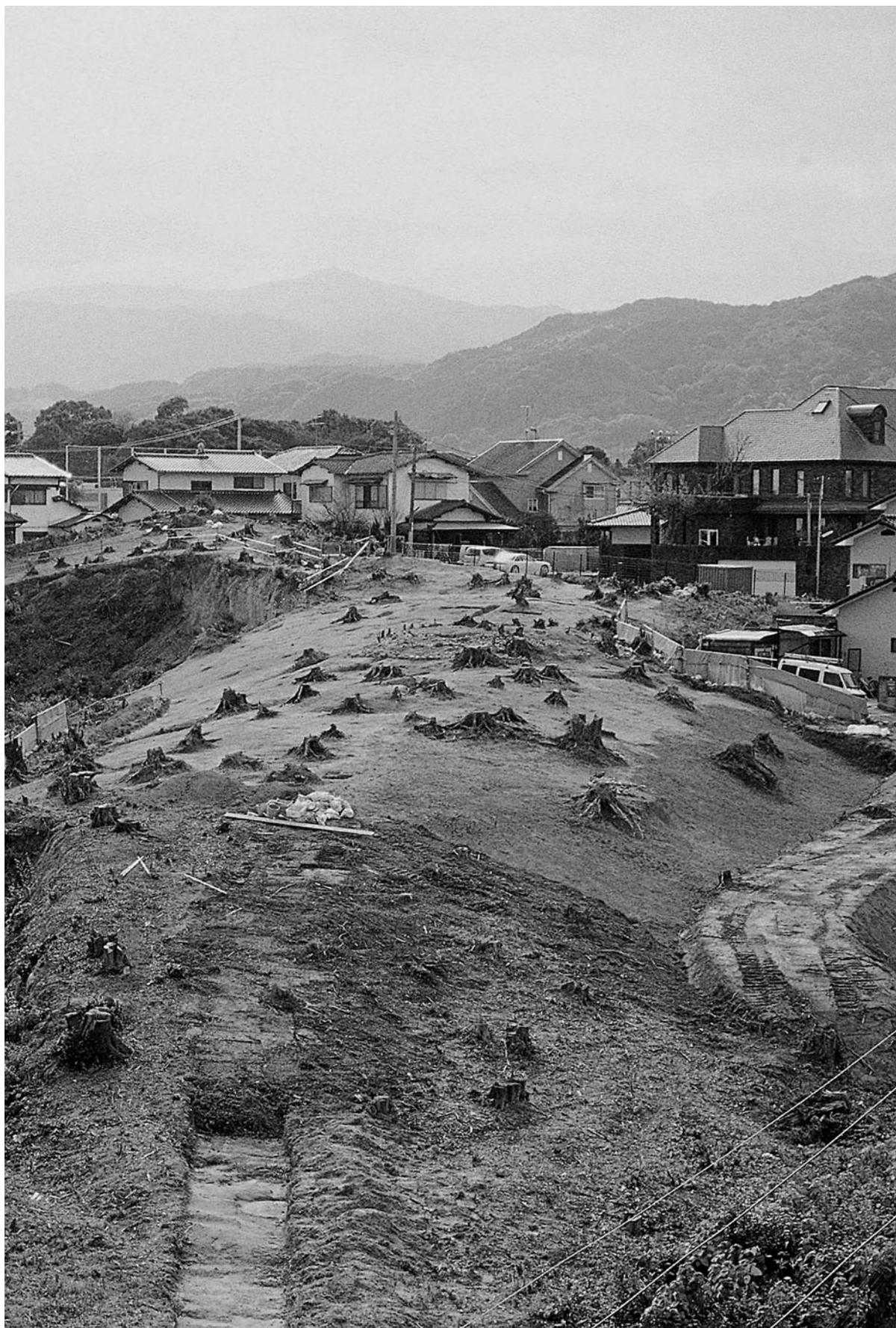
卯内尺古墳群調査前遠景（北東から）



卯内尺古墳群調査前近影（北東から）



卯内尺古墳群地山整形全景（東から）



卯内尺古墳群地山整形近景（北から）



1) 2・5号墳調査前全景(北から)



2) 2号墳調査前墳丘全景(南から)



1) 2号墳地山整形全景(西から)



2) 2号墳土器出土状況(北から)



1) 3号墳調査前墳丘全景(東から)



2) 3号墳地山整形全景(北から)



1) 3号墳主体部全景(北から)



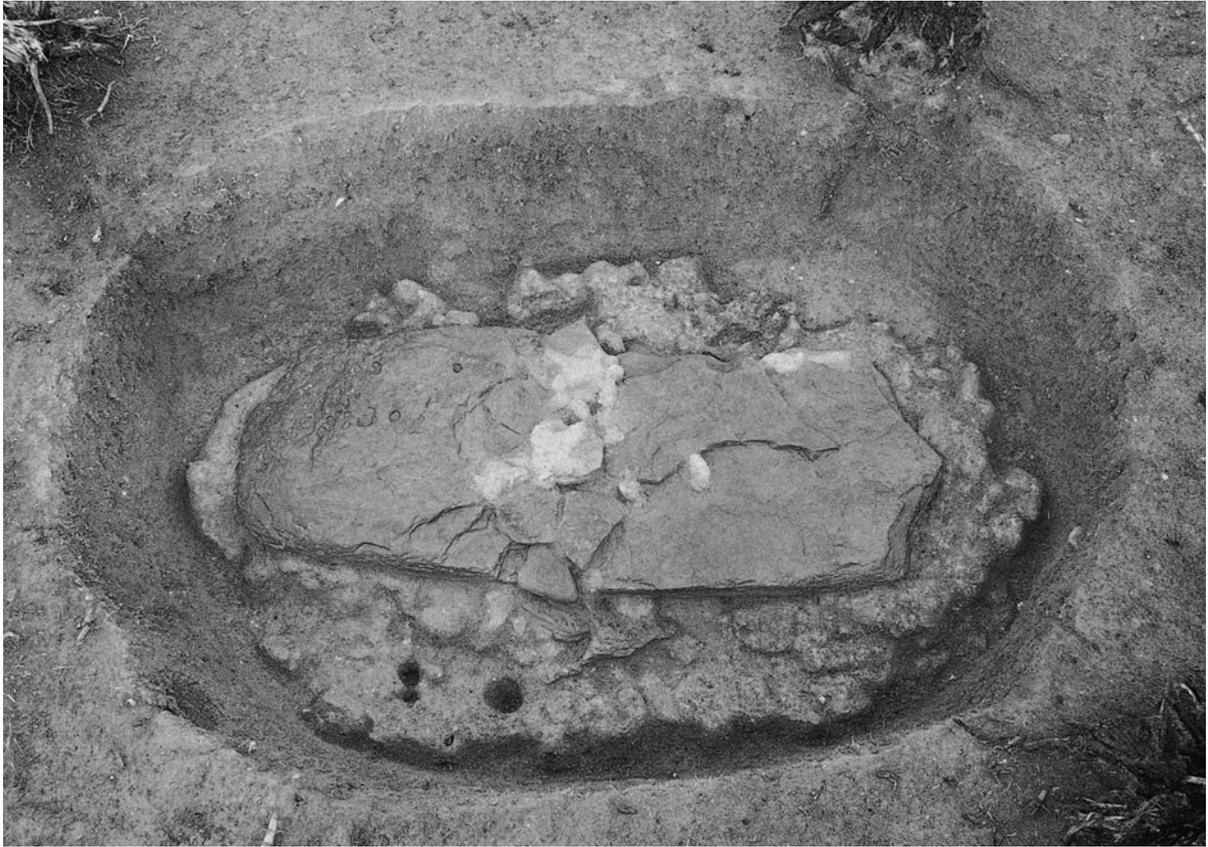
2) 3号墳主体部横断面(東から)



1) 4号墳調査前墳丘全景(西から)



2) 4号墳全景(北から)



1) 4号墳主体部蓋石検出状況(西から)



2) 4号墳墓壙土層断面(北から)



1) 4号墳主体部開棺全景(北から)



2) 4号墳主体部開棺状況(南から)



1) 4号墳主体部埋葬人骨検出状況(東から)



2) 4号墳主体部埋葬人骨検出状況(東から)



1) 4号墳南側埋葬人骨検出状況(北から)



2) 4号墳副葬漆塗櫛検出状況(南から)



1) 4号墳棺外副葬鉄鎌・鉄斧検出状況(南から)



2) 4号墳棺外副葬刀子検出状況(西から)



1) 4号墳西面葺石構築状況(西から)



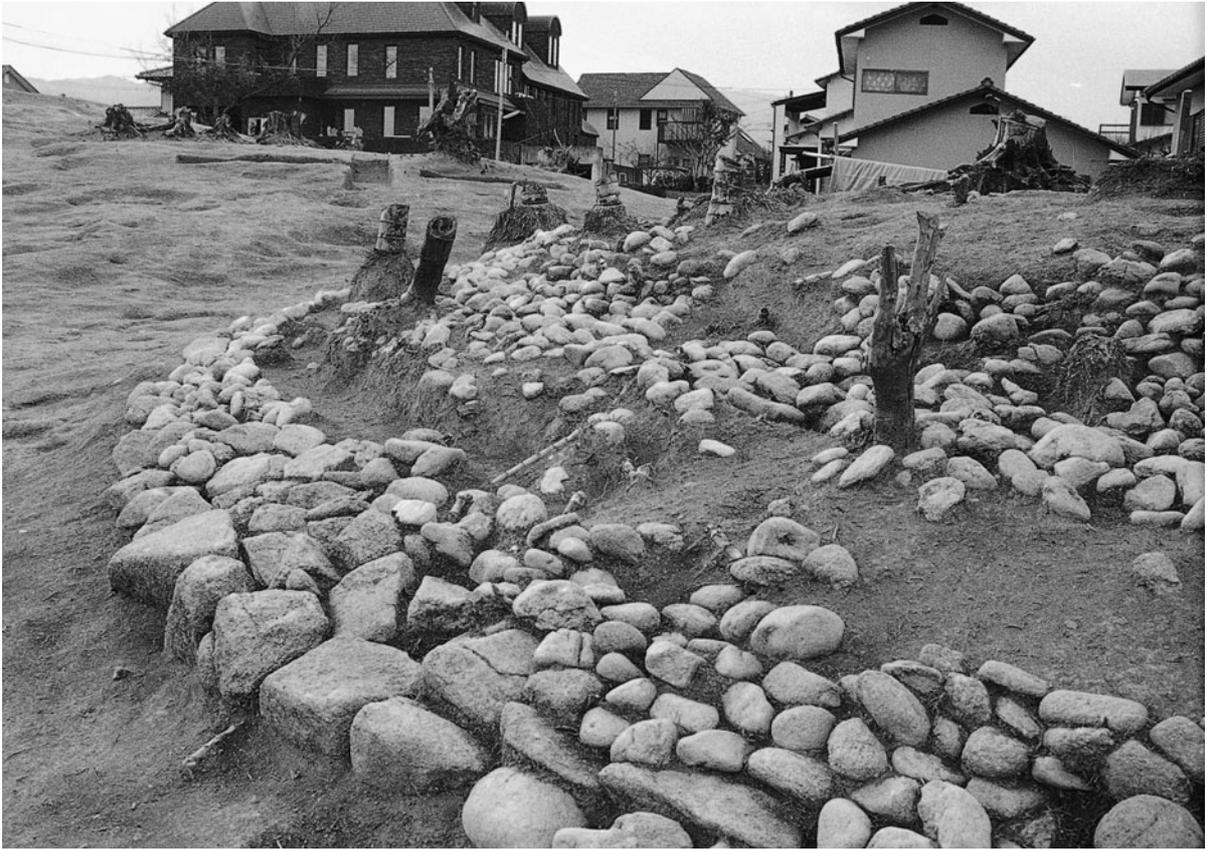
2) 4号墳北西面葺石構築状況(西から)



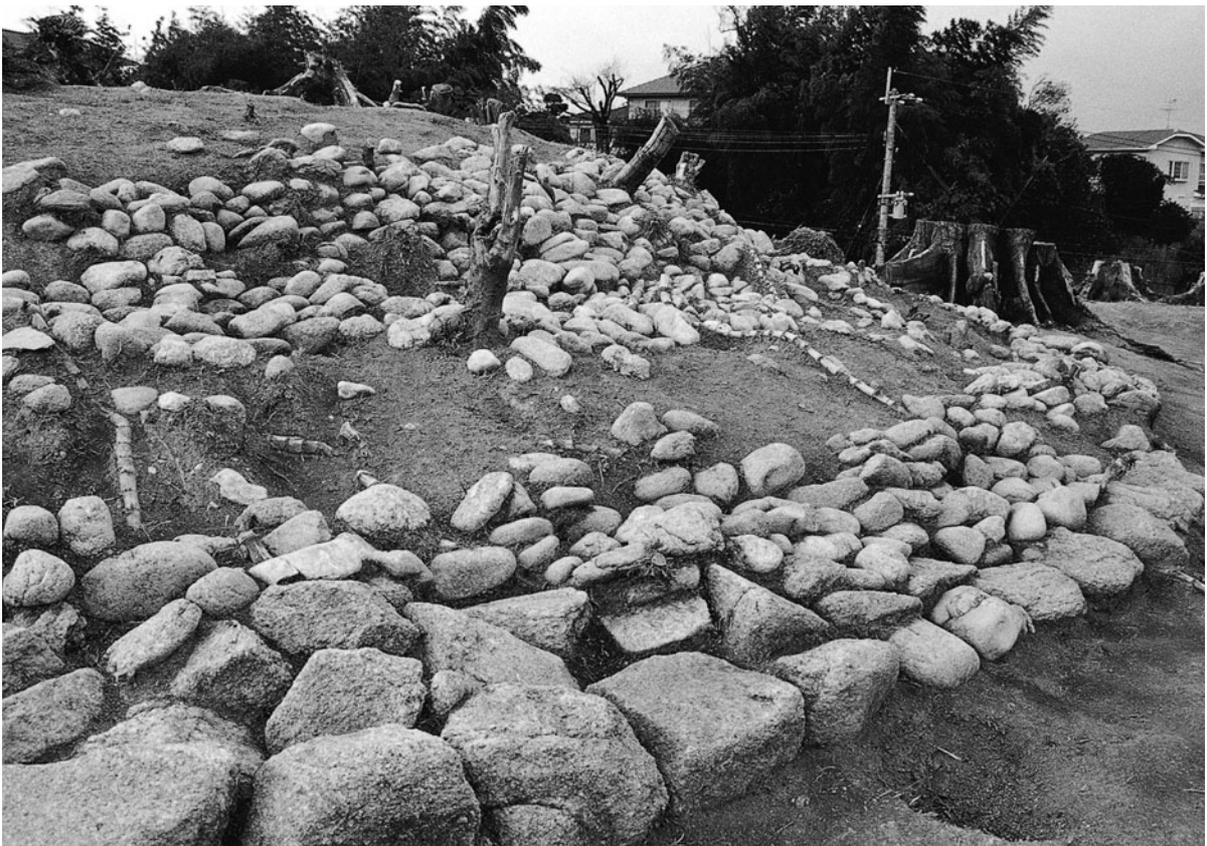
1) 4号墳南西面葺石構築状況(西から)



2) 4号墳南面葺石基石構築状況(南から)



1) 4号墳南西面葺石構築状況(南から)



2) 4号墳南東面葺石構築状況(南から)



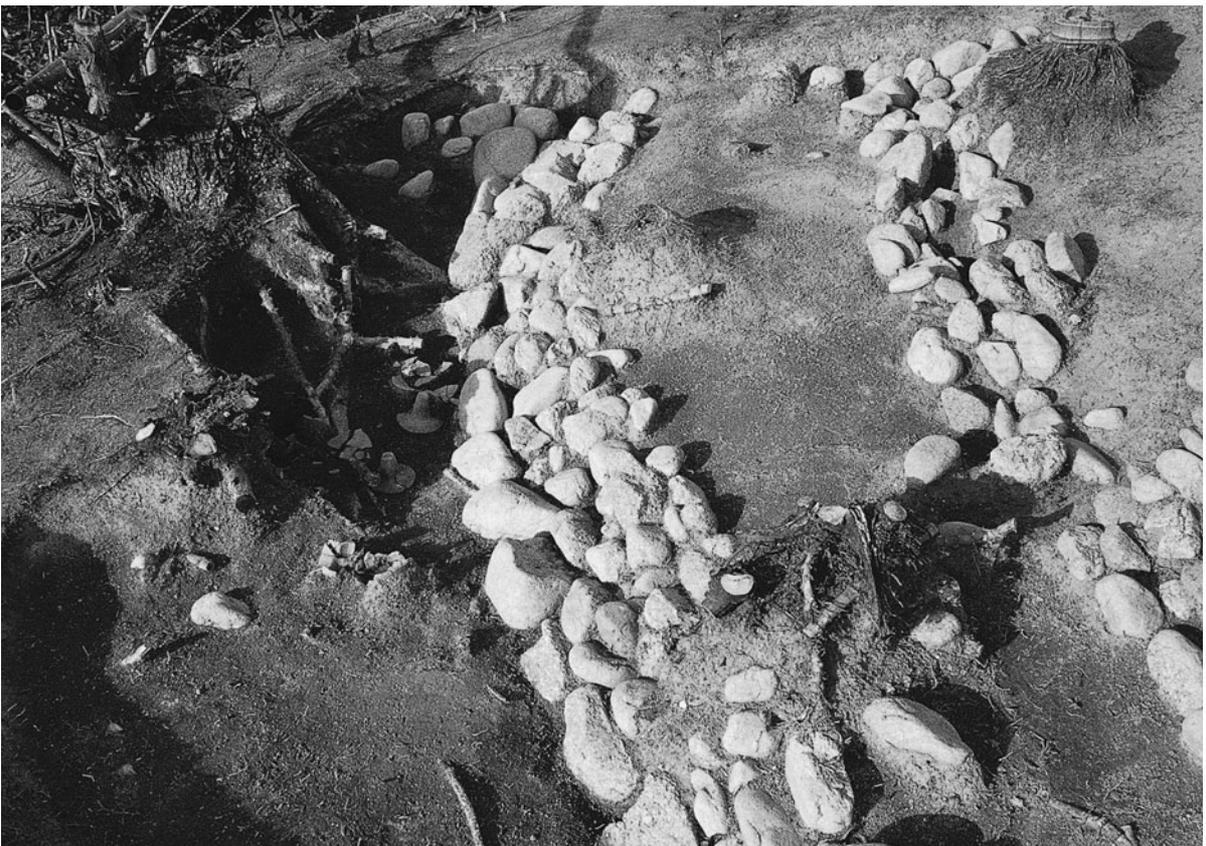
1) 4号墳北東面葺石構築状況(北東から)



2) 4号墳東面葺石構築状況(東から)



1) 4号墳西側墳裾供献土器検出状況(東から)



2) 4号墳西側墳裾供献土器検出状況(南から)



1) 4号墳西側墳裾供献土器検出状況(東から)



2) 4号墳西側墳裾供献土器検出状況(南から)



1) 4号墳西側墳裾供献土器検出状況(西から)



2) 4号墳西側墳裾供献土器検出状況(西から)



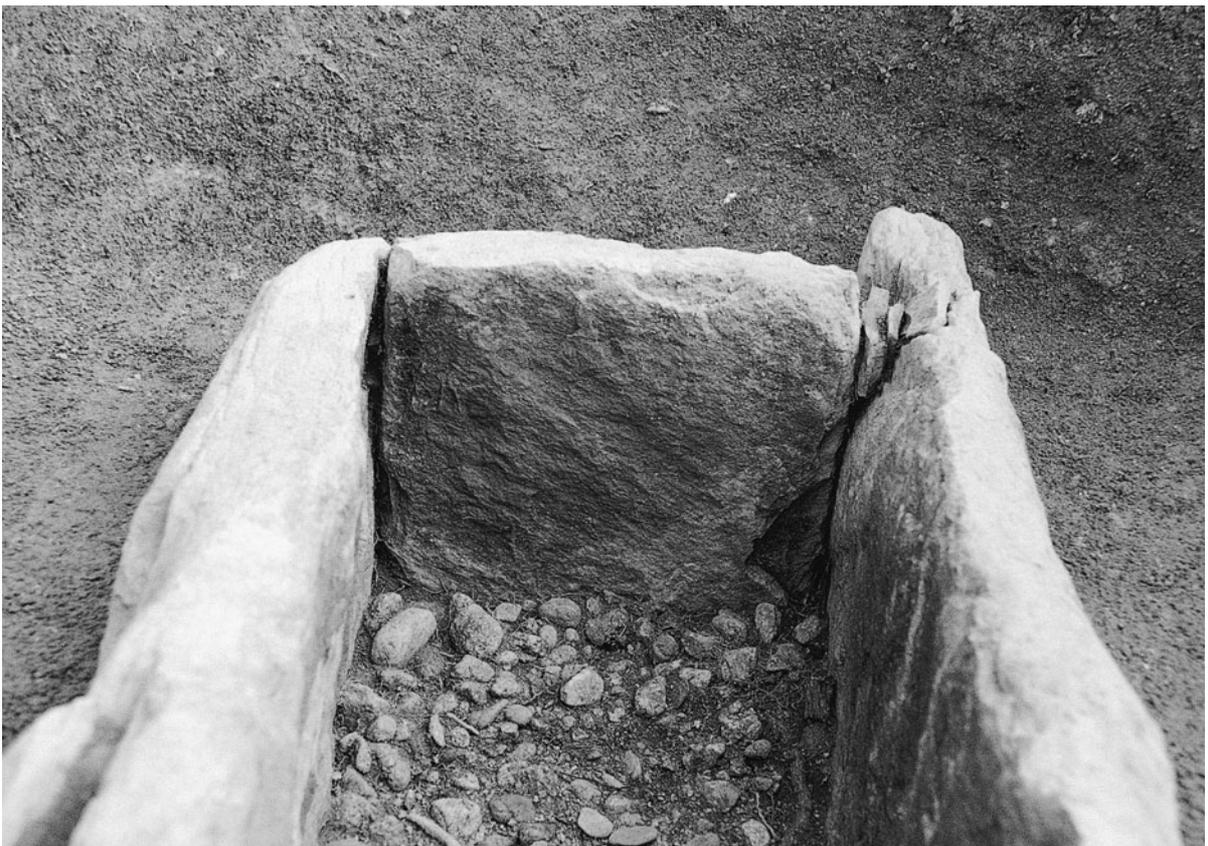
1) 4号墳主体部完掘状況(北から)



2) 4号墳主体部完掘状況(東から)



1) 4号墳主体部北側小口壁(南から)



2) 4号墳主体部南側小口壁(北から)



1) 4号墳墓壙半裁状況(南から)



2) 4号墳主体部墓壙半裁状況(南から)



1) 4号墳主体部半裁状況(南から)



2) 4号墳土層断面(南から)



1) 5号墳調査前墳丘全景(東から)



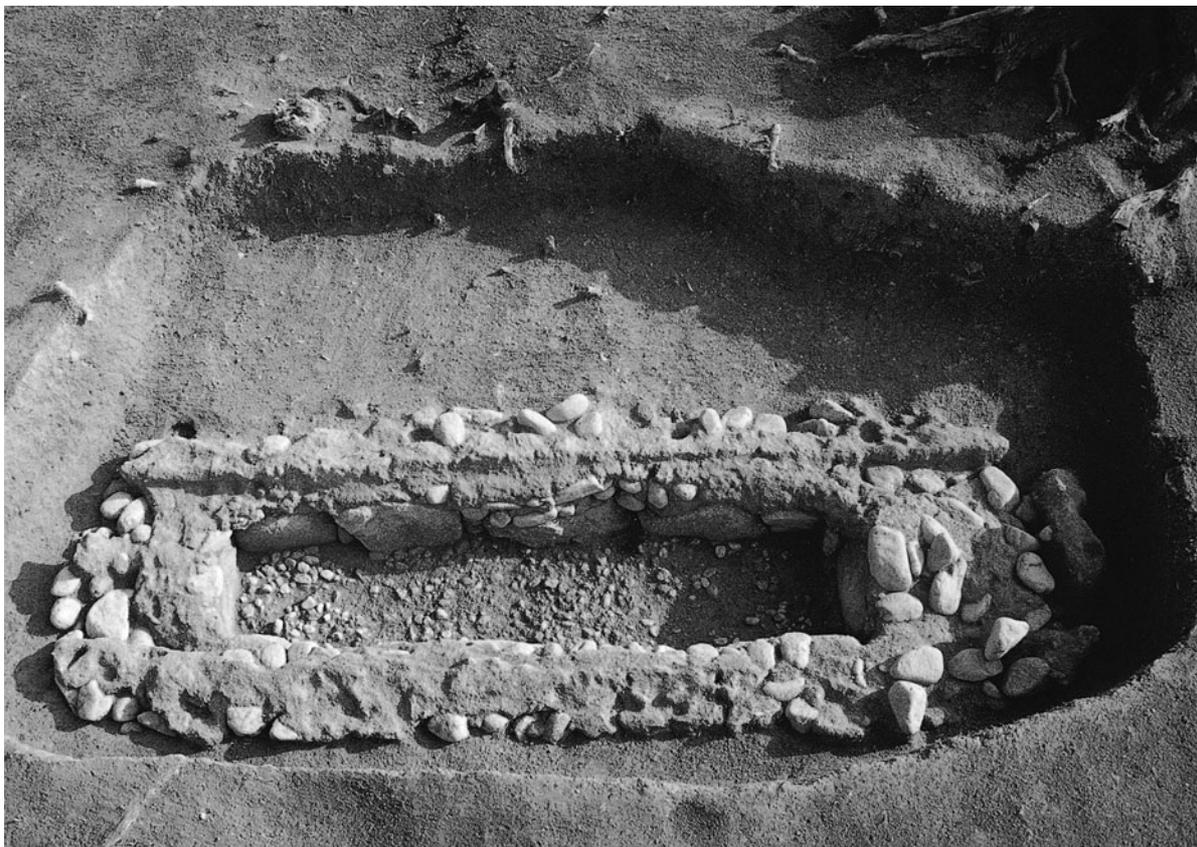
2) 5号墳地山整形全景(北から)



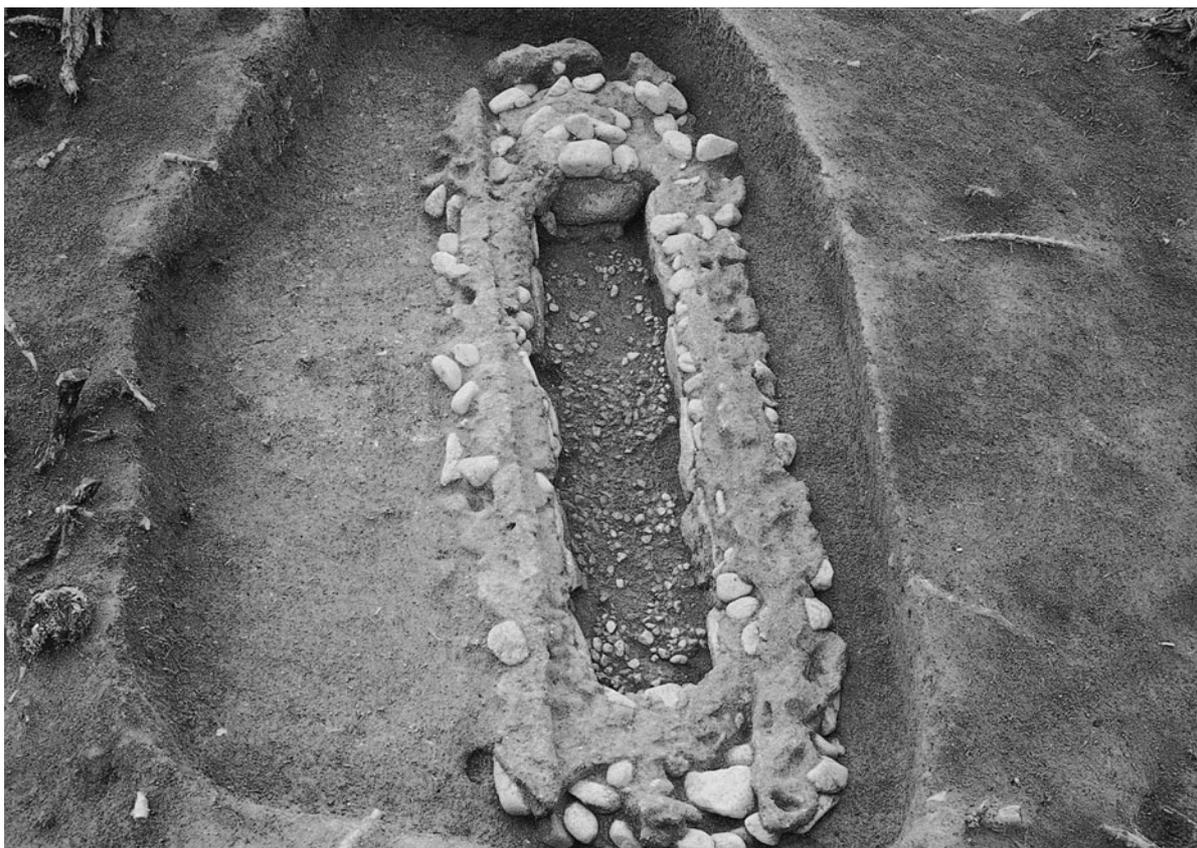
1) 8号墳調査前填丘全景(南から)



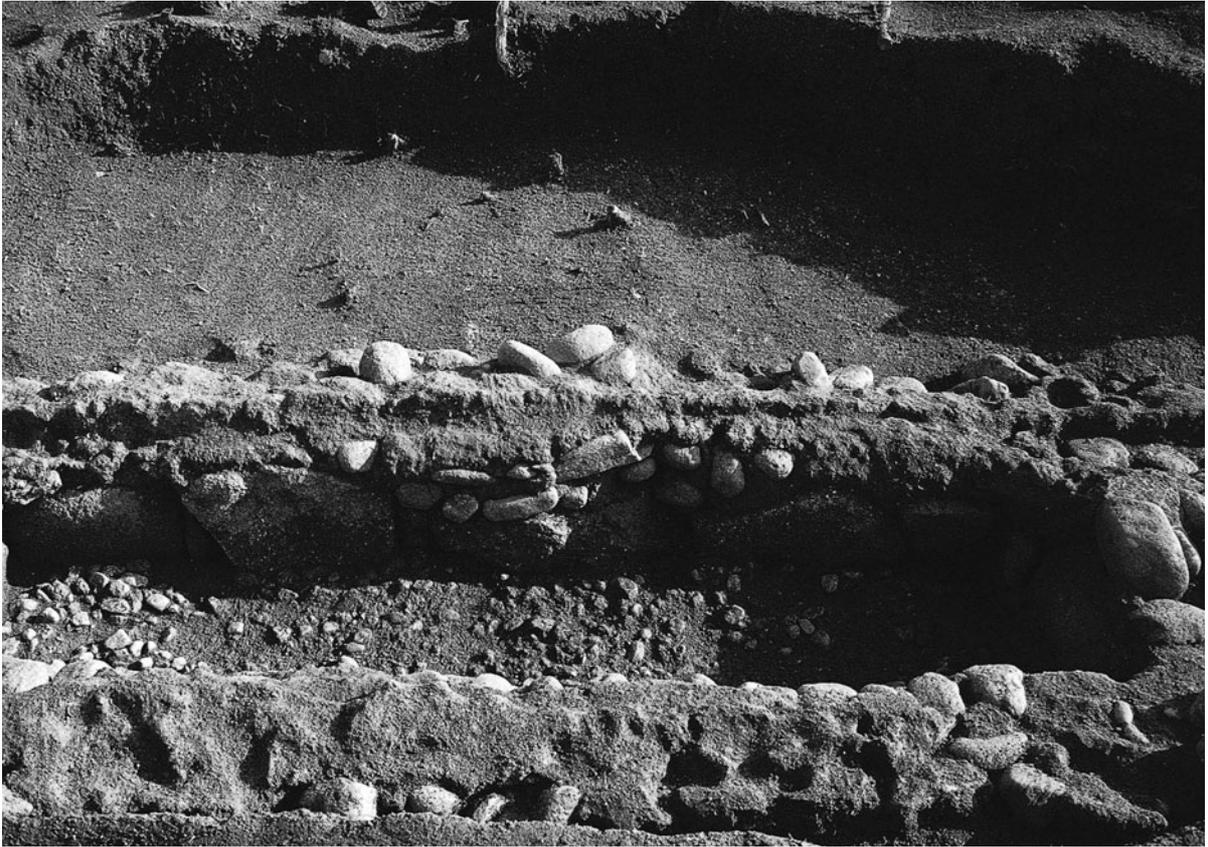
2) 8号墳地山整形全景(南から)



1) 8号墳主体部検出状況(北から)



2) 8号墳主体部検出状況(東から)



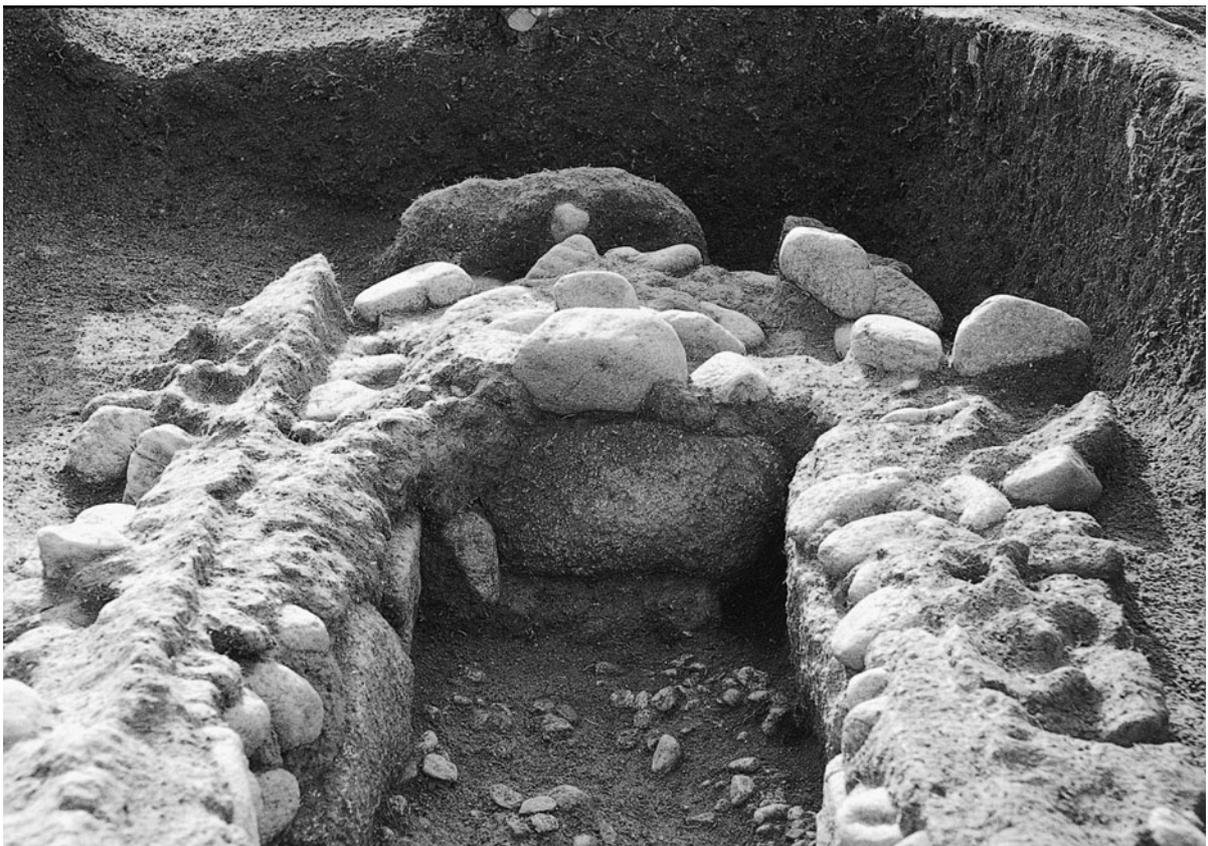
1) 8号墳主体部覆蓋痕(北から)



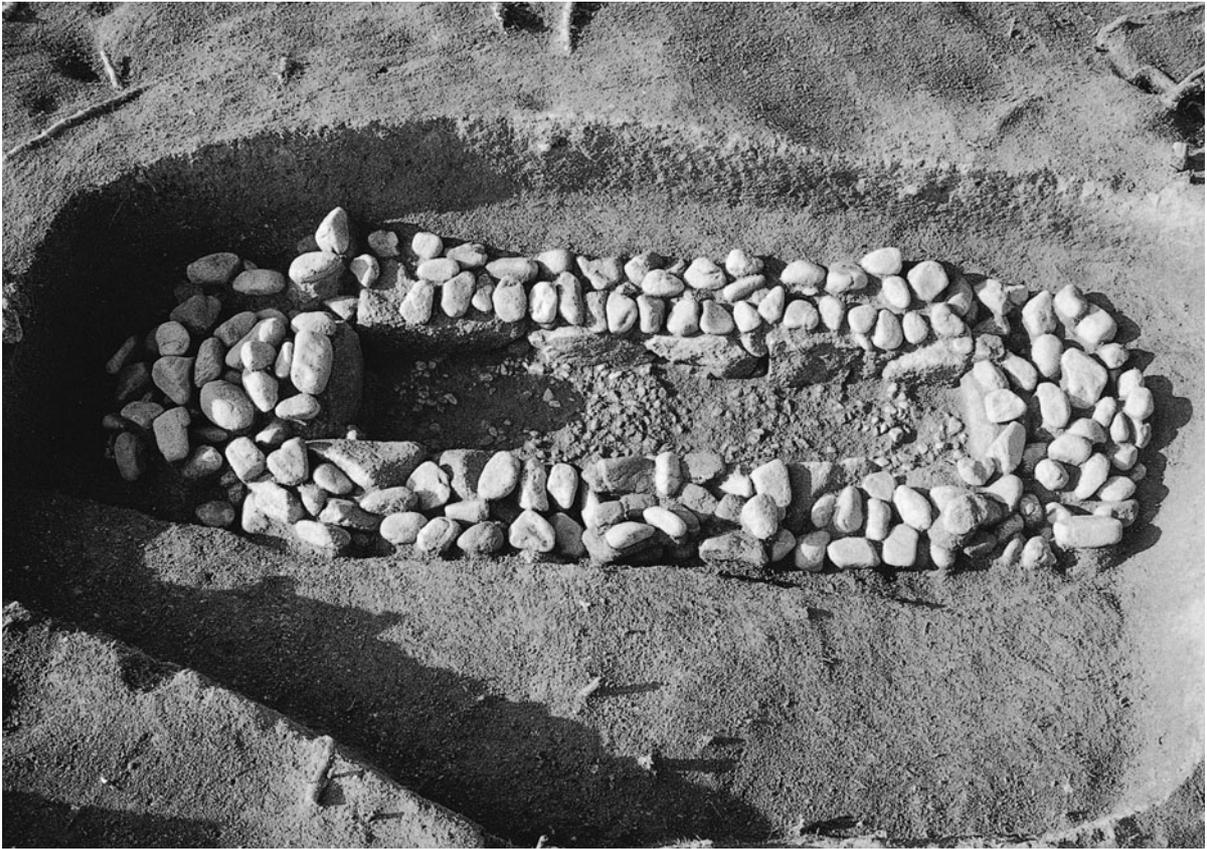
2) 8号墳主体部東小口壁覆蓋痕(北から)



1) 8号墳主体部東小口壁覆蓋痕(西から)



2) 8号墳主体部西小口壁覆蓋痕(東から)



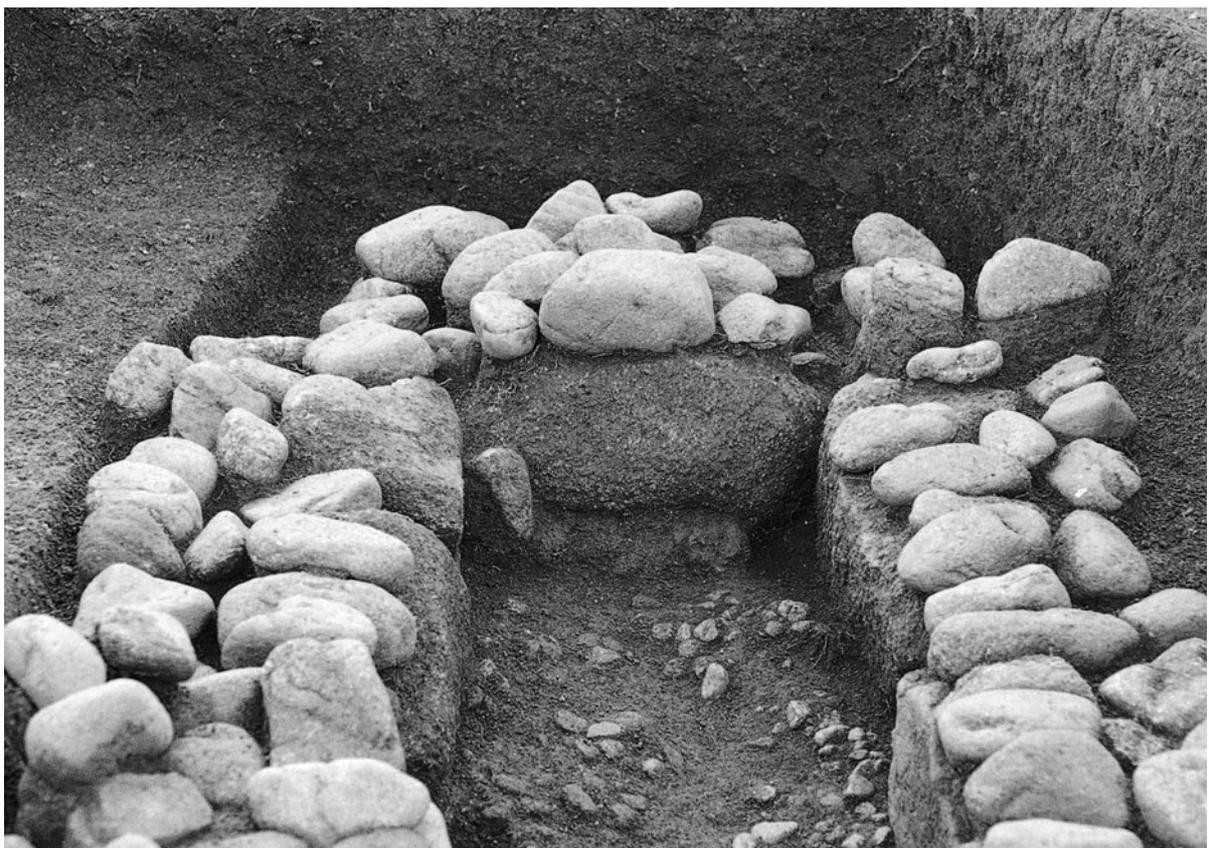
1) 8号墳主体部全景(南から)



2) 8号墳主体部西側壁(北から)



1) 8号墳主体部東側壁（西から）



2) 8号墳主体部西小口壁（東から）



1) 8号墳裏込石除去後の南側壁(南から)



2) 8号墳主体部縦断面(南から)



1) 11号土器置遺構竈・小型丸底壺出土状況(北から)



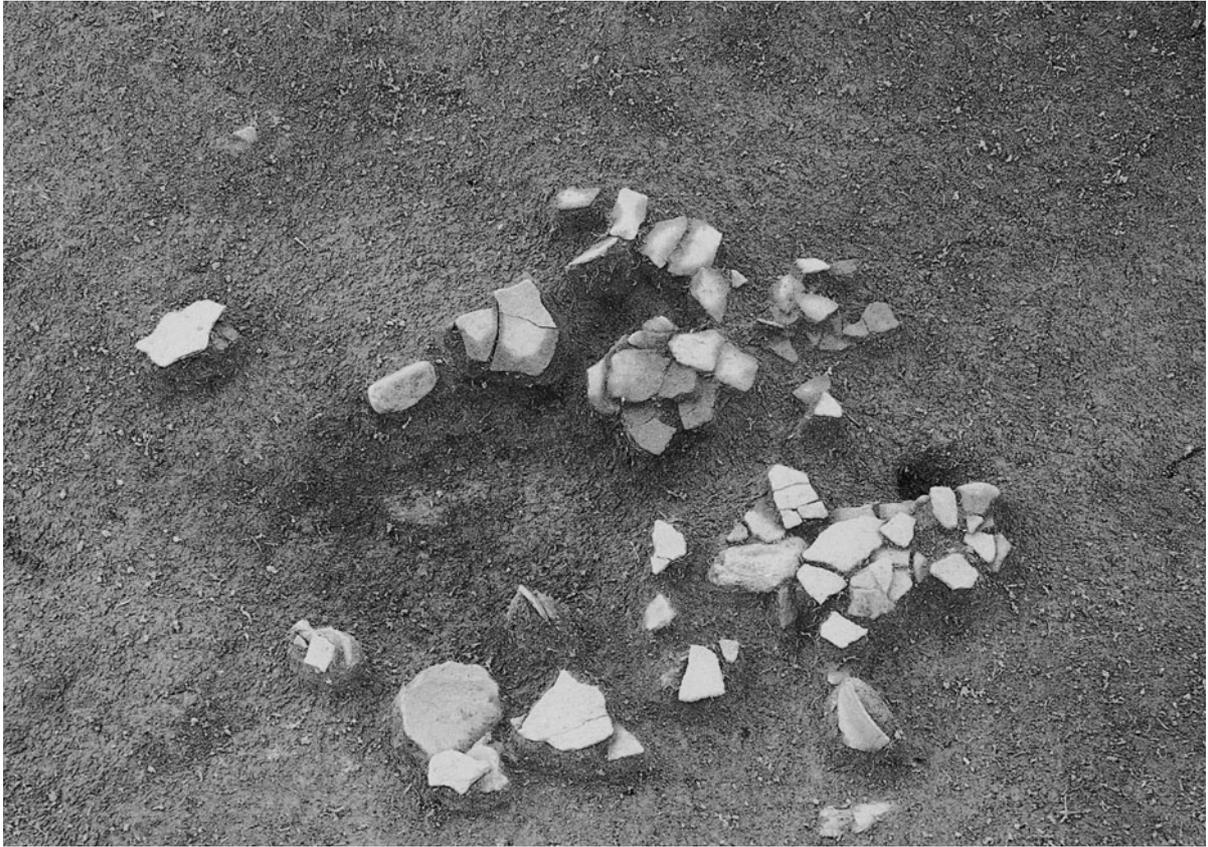
2) 12号焼土壙全景(東から)



1) 13号石組遺構(南から)



2) 15号石組遺構全景(西から)



1) 14号土壌全景 (北から)



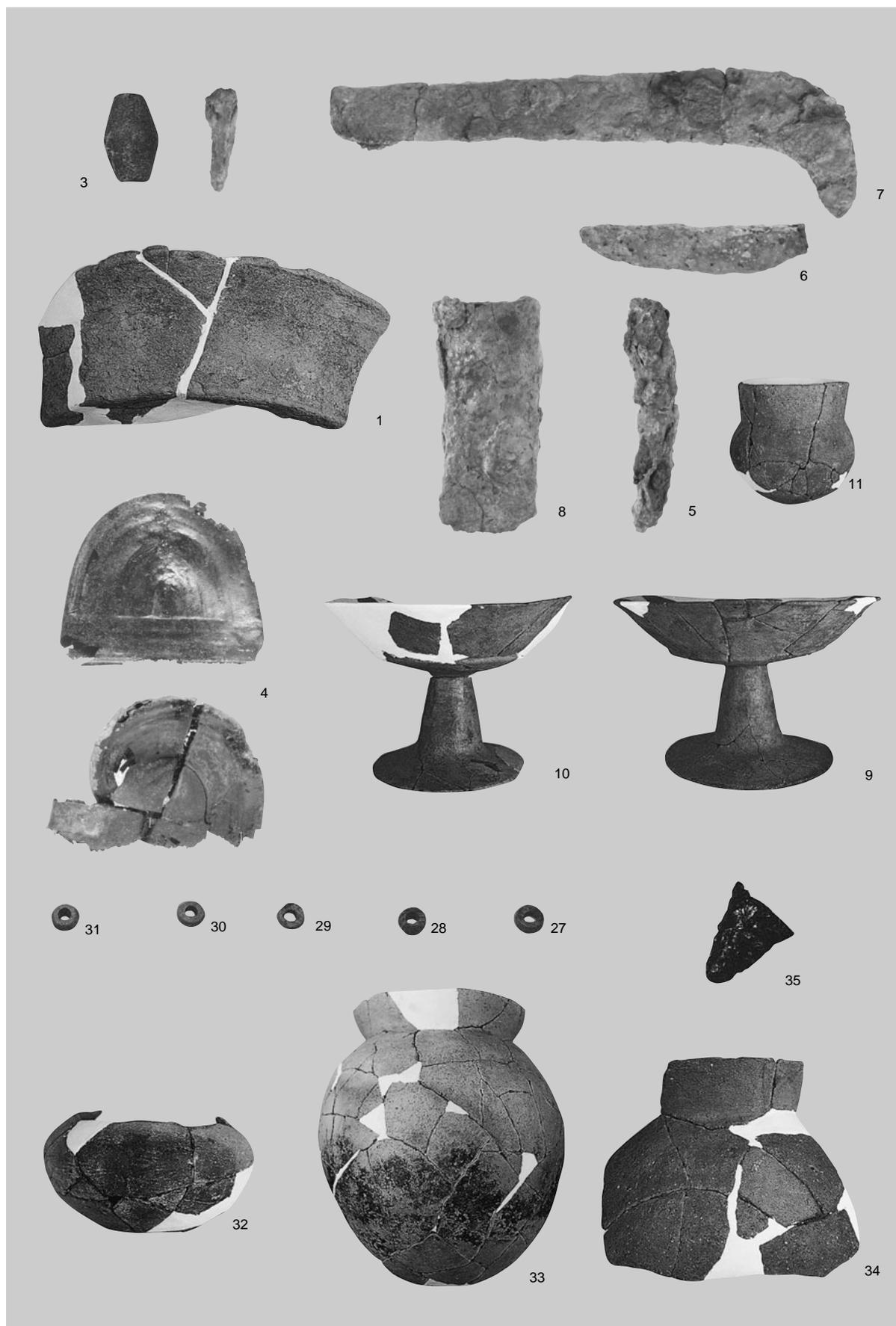
2) 16号墓全景 (南から)



1) 17号貯蔵穴全景(北から)



2) 18号貯蔵穴・19号土壙全景(西から)



卯内尺古墳群出土遺物（縮尺不同）

報 告 書 抄 録

ふりがな	うないじゃくこふんぐん							
書名	卯内尺古墳群							
副書名	卯内尺古墳群第2次調査							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1142集							
編著者名	小林義彦 谷直子 高椋浩史 米元史織 中橋孝博							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うないじゃくこふんぐん 卯内尺古墳群 だいじちょうさ 第2次調査	ふくおかしみなみく 福岡市南区 まいだし5ちょうめ 老司3丁目545-3外	40130	153	33 32 2	130 25 15	20100827 ~ 20110128	2,540	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
卯内尺古墳群 第2次調査	古墳群・ 集落遺構	弥生・古墳時代・中世	円墳・貯蔵穴・土壙・ 中世墓	土師器・鉄製品・ 石器	2段築成の円墳と 低墳丘墳			
要 約	<p>卯内尺古墳群は、福岡平野の西縁を画する油山山塊の片縄山から派生する舌状丘陵上に立地する小古墳群である。この舌状丘陵の基部には、卯内尺古墳や老司古墳などの前方後円墳が立地している。前方後円墳の卯内尺古墳と小円墳群の間は120mの距離があり、この間に円墳が築かれていた可能性は否定できないが、現状では墳丘に葺石を敷いた二段築成の円墳(4号墳)と低墳丘墳の5基からなる。このうち2段築成の円墳の内部主体部は箱式石棺で、棺内には4人の被葬者が合葬されていた。棺内には漆塗櫛が、棺外の小口壁上には鉄斧と鉄鎌が副葬されていた。西墳裾には丹塗高坏と小型丸底壺が供献されていた。また、低墳丘墳の3号墳の内部主体部は木蓋土壙墓、8号墳は木蓋で覆った箱式石棺墓で、棺内には滑石製白玉が副葬されていた。同時に箱式石棺の裏込めには4号墳の葺石が転用されていた。時期的には、4号墳は5世紀初頭、2・3・8号墳は、4号墳に続く5世紀前半代と考えられる。また、古墳とは別に弥生時代の貯蔵穴や土壙のほか中世の墓や時期不明の石組遺構が検出された。</p>							

卯内尺古墳群

卯内尺古墳群第2次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1142集

2012年(平成24年)3月16日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵3-21-10
